博士論文

日本語・中国語における疑問文・文末終助詞の対照研究

平成 30 年 9 月

広島大学大学院総合科学研究科
総合科学専攻
杜 暁磊

要旨

言語学では、1980 年代から統語論・意味論の立場から WH 移動や WH 疑問詞、文末終助詞などについての研究が盛んに行われた。本研究はこのような研究背景を踏まえて、中日両言語における疑問文と文末終助詞の対照研究を行った。疑問文は、主に中日両言語の「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文を中心に考察した（第 2 章）。文末終助詞は、重要な文末終助詞の「か」とそれに対応している“吗”を検討した（第 3 章と第 4 章）。具体的には以下の通りである。

「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文については、本論文は日本語・中国語における構文の差を考察対象にしたが、それは会話環境によって意味が変化しないので、語用論との関係は弱い。したがって、語用論の立場から研究する必要がないので、統語論・意味論の立場のみから考察を行った。

日本語多重 WH 疑問文では、目的語は必ず付加部の左側にある。たとえば、WH 句が二つある（目的語「何」と付加部「なぜ」）場合、目的語「何」は付加部「なぜ」の左に生起しなければならない。つまり、「なぜ」を含む日本語多重 WH 疑問文において、疑問詞の先行関係は固定している。即ち、項の疑問詞（「誰が」「何を」）が「なぜ」よりも一つでも先行しなくてはならない。中国語の“为什么（なぜ）”を含む文では、単文においては、“为什么（なぜ）”と他の通常の WH 句は共起できず、競合関係があり、複文になると、競合関係が消える。しかし、この時、“为什么（なぜ）”は狭いスコープでのみ解釈され、他の名詞的な WH 疑問詞は広いスコープでのみ解釈される。このような相違点について、統語論・意味論の立場から考察を行った。結論は以下の通りである。

統語論的には、日本語「なぜ」は他の名詞的な疑問詞と単文において、競合関係がなく、共起できるのは、日本語の名詞的な WH 疑問詞の OP は DP／PP に基底生成し、スコープ範囲以内の疑問詞を無差別束縛して、文頭に移動し、文頭に基底生成する「なぜ」の sentential operator に付加するので、競合関係が起こらないからである。中国語“为什么（なぜ）”は単文において他の名詞的な WH 疑問詞と競合関係があり、共起できないが、複文において競合関係が消えるのは、中国語“为什么”は sentential operator として文頭に基底生成し、名詞的な WH 疑問詞の OP も

基底生成するので、競合関係が起こり、複文の場合、［Spec CP］が二つあるので、それぞれ基底生成して、共起できるからである。意味論的には、両言語において、「なぜ／为什么」は両方とも指示関数の基準になれず、関数による結果だけを表すことができる。すなわち、多重 WH 疑問文において、「なぜ／为什么」は狭いスコープを取り、他の疑問詞は広いスコープを取る解釈しかない。日本語において、指示関数の基準を表す名詞的な WH 疑問詞は先行し、関数による結果を表す「なぜ」は後に出現する。中国語においては、WH 疑問詞の間に先行関係がないが、単文・複文に反映される。

まとめると、中日両言語における「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文の相違点について、新しい説明の仕方を提案した。この問題については、Takita and Yang (2014)が Probe-Goal システムを利用して、Valuation Condition を提案した。しかし、多重 WH 疑問文には WH 疑問詞が多数あるので、全部に素性チェックを行うことは複雑すぎる。また、名詞的な WH 疑問詞と副詞的な WH 疑問詞を区別せずに素性チェックするのは不適切である。また、中国語の「为什么（なぜ）」文では、名詞句的な WH 疑問詞と疑問 OP にはそれぞれ素性が一つだけであるので、全部の素性をチェックしなければならないという Valuation Condition の条件が満たされていない。したがって、Valuation Condition はうまく機能しない。それに対して、本論文は第 2 章で、意味上で、「なぜ」／“为什么”は両方とも指示関数の基準になれず、関数による結果だけを表すという同じ本質を持っているが、構造上では、日本語の名詞句的な WH 疑問詞と中国語の名詞的な WH 疑問詞の疑問 OP の基底生成位置が異なるので、「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文の相違点が現れたからであると新しい説明の仕方を提案した。この新しい説明の仕方は Valuation Condition より簡単であり、複雑な言語現象を明確に説明できる。

文末終助詞の「か」と“吗”の対照研究については、本論文は二つの立場から考察を行った。それぞれ語用論と通時的発展過程の考察を合わせて研究することと、統語論と意味論を合わせて研究することである。

語用論と通時的発展過程の考察を合わせて文末終助詞の「か」と“吗”を研究することは第 3 章で行った。語用論における発話行為理論を利用して、「か」が「断定型」「表出型」「行為指示型」と三つの種類の文に使え、それぞれ言語の記述機能、表出機能、情報提供の依頼機能を果たしているが、中国語“吗”は「行為指示

型」だけに使え、情報提供の依頼機能を果たしていると指摘した。さらに、歴史的発展過程から、そのような相違点が生じる原因を究明した。歴史上、日本語では、係り結びがあったが、係り結びが崩壊するとともに、係り結びの小辞「か」は消失したのではなく、強調された語の後から文末に追いやられた。係り結びは反問、逆接、感嘆などを表すことができるので、文末に追いやられた小辞の「か」も疑問、感嘆などを表せるのは当然のことである。また、中国語の古文では、係り結びの現象がなく、WH 疑問文は WH 疑問詞の前置で、Yes／No 疑問文は文末終助詞で疑問を表す。さらに、“吗”の以前の形“無”は Yes／No 疑問文だけに使っていたので、“吗”は同じように、Yes／No 疑問文だけに使い、「行為指示型」の文だけに属し、情報提供の依頼機能のみを果たすのは不思議ではないと考えられる。

そして、第 4 章で、統語論・意味論の立場から、「か」と“吗”の対照研究を行った。

統語論においては、Hashimoto (2015)が感覚形容詞の人称制限について、会話文における感覚形容詞述語文において、形容詞の後ろにゼロの Mod を設定し、その Mod の判断者は［Spec SA］にあるゼロ代名詞によって話し手に制限されているという分析を行った。その先行研究を踏まえて、感嘆文文末の「か」は表出を表し、「私」だけの感覚しか表出できないという人称制限もあるので、感嘆の「か」は感覚形容詞述語文文末のゼロの Mod と同じ位置にあると考えられる。また、それは Force とする疑問の「か」と、［Spec SA］にあるゼロ代名詞によって話し手・聞き手に制限されると指摘した。

意味論において、文の真理値と関わる要素が「可能世界 world」「時間 time」の他に、「判断者 judge」にも関係があるという Stephenson (2006, 2007)の説を踏まえて、「か」を含む文は情報を話し手から表出する、あるいは、聞き手から要請するので、選言関数である「か」が表すモダリティは情報の提供者と関連性があると考えられ、情報の提供者が聞き手である場合、「か」が疑問を表し、文中の名詞句か WH 疑問詞は聞き手にとって普通の値を取り、情報の提供者が話し手である場合、「か」が感嘆を表し、文中の名詞句か WH 疑問詞は話し手にとって、予想外の値（極値）を取ると指摘した。

まとめると、第 3、4 章の独自性は以下の通りである。

“吗”については、それが文の中のある名詞句に絞ることを前提として、文全体

をフォーカスとして質問することを提案した。また、WH 疑問文は WH 疑問詞の移動によって疑問を表し、Yes／No 疑問文は文末終助詞の出現によって疑問を表すという中国語古文の疑問表現システムを発見した。

名詞句及び疑問文にある「か」は選言関数であるという先行研究を踏まえて、話し手・聞き手の要素を考慮し、疑問文の「か」が聞き手にとって普通の値を取り、感嘆の「か」が話し手にとって予想外の値（極値）を取ると主張し、より包括的に感嘆の「か」も選言であるとまとめた。つまり、「か」が表すモダリティに情報の提供者（聞き手・話し手）パラメーターを加えることを通して、感嘆の「か」も含む日本語すべての「か」が選言であると統一な説明ができ、一定程度、選言の概念を拡張した。

目次

第 1 章 序論 1
1.1 研究方法 1
1.1.1 統語論と意味論を合わせて研究する方法 1
1.1.2 発話行為理論と歴史発展経緯の考察を合わせて研究する方法 6
1.2 研究の理論背景 9
1.2.1 OP(Operator)について 10
1.2.2 SAP(Speech Act Phrase)について 17
1.2.3 疑問文と文末終助詞の関係について 19
1.3 研究の対象 23
1.3.1 疑問文 24
1.3.2 文末終助詞 25
1.4 論文の構成 26
第 2 章 統語論・意味論における「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文の対照研究 29
2.1 問題提起 29
2.2 先行研究 33
2.3 統語論における解釈 38
2.3.1 統語論における日本語の「なぜ」 38
2.3.2 統語論における中国語“为什么（なぜ）” 41
2.3.3 2.3 節のまとめ 43
2.4 意味論における考察 44
2.4.1 意味論における日本語「なぜ」 44
2.4.2 意味論における中国語“为什么（なぜ）” 47
2.4.3 2.4 節のまとめ 55
2.5 第 2 章のまとめ 55
第 3 章 発話行為理論における「か」と“吗”の対照研究 57
3.1 問題提起 57
3.2 先行研究 58

3.3 考察 60
3.3.1 疑問における「か」と“吗” 61
3.3.1.1 疑問における日本語「か」 61
3.3.1.2 疑問における中国語“吗” 66
3.3.2 独り言における日本語「か」と独り言に使えない中国語“吗” 69
3.3.2.1 独り言における日本語「か」 69
3.3.2.2 独り言に使えない中国語“吗” 70
3.3.3 感嘆文における日本語「か」と感嘆文に使えない中国語“吗” 71
3.3.3.1 感嘆文における日本語「か」 72
3.3.3.2 感嘆文に使えない中国語“吗” 73
3.3.4 三人称小説の地の文における「か」と三人称小説の地の文に使えない“吗” 74
3.3.4.1 三人称小説の地の文における日本語「か」 74
3.3.4.2 三人称小説の地の文に使えない中国語“吗” 76
3.3.5 3.3 節のまとめ 77
3.4 日本語「か」と中国語“吗”がなぜこれほど異なるのか？ 78
3.4.1 日本語「か」 79
3.4.2 中国語“吗” 81
3.5 第 3 章のまとめ 84
第 4 章 統語論・意味論における「か」と“吗”の対照研究 85
4.1 問題提起 85
4.2 先行研究 86
4.2.1 統語論における「か」と“吗”の先行研究 86
4.2.1.1 統語論における「か」の先行研究 86
4.2.1.2 統語論における“吗”の先行研究 89
4.2.2 意味論における「か」と“吗”の先行研究 90
4.2.2.1 意味論における「か」の先行研究 90
4.2.2.2 意味論における“吗”の先行研究 94
4.3 考察 94
4.3.1 統語論における「か」と“吗”について 94

4.3.1.1 統語論における「か」 94
4.3.1.1.1 ReportP／NonreportP について 95
4.3.1.1.2 ForceP について 99
4.3.1.1.3 疑問の「か」について 101
4.3.1.1.4 感嘆の「か」について 111
4.3.1.1.5 「か」による統語論 115
4.3.1.2 統語論における“吗” 116
4.3.2 意味論における「か」と“吗”について 122
4.3.2.1 意味論における「か」 122
4.3.2.1.1 疑問の「か」は聞き手にとって普通の値を取る 123
4.3.2.1.2 感嘆の「か」は話者にとって予想外の値（極値）を取る 125
4.3.2.1.3 「か」についての意味論 128
4.3.2.1.4 特殊な発話環境を必要とする WH 句 132
4.3.2.2 意味論における“吗” 133
4.4 第 4 章のまとめ 136
第 5 章 結論と今後の展望 138
5.1 本研究のまとめ 138
5.2 本研究の独自性 140
5.3 本研究の意義 141
5.4 今後の展望 142
参考文献 144

略称表

略称	意味
CP	Complementizer Phrase
DET	Determiner
DP	Determiner Phrase
FinP	Finite Phrase
ForceP	Force Phrase
Mod	Modal
ModP	Modal Phrase
NonreportP	Nonreport Phrase
NP	Noun Phrase
OP	Operator
PP	Prepositional/Postpositional Phrase
ReportP	Report Phrase
S	Sentence
SA	Speech Act
SAP	Speech Act Phrase
sen	Sentient
SFP	Sentence Final Particle
VP	Verb Phrase

記号表

記号	意味
λ	ラムダ演算子
∃	存在数量詞
¬	否定
∈	集合の要素である
∨	選言
tval	真理値を求める

第 1 章 序論

1.1 研究方法

1.1.1 統語論と意味論を合わせて研究する方法

言語学(Linguistics)は 19 世紀まで歴史言語学中心の傾向であった。19 世紀に入り、スイスの言語学者ソシュール(Ferdinand de Saussure, 1857-1913)は言語の構造や体系の重要性を強調し、構造主義言語学の出発点を構築した。彼の影響で、それまで通時的に研究されていた言語学は統語論や意味論などに細分化するようになった。

統語論(Syntax)は文の構造を研究する分野である。それは、人間の言語において、文が構成される仕組み、またはそれを扱う言語学の部門の一つである。換言すれば、普通我々は文が表す音を聞いて、その意味を理解するが、音と意味との間にはその両者を結びつける仲介役として統語構造が存在する。この統語構造の諸特徴を研究する領域を統語論と言う。統語構造は樹形図（枝分かれ図とも言う）で表示することができる。

(1) The snow covered the mountain.[1]

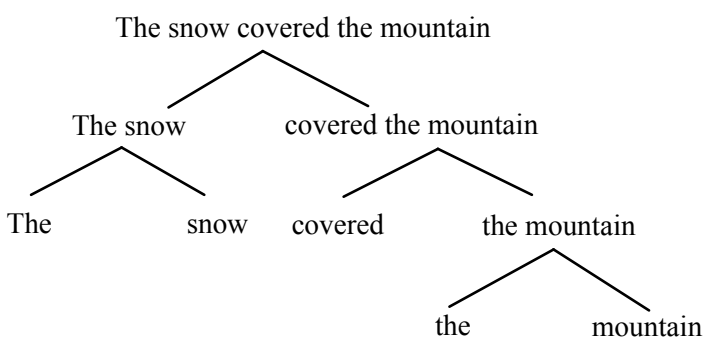


図 1-1 例文(1)による樹形図 1

[1] 本稿では、出典を明示しなかった例文は筆者の作例であり、それに対する訳文があれば、それは筆者の訳文である。以下、出典のない例文・訳文についても全て同様である。

この図では、(1)の左から右までの語順は線形に保たれている。また、語と語の間の上下関係という階層関係を示している。例えば、the snow と covered the mountain はその統語構造において、同じレベルのものであり、the snow は the mountain と両方とも名詞であるが、前者は後者の上にあり、階層レベルが異なる。また、その図は語の間に一定のまとまりがあることを示している。例えば、the と snow、the と mountain、covered と the mountain は、それぞれ、一つのまとまりをなしているのに対して、snow と covered、covered と the は一つのまとまりをなしていない。

The と snow、covered と the mountain のように、一つのまとまりを成す要素を構成素（constituent）と言い、the と snow が一つの構成素を作り、covered と the mountain がより大きな構成素を作り、その構成素が the snow と結びついて文を構成するというように、階層構造（hierarchical structure）をなしている。つまり、統語構造は構成素間に見られる階層関係を表している。

以上の図を踏まえて、名詞句を NP に、定冠詞 the を DET に、動詞句を Verb Phrase （以下、VP と省略する）に書き替えると、以下の図 1-2 になる。この図は上の図と同じ情報を表している。

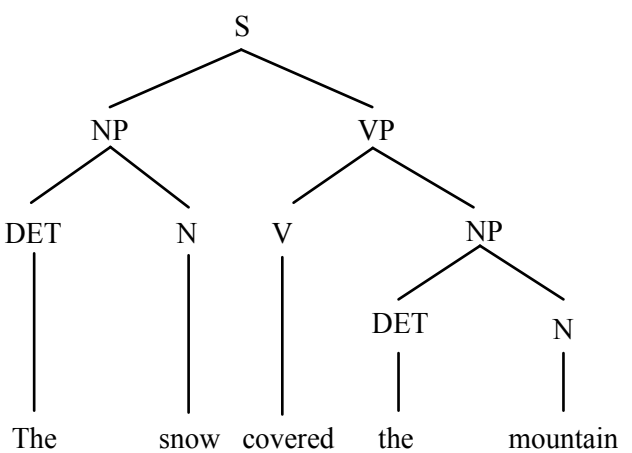


図 1-2 例文(1)による樹形図 2

以上、例文(1)に対応する樹形図についての説明からわかるように、ある文について、その樹形図によって、語の線形順序、構成素とその階層構造、構成素の統語

範疇を示すことができる。さらに、言語を数学に例えると、構造を考察対象にする統語論は言語の幾何学と言える。幾何学は図形や空間の性質について研究する数学の分野であり、それは具体的な平面や空間の図形を扱っている。統語論は二分かれの樹形図を使い、言語の空間的構造を研究する分野として、幾何学と似ている。

また、ある文について、音声を表したものを音声表示と呼び、その諸特徴を扱う分野を音韻論と言う。意味を表したものを意味表示と呼び、その諸特徴を扱う分野を意味論と言う。これら三つの分野の関係は次のようにまとめられる（図 1-3）。つまり、文法によって生成される構造は、統語表示・音声表示・意味表示の三つの表示から成り立つと言える。本論文は音韻論には触れない。次に、意味論について述べる。

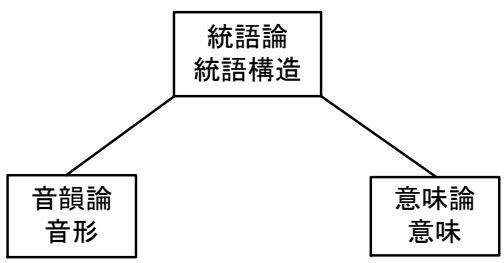


図 1-3 音韻論・統語論・意味論による関係図（中村捷ほか 2001: 13）

意味論(Semantics)とは、言語学において、統語論と対置される分野であり、意味論は自然言語の意味を扱うものである。例えば、動詞は何を示すか。「先」という単語の意味はどのような素性で構成されているかなどである。

意味論の範囲は広く、研究対象や方法などによって、形式意味論、認知意味論、語彙意味論などに細分化されている。

本論文は意味論の一つである形式意味論を利用して、言語現象を考察する。

形式意味論(Formal Semantics)とは、自然言語の意味を形式的(formal)に表す意味論である。意味の構成や解釈の仕方が形式的に構成的に行われる学問として、論理学及び離散数学などと緊密に関係している。それは言語表現が表す意味を数学

的な記号に書き替え、計算することによって、言語の本質を把握することができる。以下、選言[2]と存在数量詞の関係を対応する計算過程を使って説明する。

(2) 李さんはどこで勉強していますか[3]？

λp［∃x: x∈location, p=［Li is studying at x］］

（ある場所が存在し、李さんはそこで勉強している。そこはどこ？）

(3) 李さんは勉強していますか？

λp［p=［Li is studying］∨ p=¬［Li is studying］］

（李さんが勉強しているか、あるいは、李さんが勉強していないか、正しい答 p はどれか？）

言語における選言、連言について、考察した文献は多数ある。例えば、Gill, Harlow & Tsoulas (2004)、Fukushima (2005)、Harada & Honda (1997, 1998, 1999a, 1999b)、Harada, Honda & Noguchi (1999)、Harada & Noguchi (1992)、Haugh (2008)、Yatsushiro (2001)などである。疑問文文末の「か」は選言である(Nakanishi 2006、外池 2014a、外池 2014b、Szabolcsi 2015など)。以上の(2) (3)から見れば、文末に「か」のある文には常に存在数量詞（∃）が存在する。換言すると、選言は普通、存在数量詞とともに現れる。あるいは、存在数量詞はいつも選言によって表される。

存在数量詞と選言は共通の性質を持っていることについては膨大な研究の歴史がある。言語研究では、Lakoff (1971)などの先行研究があり、論理学では、定理の一つとして存在している。また、離散数学では Rosen (2007: 43-44)などでも言及されている。以下は形式意味論（離散数学／論理学）で証明過程を示す。

まず、存在数量詞は選言によって表されていると仮定する。

すなわち、$\exists x[p(x) \vee q(x)] \equiv (\exists x\, p(x) \vee \exists x\, q(x))$となる。

---

[2] 選言(disjunction)は論理学の結合子の一つであり、「または」「or」を指して、引数から一つを選ぶという意味で、通常「∨」で表す。例えば、命題 p、q に対して、その選言を p∨q と書く。この時、p、q は選言肢と呼ぶ。

[3] 下線部をつけたものは検討されるべき対象であり、以降は同じである。

以下、上の等式の左側と右側は等値であることを証明する。

命題pがあり、そして、$p \rightarrow (p \vee q)$は常に成立する。下の場合1は等式の左側の真理値が右側の真理値に等しいと証明する。場合2は等式の右側の真理値が左側の真理値と同じであると証明する。

場合1: tval(LHS[4]) = T[5]であれば、$(p(x) \vee q(x))$を満たす「a」が存在する。すなわち、$tval(p(a) \vee q(a)) = T$。ここで、1a、1bと二つの状況に分ける。

1a. $tval(p(a)) = T$なら、$tval(\exists x\, p(x)) = T$である。したがって、$tval(\exists x\, p(x) \vee \exists x\, q(x)) = T$。

1b. $tval(q(a)) = T$なら、$tval(\exists x\, q(x)) = T$である。したがって、$tval(\exists x\, p(x) \vee \exists x\, q(x)) = T$。

したがって、場合1では、1aであれ、1bであれ、tval(LHS) = tval(RHS[6]) = T。

場合2: tval(RHS) = Tであれば、$tval(\exists x\, p(x)) \vee (\exists x\, q(x)) = T$になる。すなわち、$tval(\exists x\, p(x)) = T$ 或いは $tval(\exists x\, q(x)) = T$。ここで、2a、2bと二つの状況に分ける。

2a. $tval(\exists x\, p(x)) = T$なら、$tval(\exists x\, p(x)) = T$を満たすことができるaが存在する。すなわち、$tval(p(a)) = T$、したがって、$tval(p(x) \vee q(x)) = T$, $tval(\exists x(p(x) \vee q(x)) = T$。

2b. $tval(\exists x\, q(x)) = T$なら、$tval(\exists x\, q(x)) = T$を満たすことができるbが存在する。すなわち、$tval(q(b)) = T$、したがって、$tval(p(x) \vee q(x)) = T$, $tval(\exists x(p(x) \vee q(x)) = T$。

---

[4] LHS は Left-hand Side を指し、等式の左側という意味である。

[5] 真理値の true を指す。

[6] RHS は Right-hand Side を指し、等式の右側という意味である。

したがって、場合2では、2aであれ、2bであれ、tval(LHS) = tval(RHS) = T。

以上の場合1と場合2の証明過程から見れば、$\exists x\,[p(x) \vee q(x)] \equiv (\exists x\, p(x) \vee \exists x\, q(x))$は常に成立することが分かる。すなわち、存在数量詞は選言で表現されている。あるいは、選言は存在数量詞とともに現れる。

以上はそれぞれ統語論と（形式）意味論を紹介した。統語論は空間的構造の立場から言語を考察し、形式意味論は、文が表す意味を論理学／離散数学の立場から考察する。両方を使ってある言語現象を研究すると、その言語現象がより明確にみられる。以下に例を示す。

(4) この服はいくらですか？

(5) どれほどあなたの援助に感謝していることか！

意味論的に言うと、(4)は疑問文であり、文末の「か」は選言である(Nakanishi 2006; 外池 2014a、2014b; Szabolcsi 2015 など)。(5)は感嘆文であり、文末の「か」も選言である[7]。つまり、両方の「か」は二つの選択肢、あるいは、複数の選択肢から一つを選ぶ意味を表し、質的には同じであると言える。しかし、それらはまったく同じものであるわけではない。なぜなら、それらは統語構造での位置が異なるからである。疑問の「か」は文のタイプを表す ForceP (Force Phrase) であり、感嘆の「か」は表出を表し、ModP (Modal Phrase) である。以上の説明でわかるように、意味論と統語論を両方使用し、意味と構造の立場から、日本語終助詞「か」の特徴を明確に考察することができる。具体的な考察過程は本論文の第 4 章で述べる。

以上の前提を踏まえて、意味論と統語論を合わせて研究する方法を本論文の主な考察の方法とする。この方法は主に、第 2 章と第 4 章で用いられる。

1.1.2 発話行為理論と歴史発展経緯の考察を合わせて研究する方法

語用論(Pragmatics)は言語学の分野の一つであり、言語表現とそれを用いる使用者や文脈との関係を研究する分野である。それには、協調の原理、関連性理論、ポ

[7] 詳細は第 4 章で述べる。

ライトネスなどの理論がある。発話行為理論は語用論の理論の一つである。

語用論の発話行為理論についての文献は、主に Austin (1962)、Searle (1969)、Searle (1979)、Vanderveken (1990)、久保 (2014)などがある。

山岡 (2014)によると、Austin (1962)の発語内行為（illocutionary act）が、遂行節を含む遂行文に対して認定される限定的なものであったのに対し、Searle (1969)、Searle (1979)では考察対象を、遂行節を持たない一般的な文に拡張し、適切性条件（felicity conditions）を充たせば発語内効力（illocutionary force）を持つとして発語内行為の一般化を図った。さらに間接的言語行為（indirect speech act）を理論化したことで、言語行為理論を言語哲学領域から言語学・語用論の普遍理論へと展開した。間接的言語行為を理論化したのは主に Searle (1979)である。そして、Vanderveken (1990)では、複数の話者が高次の発語内目的を共有しつつ一定の発話連鎖を形成する上位単位を介話（intervention）と呼んで規定し、言語行為理論を複数話者による会話理論へと発展させた。久保 (2014)は従来の理論を踏まえつつ独自の観点から調整行為という新たな概念を提唱し、調整理論という一つの体系として完成させた。

言語行為[8]の一つである「発語内行為」を 5 種類に分け、さらに、それぞれに適当な「命題内容条件」、「準備条件」、「誠実条件」、「本質条件」を加えたのは主に Searle (1969)である。本論文の第 3 章が取り上げる「か」と“吗”[9]の対照研究では、「か」と“吗”はそれぞれ感嘆文・疑問文など、どのような文のタイプに現れるかを考察するので、Searle (1969)と緊密に関連するが、Searle (1979)が検討した間接的言語行為、及び久保 (2014)が提唱した調整理論などとは関連性はほとん

---

[8] 山岡(2014)によれば、久保進は Speech Act について、諸著書・訳書・論考においてしばしば訳語の変更を行っている。久保進(2014)『言語行為と調整理論』においては「言語行為」に訳されているが、Vanderveken (1990)、Vanderveken (1994)の書名中の Speech Act に対するそれぞれの訳書（久保監訳 (1997)、久保訳注 (1995)）の書名では、「発話行為」を用いている。以上を踏まえて、本論文に出た「言語行為」と「発話行為」は両方とも同じで、Speech Act を指す。

[9] 中国語文字は日本語文字に似ているので、本論文は中国語文字を挙げる時、“”を使い、日本語文字を挙げる時、「 」を使う。以下は同じである。

どない。したがって、本論文の第 3 章は Searle (1969)が提唱した言語行為を理論基盤とする。

Searle (1969)によって、発話行為理論(Speech Act Theory)における言語行為は「発語行為」、「命題行為」、「発語内行為」、「発語媒介行為」の 4 種類に区別される。「発語行為」は一定の音声や文法上の語や文などを発話する行為を指し、「命題行為」は話者が言った命題の内容であり、「発語内行為」は発話行為を通して、依頼、命令、警告などの機能を担う行為が成立するものである。また、「発語媒介行為」は発話することにより、何らかの効力を結果として生み出す行為であり、いわばコミュニケーション行為の副産物である。

また、「発語内行為」は「断定型」、「行為指示型」、「行為拘束型」、「表出型」、「宣言型」と五つに分類される。「断定型」は事実について陳述するものであり、現実世界に一致すれば「真」、異なれば「偽」になる。つまり、「断定型」によって表された文は意味の実在的な見方と一致している。「行為指示型」は依頼、命令など聞き手にある行為を指示するものである。「行為拘束型」は話し手がある行為を約束するものであり、「表出型」は嘆き、歓迎など話し手の心理状態を表現するものであり、「宣言型」は命名、任命など、命題内容と現実との一致をもたらすものである。

発話行為理論は言語の構造を研究するものではなく、自然言語がもともと表している意味を研究するものでもなく、聞き手と話し手がある会話環境で発話し、その発話がどのような行為をもたらすかを研究するものである。つまり、発話は行為に関して一定の効力があるということで発話行為をなすと考えるものである。

歴史的な発展の経緯の考察とはある言語現象に通時的に見て、どのような発展ルートがあるかを考察することである。現代文における言語現象は、突然に出てきたものではなく、長い時間を経て、徐々に変化してきたものである。ある言語現象の中で、歴史的な発展状況から、現代文における特徴をある程度明確に把握することができる。

発話行為理論を通じて現代文における言語現象を考察し、使用特徴などをまとめる。そして、歴史的な発展の経緯の考察を通して、それらの使用特徴が出てきた原因を究明する。これは本論文の第 3 章で使う研究方法である。詳しく言えば、発話行為理論を利用して、疑問、独り言、感嘆、および三人称小説の地の文など

様々な言語環境で、“吗”と「か」がそれぞれどのような発語内行為に属しているか、また、その発語内行為に属している時、どのような言語機能を持っているのかを考察する。そして、“吗”と「か」がそれぞれ属している言語内行為と果たしている言語機能の相違点と共通点をまとめる。最後に、“吗”と「か」の歴史発展経緯を考察し、それらの現代文における相違点が出てくる原因を究明する。

1.2 研究の理論背景

言語学は多様な言語を科学的に分析する学問であり、それには、細かい分野が多数ある。例えば、音声学、社会言語学、心理言語学、コンピューター言語学、認知言語学、統語論、意味論、語用論などがある。本論文は主に、統語論、意味論、語用論における発話行為理論を理論背景にして、日中両言語疑問文・文末終助詞の言語現象を対照して分析する。

疑問文と文末終助詞は本論文の二つの大きな考察の対象である。それらは一見、関係がないように見えるが、統語論においては、それらは両方とも疑問要素の移動から出てきた現象であると考える。中国語 WH 疑問文には文末終助詞が現れないので、文末終助詞への考察を通して研究することができず、疑問文全体における WH[10]移動や WH 素性照合から考察を行わなければならない。したがって、WH 移動や WH 素性照合の代わりに、疑問文を使い、文末終助詞と並列に考察することを本論文の主題にした。もっと具体的に言うと、本論文の疑問文は「なぜ」／“为什么”を含む中日多重 WH 疑問文を指す。なぜこのような疑問文を選んで考察するかについては序論の 1.3.1 節で説明する。疑問文（における WH 移動や WH 素性照合）と文末終助詞と二つの間に、一体どのような関連性があるのか、どのような対照的な考察方法を使うかについては 1.2.3 節で述べる。

そして、（非）顕在的な WH 移動のある疑問文及び文末終助詞について考察する際、OP (Operator)、SAP (Speech Act Phrase)などの概念を導入する必要がある。したがって、以下、それぞれ OP、SAP、疑問文と文末終助詞の関係について述べ

---

[10] 英語で疑問詞の where，what，who，why などは、WH があることが共通なので、それらを WH に省略する。場合によって、それが疑問詞に含まれる疑問要素を指すこともある。以降は同じである。

る。

1.2.1 OP(Operator)について

OP は演算子(Operator)のことで、さまざまな領域で用いられる。例えば、数学の分野では、算術演算子というが、それは数値を計算するもので、足し算（＋）、引き算（－）、かけ算（×）、割り算（÷）などがある。論理学では、関係演算子と言い、それは二つのオペランド[11]の大小関係を判定するものとして、種類が多数ある。例えば、「a＜b」 は「a は b より小さい」を表し、「a <= b」は 「 a は b より小さいか等しい」を表し、「a != b 」は「a は b と等しくない」を表す。

本論文で考察する OP は言語学での OP である。言語学での OP は何種類かある。例えば、否定の OP、全称数量詞の OP、存在数量詞の OP、疑問の OP などである。本論文で捉える OP は疑問の OP であり、それは一言で言えば、疑問詞や疑問文などに含まれた、疑問を表す演算子のことである。言語において、疑問 OP の基底生成位置が異なることが、異なった言語現象をもたらす。したがって、様々な言語において、疑問 OP の基底生成位置がどこにあるかが OP についての研究の一つの課題である。

表 1-1 英語における WH‐words と pronominals (Tsai 1994: 19)

WH‐words	pronominals
Wh-o	th-ey
Wh-om	th-em
Wh-at	th-at
Wh-en	th-en
Wh-ere	th-ere

[11] オペランド(operand)は被演算子のことで、数式を構成する要素のうち、演算の対照となる値や変数、定数などを指す。例えば「X×10」という数式において、「X」、「10」がオペランドであり、「×」が演算子である。

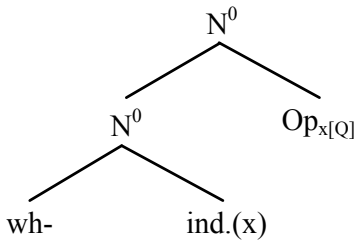


図 1-4 英語の名詞的な WH 疑問詞における OP (Tsai 1994: 19)

Tsai (1994)は英語には顕在的な WH 移動が適用され、それに、語彙としての WH - words と pronominals がそれぞれ形として対応しているので（表 1-1）、英語の疑問 OP は語彙レベルにあると指摘した（図 1-4）。

日本語の疑問 OP の基底生成位置がどこにあるかについては、日本語疑問の OP は DP／PP に基底生成されるという点で多くの研究者は意見が一致している。例えば、Lasnik & Saito (1984, 1992)、Nishigauchi (1990)、Watanabe (1992a, 1992b) などである。

(6) 君は[$_{NP}$ [$_{IP}$ 誰が書いた]本]が好きなの？ （複合名詞句島）

(7) [$_{NP}$ 誰が来ること]が一番望ましいの？ （主語名詞句島）

(8) *君は[誰が来るか（どうか）]知りたがっているの？
（WH 疑問文として不適格）

例文(6)は名詞句NPの中に文(IP)があり、その中に名詞的な疑問詞「誰」がある。「誰」の疑問の意味は名詞句を超えて、主文の疑問の意味になる。言い換えれば、名詞的な疑問詞は複合名詞句島の効果を示さないということである。例文(7)は主語が「誰が来ること」であり、その中の「誰」の疑問の意味も主語名詞句を超えて、主文の疑問の意味になる。

例文(8)は[誰が来るか（どうか）]が主文に埋め込まれて、「誰」は埋め込み文を越えて、主文の疑問になれないので、文全体は Do you want to know whether x will comeというようなYes／No疑問文となり、Who is the person x such that you wonder

whether x will come?というWH疑問文には解釈されない。従って、日本語の疑問のOPはDP／PPに基底生成し、WHを無差別束縛して、さらに文頭に移動すると考えられる（図1-5）。

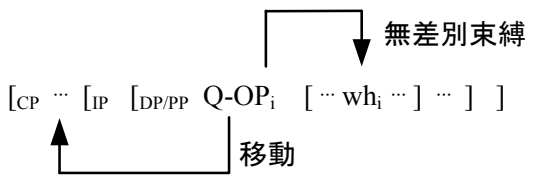


図 1-5 日本語多重通常 WH 疑問文における無差別束縛図

中国語疑問 OP がどこに基底生成するかについて、Tsai (1994)、Tsai (1999a, 1999b)は以下のように考察した。

(9) *君は[誰が来るか（どうか）]知りたがっているの？ (= (8))

(10) 你 想知道 [谁 来不来] （呢）? (Tsai 1999a: 60)
Ni xiangzhidao shui laibulai ne
貴方 知りたい 誰 来るかどうか か
a. Who is the person x such that you wonder whether x will come?
b. *Do you wonder who will come?

例文(9)の埋め込み文において疑問詞「誰」があるが、全体は WH 疑問文に解釈できず、Yes／No 疑問文にしか解釈できない。従って、日本語の名詞的な疑問詞は WH 島制約に従うと考えられる。Tsai (1999a: 60)によれば、日本語の例文(9)に対して、中国語例文(10)では Yes／No 標識の「来不来（来るかどうか）」があっても、Yes／No 疑問文には解釈されず、WH 疑問文として解釈される。また、下の例文(11)では名詞的な WH 疑問詞を含む複合名詞句が主文に埋め込まれている。その中の疑問詞“谁（誰）”は主文の疑問になれるので、中国語の名詞的な WH 疑問詞には複合名詞句島効果がないと Tsai (1999a)は指摘した。

(11) 你　喜欢　[谁　买] 的　书?

Ni　xihuan　shui　mai　de　shu

貴方　好き　誰　買う　comp　本

誰が買った本が好きですか？

(12) 谁　先　来，　谁　就　先　吃。　(Tsai 1999a: 48)

Shui　xian　lai　shui　jiu　xian　chi

誰　先に　来る　誰　それで　先に　食べる

For every x, x a person, if x comes first, then x eat first.

(13) 谁　先来，　谁　就　可以　先　吃　呢？　(Tsai 1999a: 50)

Shui xianlai　shui　jiu　keyi　xian　chi　ne

誰　先に来る　誰　それで　てもいい　先に　食べる　か

For which x, x a person, if x comes first, then x is allowed to eat first.

Tsai (1999a: 48)によれば、例文(12)は疑問詞「谁（誰）」があっても疑問文には解釈できず、文末に疑問の終助詞“呢”をつけると(例文(13))、疑問文に解釈できる。従って、中国語の名詞的な疑問詞の OP は文頭に生成して、疑問詞を無差別束縛すると結論した(図 1-6)。

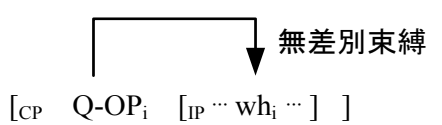


図 1-6 中国語の多重通常 WH 疑問文における無差別束縛

以上のような分析を踏まえて、英語の疑問 OP は D^0 に基底生成し、日本語の疑問 OP は DP／PP に基底生成し、中国語の疑問 OP は CP／IP に基底生成することが分かった（図 1-7）。

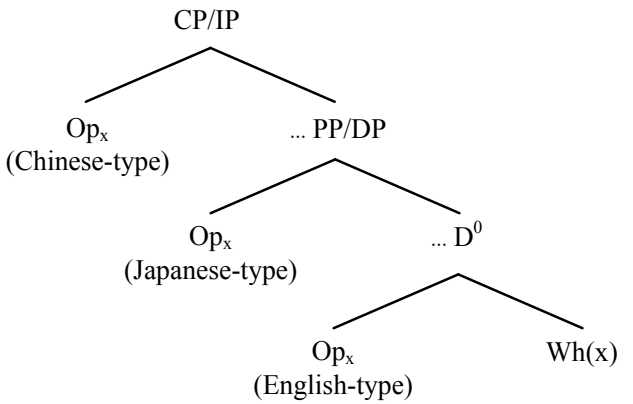


図 1-7 英語・日本語・中国語における OP の基底生成位置 (Tsai 1999a: 41)

以上で英語・日本語・中国語における OP の基底生成位置の違いをまとめた。次に、生成文法の発展過程を紹介する。そして、生成文法の MP 理論を踏まえて、OP の基底生成位置の違いが全体的な言語にどのような影響を与えるかを述べる。

生成文法の発展過程には、標準理論、拡大標準理論、修正拡大標準理論及び GB 理論(Government-binding Theory)と MP 理論(Minimalist Program)がある。それぞれの理論にはそれなりの特徴があるが、今までもっとも進んでいるのは MP 理論である。MP 理論について考察した論文は多数ある。例えば、Lasnik (1999)、Lasnik (1995)、Oku (2003)、Chomsky (1993, 1994, 1995a, 1995b, 1995c, 2000)、Chomsky & Lasnik (1993)などである。紙面の都合で、以下では、MP 理論の特徴だけを紹介する。以下は中村捷・金子義明・菊池朗(2001)の『生成文法の新展開：ミニマリスト・プラグラム』による説明に基づく。

MP 理論では、文法は語彙目録と計算体系から成り立っている。計算体系には、構造構築のための規則として、Merge（併合）と Move（移動）が含まれる。それぞれの言語には、語彙項目があり、これらの語彙項目と Merge、Move の適用により、一定の構造が構築され、ある段階で音声に関わる情報が PF（Phonetic Form の省略で、音声形式をいう）に送られる。この操作を Spell-Out（音声化）という。PF は調音・知覚体系(articulatory-perceptual system)とのインターフェースの役割を果たす。音韻以外の情報は、さらに規則の適用を受け、LF（Logical Form の省略で、論理形式をいう）へと進む。LF は概念・意図体系(英語では、conceptual-intentional system であり、意味部門という）とのインターフェースの役割を果たす。これを

図式化すると、次のようになる（図 1-8）。

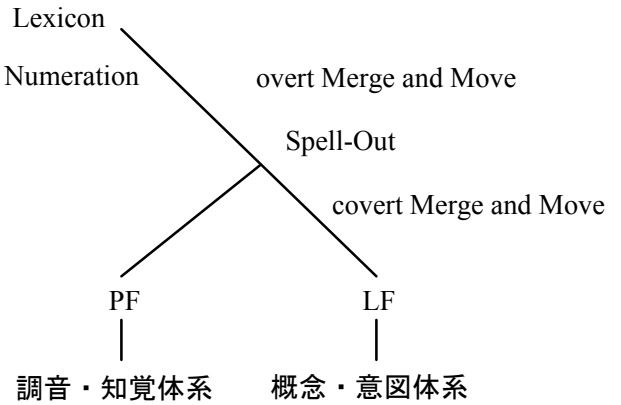


図 1-8 MP 理論による文法の枠組み（中村 捷ほか 2001: 148）

MP 理論以前の各理論では、文法の枠組みに、四つの表示のレベル（D 構造、S 構造、LF、PF）があり、θ 基準、束縛原理などの諸制約・原理は D 構造、S 構造、LF に分散して適用される。S 構造は意味部門への直接入力とはならず、S 構造と意味部門の間に、その仲介を行う部門として、論理形式部門（LF）が設定されている。

ミニマリスト・プログラム（MP 理論）で、minimal は「最小限、極小」という意味であり、この語に MP の特徴が凝縮されていると言える。MP は、計算体系のあらゆる面において、必要最小限の要素と操作のみを用いる文法を構築する試みである。この「必要最小限」という考え方を徹底して追及しているのが MP であるといって良いであろう。

例えば、文法は音声と意味を結びつける規則の体系である。そして、音声と意味は直接結びつけられるものではなく、両者を結ぶ仲介役として統語構造がある。音声、意味、統語構造の中で、その存在を直接的に確かめることができるのは、音声と意味である。したがって、この二つのレベルは言語にとって必要欠くべからざる要素である。一方、統語構造の存在を直接的に示す証拠はない。しかしながら、言語には構造があることを示す十分な証拠があるので、統語構造を作りだす規則は必要である。従来の文法では、統語構造には、D 構造と S 構造が含まれていたが、これらの表示レベルは、音声と意味のレベルと異なり、その存在が不可欠

であるのではなく、理論上の構築物として仮定されているに過ぎない。そこで、このようなレベルは、概念上必要とされるものではないので、MP では、不必要なものとして破棄される。

また、WH 移動操作を見よう。MP 理論以前の各理論では、従来の Move α によると、WH 移動は WH 疑問詞全体を対象として適用される。例えば、英語では、WH 移動をする時、WH 疑問詞を全体に目に見える形で移動する(14)。

(14) I wonder [$\underline{\text{what}}_i$ John made t_i]

ところが、WH移動において、移動に必要な要素はWH疑問詞に含まれるWH素性だけであって、その他の人称・性・数・格などに関わる情報は、WH移動には無関係である。そこで、「必要最小限」の原理に従うと、WH移動が言及する要素はWH素性だけで十分であり、移動は素性移動（Move F）ということになる。つまり、素性の照合が移動の動機づけとなる。言い換えれば、「必要最小限」の原理によると、目に見える移動は必要な時に限って適用される。

以上は MP 理論を中心に、生成文法の発展過程を紹介したが、以下に、疑問 OP の基底生成位置が言語に全体的にどのような影響を与えるかを説明する。

英語では、WH 素性移動と同時に、その他の人称・性・数・格などに関わる情報も、WH 移動と無関係であるが、WH 素性と一緒に、目に見える形で移動する。日本語では、目に見えない疑問 OP だけが移動し、その他の人称・性・数・格などに関わる情報は移動しない。また、中国語では、目に見える WH 疑問詞の移動もなく、目に見えない疑問 OP の移動もせず、疑問 OP はただ文頭で文中の WH 疑問詞と WH 素性の照合だけを行う。つまり、英語の疑問 OP の基底生成位置が D^0 であり、それは文が音声化する前に、WH 疑問詞と一緒に文頭に移動する。この WH 移動は目に見える形なので、英語は顕在的な WH 移動言語であるといって良い。日本語では、疑問 OP の基底生成位置が DP／PP であり、文が音声化する前に、顕在的な WH 移動が現れず、音声化したあとで、疑問 OP が LF で文頭に移動するので、日本語は非顕在的な WH 移動言語であるといって良い。また、中国語では、疑問 OP の基底生成位置は CP／IP であり、文が音声化する前でも後でも、移動せずに、WH 素性の照合だけがある。したがって、中国語は素性移動の言語であると

考えられる(Pesetsky 2000)。

1.2.2 SAP(Speech Act Phrase)について

1.1 節で紹介したように、語用論(pragmatics)は言語表現とそれを用いる使用者（話し手と聞き手）との関係を研究する分野である。統語論(syntax)は構造主義言語学から生まれて、文の構造を研究する分野である。伝統的な統語論は話し手と聞き手の要素を考慮せず、文の構成・構造を研究してきた。

最近、語用論的な要素を統語論の構造に投射してそれがどのように文全体に影響しているかについて多くの研究がなされている。例えば、Ballmer & Brennenstuhl (1981)、 Sadock & Zwicky(1985)、Rizzi (1997)、Cinque (1999)、Ambar (1999)、 Speas & Tenny (2003)、Speas (2004)、Gärtner & Steinbach (2006)などである。

Speas & Tenny (2003) では、SAP という投射が提案された、それは、語用論レベルで関係する話し手、聞き手を統語構造に投射して、発語内効力(illocutionary force)を表示するものであり、語用論と統語論のインターフェース(interface)を表すものである。

また、Speas & Tenny (2003) は語用論的な役割をする「話し手」「発話内容」「聞き手」は、それぞれ発話行為の主体である動作主(agent)、発話行為の主題(theme)、発話行為の「目標(goal)」であると指摘した。宣言(declarative)の発話行為の場合は話し手が発話内容を束縛しており、「話し手」「発話内容」「聞き手」は以下のような構造になる（図 1-9）。

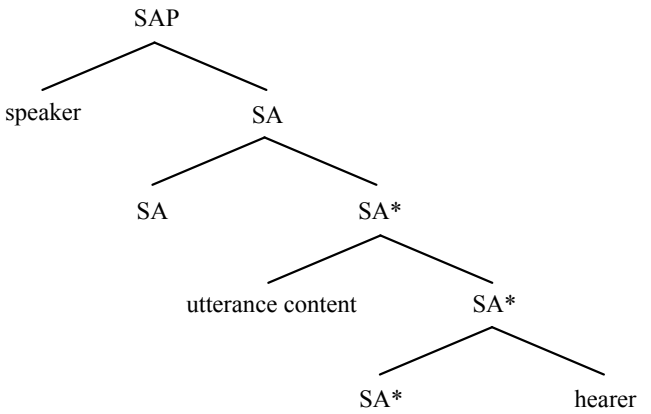


図 1-9 宣言による SAP (Speas & Tenny 2003: 320)[12]

また、疑問の場合では、下の聞き手が［Spec SA*］に繰り上がり、発話内容を束縛する。つまり、質問された内容を回答するのが聞き手であり、発話内容を確認し把握するのが goal の聞き手である（図 1-10）。

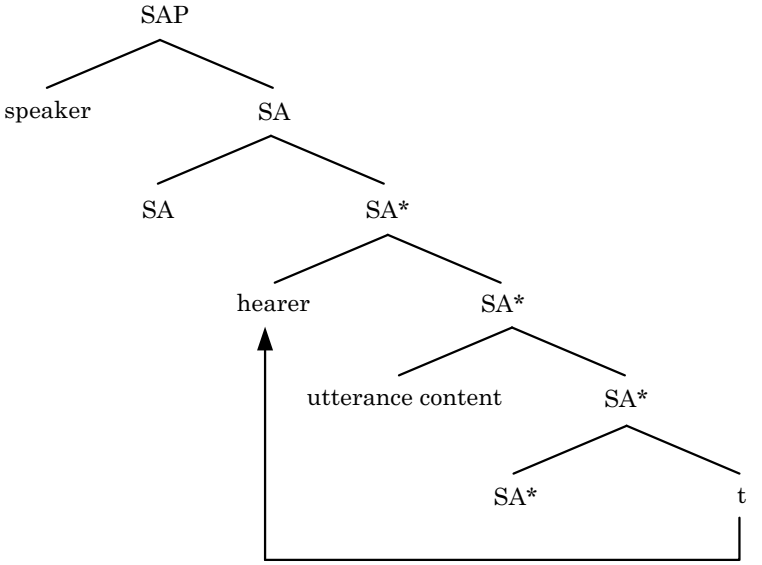


図 1-10 疑問による SAP (Speas & Tenny 2003: 320)

[12] この図 1-9 及び次の図 1-10 では、「*」はフレーズの中心部を表す。図の中に、「SA*」は幾つかあるが、区別をつけるため、図の下からそれぞれ「SA」「SA′」「SA″」などと表記する場合がある。ここでは、引用なので、引用元の図をそのまま掲載した。第 4 章の図 4-6 及び図 4-7 も同様である。

1.2.3 疑問文と文末終助詞の関係について

前述したように、本論文で取り上げる疑問文は「なぜ」／“为什么”を含む中日多重 WH 疑問文を指す。詳細に言うと、「なぜ」／“为什么”を含む中日多重 WH 疑問文における非顕在的な WH 移動現象や WH 素性照合現象を指す。非顕在的な WH 移動や WH 素性照合の現象は疑問の意味を生じるものとして、文末終助詞と同じ機能を担う。したがって、WH 移動や WH 素性照合の代わりに、疑問文を使い、文末終助詞と並列的に考察することを本論文のテーマにした。

次に、WH 移動や WH 素性照合と文末終助詞の関係を述べる。そして、WH 移動や WH 素性照合及び文末終助詞に対して、どのような角度から対照研究を行うかを説明する。

英語においては、ある文が音声化する前（SS レベル）に、WH 疑問詞、屈折要素などの移動により、文のタイプが表される。例えば、(15)の英語の例では、文頭にある過去形の屈折要素を含む軽動詞 did は本動詞 eat の前の位置から離れて、文頭に移動して Yes／No 疑問文になる。現代日本語・中国語などにおいては、WH 疑問詞、屈折要素などの移動現象はなく、文が音声化する前に、文末終助詞などを使い、文のタイプを表す。(16) (17)はそれぞれ日本語、中国語の文であり、そこでは過去形の「た」／“了”は文頭に移動せず、文末終助詞の「か」／“吗”を利用して文のタイプを表す。

(15) <u>Did</u> you eat apples ?

(16) リンゴを食べました<u>か</u>？

(17) 你　吃　苹果　了　<u>吗</u>？
Ni　chi　pingguo　le　ma
あなた　食べる　リンゴ　た　か
日本語訳:（あなたは）リンゴを食べましたか？

以上を見れば、WH 疑問詞など疑問関連要素の文頭に移動する現象は、文末終助詞の存在と、文のタイプを表す機能はほぼ同じである。このことについて、Cheng

(1991)は Clausal Typing Hypothesis を主張した。具体的には以下の内容である。

Clausal Typing Hypothesis

Every clause needs to be typed. In the case of typing a wh-question, either a wh-particle in C^0 is used or else fronting of a wh-word to the Spec of C^0 is used, thereby typing a clause through C^0 by Spec-head agreement.

(Cheng 1991: 29)

つまり、Cheng (1991)によれば、すべての節(clause)は表層において文のタイプ分けが表現されなければならない。たとえば、WH 疑問文の場合、文末に終助詞を使うか、WH 疑問詞が指定部に移動し、「指定部-主要部」の一致によりタイプ分けが行われる。

以上は言語表層での現象である。対照研究において、どのような角度から対照考察を行うかは次に説明する。

対照研究において、例えば、日本語と中国語では、両方文末終助詞を使う言語であり、どのように対照考察を行うかは重要な問題になる。次に、中日両言語の「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文を使って、説明する。

(18) a. 太郎が<u>何</u>を<u>なぜ</u>買いましたか?

b. *太郎は<u>なぜ何</u>を買いましたか?

c. 誰が<u>なぜ何</u>を買いましたか?

(19) 你 <u>为什么</u> 怕 张三 / *<u>谁</u> ∅[13] ?

Ni weishenme pa zhansan／*shui

貴方 なぜ 怖がる 張三さん／*誰

Why are you afraid of Zhangsan／*whom ?

(Takita & Yang 2014: 212)

---

[13] 「∅」は筆者が加えたものである。中国語 WH 疑問文は文末終助詞を使わないので、ゼロの終助詞（∅）を設定する。

(20) 你　想知道　［$_{IP}$ 李四　为什么[14]　买　了　什么］∅[15]?

Ni　xiangzhidao　lisi　weishenme　mai　le　shenme

貴方　知りたい　李四さん　なぜ　買う　た　何

a. What do you want to know Lisi bought why ?

b. *Why do you want to know Lisi bought what ?

(Huang 1982: 526)

日本語では、付加部と補部に WH 句がある多重 WH 疑問文の場合、目的語は必ず付加部の左側にある。例えば、上の例文(18a、b)において、WH 句が二つある（目的語「何」と付加部「なぜ」）。目的語「何」は付加部「なぜ」の左に生起しなければならないので、例文(18a)は文法的であるが、例文(18b)は非文である。ここで、主語の「太郎」を WH 句の「誰」にすると、文法的になる(18c)。つまり、「なぜ」を含む日本語多重 WH 疑問文において、疑問詞の先行関係は固定している。即ち、項の疑問詞（「誰が」「何を」）が「なぜ」よりも一つでも先行しなくてはならない。

中国語の“为什么（なぜ）”を含む文では、単文においては、“为什么（なぜ）”と他の名詞的な WH 句は共起できず、競合関係がある。それは複文になると、競合関係が消えるが、“为什么（なぜ）”は狭いスコープでのみ解釈され、他の名詞的な WH は広いスコープでのみ解釈される。例えば、単文の(19)において、疑問詞“为什么”のみが生ずるのは良いが、他の WH 疑問詞（“谁”）とは共起できない。つまり、“为什么（なぜ）”と名詞的な WH 疑問詞との間には、競合関係が生じる。また、“为什么（なぜ）”がある多重 WH 疑問詞を含む複文の場合(20)、“为什么（なぜ）”と他の名詞句的な WH 句は埋め込まれて、競合関係が消えて、文法的になる。しかも、a にしか解釈できず、“为什么（なぜ）”が広いスコープ

---

[14] 中国語では、“为什么”には、種類が二つある。一つは“为（前置詞）＋什么（何）”からなり、目的について質問するものである。もう一つは“为什么”全体が副詞で、原因について質問するものである。ここでは、後者を指す。

[15] 「∅」は筆者が加えたものである。

を取る b には解釈できない。

以上の「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文における語順の相違点を説明するには、ただ単にそれぞれの文末にある“∅”、「か」の対照を行うだけでは、問題は解決できないだろう。なぜならば、文末終助詞はただ疑問、感嘆などのモダリティを表すだけであり、それは補文標識として、IP 範囲内の WH 疑問詞の間の語順には影響を与えないからである。

この時、文末終助詞を無視して、すべての WH 疑問詞の WH 素性について LF レベルで、C^0 位置にある疑問素性とチェックするという素性照合の概念を用いて、それぞれの疑問 OP の基底生成位置の違いから、この問題を捉えなければならない。これは、本論文の第 2 章で使う考察方法である。

もう一方、ある場合には、WH 疑問詞と C^0 の間に存在する素性照合の概念を考慮せずに、終助詞だけを対照して考察すれば良い。

(21) a. 你　去　北京　吗?
Ni　qu　Beijing　ma
あなた　行く　北京　か
日本語訳：あなたは北京にいきますか？

b. あなたは北京に行きますか？

(22) a. *我　不　知道　他　去　北京　吗。
Wo　bu　zhidao　ta　qu　Beijing　ma
私　否定　知っている　彼　行く　北京　か
日本語訳：彼が北京に行くか分りません。

b. 彼が北京に行くか分かりません。

(23) a. 原来　在　这儿　啊／*吗。
Yuanlai　zai　zheer　a／*ma

もともと　ある　ここ　　か[16]／*か[17]

日本語訳：ここにあったのか。

b. ここにあったのか。

(21a、b)では、会話文における Yes／No 疑問文であり、そこにそれぞれ文末に疑問の“吗”と「か」がある。(22a、b)は(21a、b)における直接引用部分を主文に埋め込んだ場合である。これらを見てわかるように、日本語「か」は埋め込み文にも使うが、中国語“吗”は埋め込み文には使えない。また、(23a、b)の使用環境は、ある人が教科書を教室に忘れたかもしれないと思って、教室に戻って見つけた時の独り言であるが、日本語文には「か」を使うが、中国語文には、「か」と対応する“吗”ではなく、“啊”を使う。以上の例文から見て、日本語「か」は会話文にも主文の埋め込み文にも使えるし、独り言にも使えることがわかる。それに対して、中国語“吗”は主文の埋め込み文と独り言には使えず、会話文だけに使う。

以上の(21a、b)、(22a、b)、(23a、b)における“吗”と「か」の異なる現象について対照分析を行うと、文末終助詞を無視して、移動現象や素性照合などに重点をおいて説明することによっては問題を解決することができないだろう。この時、移動現象などはある程度無視して、文末終助詞を重要視して考察しなければならない。これは本論文の第 3、4 章で使用する方法である。

まとめていうと、ある疑問現象について対照研究を行うには、二つの考察方法がある。一つは、文末終助詞を無視して、移動現象や素性照合などに重点を置いて分析する。もう一つは、移動現象などをある程度無視して、文末終助詞を重要視して考察する。また、WH 疑問文、WH 疑問詞、文末終助詞という三つの要素は統語論・意味論において、相互に関連していることが分かる。したがって、本論文のタイトルとして、疑問文・文末終助詞を並列させて設定した。

1.3 研究の対象

本論文の研究対象は日中両言語における WH 移動と関連する言語現象であるが、

---

[16] この「か」は感嘆の「か」を指す。

[17] この「か」は疑問の「か」を指す。

中国語と日本語には顕在的な WH 移動の代わりに、文末終助詞を使い、文のタイプなどを表す。したがって、英語の WH 移動と対応する中国語・日本語の終助詞が本論文の研究対象になる。また、中国語 WH 疑問文には文末終助詞が現れないので、顕在的な文末終助詞によって、中国語 WH 疑問文を研究することはできない。日本語 WH 疑問文では文末終助詞「か」などが現れるが、文末終助詞によって、日中両言語における WH 疑問文に対照研究を行うことができない。この時、文末終助詞を無視して、非顕在的な WH 移動か LF レベルでの WH 素性照合によって疑問文全体を考察しなければならない。したがって、疑問文も本論文の研究対象になる。

1.3.1 疑問文

日本語 Yes／No 疑問文と WH 疑問文は両方とも文末終助詞を使って疑問を表すが、中国語 Yes／No 疑問文に終助詞“吗”を使って、疑問を表し、WH 疑問文では、裸の形（文末終助詞は現れない）で、疑問を表す。したがって、日中両言語における Yes／No 疑問文などの対照研究は文末終助詞の考察を通して行う。WH 疑問文の対照研究は文末終助詞を無視して、非顕在的な WH 移動など疑問文全体な特徴に絞って考察する。

次に、「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文を WH 疑問文の代表として考察する理由を述べる。

WH 疑問文には通常、WH 疑問詞がある。WH 疑問詞には名詞的 WH 疑問詞もあれば、副詞的な WH 疑問詞もある。前者は例えば、「誰」、「何」など、後者は「なぜ」、「いつ」などがある。副詞的な WH 疑問詞は特殊であり、名詞的な WH 疑問詞が持たない特徴を持っている。例えば、名詞的な WH 疑問詞では LF レベルで、名詞句島現象がないが、副詞的な WH 疑問詞では名詞句島現象がある。また、中日における「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文はさらに複雑な言語現象がある。例えば、「なぜ」を含む日本語多重 WH 疑問文においては、疑問詞の先行関係は固定している(18a、b、c)。即ち、項の疑問詞（「誰が」「何を」）が「なぜ」よりも一つでも先行しなくてはならない。中国語の“为什么（なぜ）”を含む多重 WH 疑問文では、単文においては、“为什么（なぜ）”と他の通常の WH 句は共起できず、競合関係がある。しかし、複文になると、競合関係が消え、

“为什么（なぜ）”は狭いスコープでのみ解釈され、他の名詞句的な WH 疑問詞は広いスコープでのみ解釈される(19) (20)。この複雑な現象について、どのように説明するかはまだ解決していない。また、このような言語現象の相違点は発話環境とは関係がせず、聞き手と話し手という要素からの影響とも関連性はない。「なぜ」文と“为什么（なぜ）”文そのものは異なる構文特徴を示すのは明らかである。したがって、本論文はこの問題を語用論の立場からではなく、第 2 章で、統語論・意味論の立場から、疑問文の代表として捉えて考察する。

1.3.2 文末終助詞

文末終助詞“吗”と「か」は WH 移動と関連する要素として、本論文の第 3 章と第 4 章での考察対象である。日本語・中国語には、文末終助詞が多数ある。例えば、日本語には、「ね」、「よ」、「か」、「の」などがあり、中国語には、“呢”、“嘛”、“啊”、“吗”などがある。その中でも、疑問を表す“吗”と「か」は重要である。また、「か」は日本語 Yes／No 疑問文と WH 疑問文の文末に使うほかに、感嘆文の文末にも使える。

世界の多数の言語では、感嘆文と疑問文は同じシステム（WH 疑問詞の移動、あるいは同じ文末終助詞）によって表す。以下のような例が挙げられる。

(24) 英語：

感嘆文　(Boy,) <u>Did</u> Sue wear orange shoes!　(Rett 2008: 601)

疑問文　(Boy,) <u>Did</u> Sue wear orange shoes?

(25) 中国語：

感嘆文	那	棵	树	多	高	<u>啊</u>!
	Na	ke	shu	duo	gao	a
	そ（の）	量詞	木	たくさん	高い	か

日本語訳：なんて高い木なのか！

疑問文	那	棵	树	多	高	<u>啊</u>?
	Na	ke	shu	duo	gao	a

そ（の）　量詞　木　　どれぐらい　高い　か

日本語訳：その木はどれぐらい高いですか？

したがって、日本語「か」が疑問文にも使え、感嘆文にも使えることは偶然のことではないと考えられる。しかし、現代日本語の疑問の「か」については、かなり研究されていたが、感嘆の「か」はあまり研究されていない。そこで、感嘆の「か」が疑問の「か」とどのような関連性があるかは研究に値することであると考えられる。また、その「か」が対応している中国語“吗”は Yes／No 疑問文の文末だけに使うという、「か」と異なる現象を示す。

以上のような「か」と“吗”における相違点・共通点はどこから来ているか、また、そのような相違点・共通点がなぜ出ているかは本研究の課題の一つである。そして、日本語「か」は疑問文にも使えるし、感嘆文にも使えるので、「か」は語用論における発話環境と関連性があると考えられる。したがって、本研究は「か」と“吗”について、語用論から捉えるとともに、それらを WH 移動現象の帰結として、統語論及び意味論などの立場からも考察する。

1.4 論文の構成

本論文では、統語論・意味論・語用論などの研究方法を利用して、日中両言語において、対比しうる言語現象（疑問文・文末終助詞）について論ずる。

本論文は 5 章で構成されている。具体的には以下の通りである。

第 1 章は序論であり、主に本研究の理論背景、研究方法、および研究対象、論文の構成からなっている。理論背景として、OP、SAP、および WH 移動と文末終助詞の関係について紹介した。研究方法については、二つ挙げた。一つは、意味論と統語論を合わせて研究する方法であり、もう一つは、語用論における発話行為理論と歴史発展経緯の側面から考察する方法である。そして、研究対象では、本論文の二つの研究対象（疑問文と文末終助詞）を紹介した。

第 2 章は統語論と意味論の立場から、「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文を考察する。「なぜ」を含む日本語多重 WH 疑問文では、「なぜ」の前に名詞的な WH 疑問詞（「誰」、「何」など）が先行しなければならない。これと異なって、“为什么”を含む中国語多重 WH 疑問文では、単文において、“为什么”

と他の名詞的な WH 疑問詞は共起できないが、複文になると、共起できる。これに関して、本章は、意味論と統語論の立場から考察する。

意味論的には，両言語において、「なぜ／为什么」は両方とも指示関数の基準になれず、関数による結果だけを表すことができることを論ずる。すなわち、多重 WH 疑問文において、「なぜ／为什么」は狭いスコープを取り、他の疑問詞は広いスコープを取るしかない。

統語論的には、その意味論的特徴は日本語文では名詞的 WH 疑問詞と「なぜ」の前後関係に現れ、中国語文では単文・複文に現れる。つまり、日本語「なぜ」は他の名詞的な WH 疑問詞と単文において共起でき、中国語「为什么」は他の名詞的な WH 疑問詞と単文において競合関係があり、共起できないが，複文においては、競合関係が消える。これは、日本語の名詞的な WH 疑問詞の OP は DP／PP に基底生成し、スコープ範囲以内の疑問詞を非選択統御して、文頭に移動し、文頭に基底生成する「なぜ」の sentential　operator に付加するので、競合関係が起こらないからである。中国語「为什么」は sentential operator として文頭に基底生成し、名詞的な WH 疑問詞の OP も基底生成するので、競合関係が起こり、複文になると、［Spec CP］が二つあるので、それぞれ基底生成して、共起できるからである。言い換えれば、日中における「なぜ／为什么」は意味論的に同じであるが、統語論的に異なるのは両言語の疑問 OP の基底生成場所が違うからである。

第 3 章は発話行為理論の立場から、文末終助詞の「か」と“吗”について、対照研究を行う。「か」は単文の質問文の文末と複文の主文文末に使う時、聞き手がいる場合に使用し、言語行為の「行為指示型」に属している。それは複文の埋め込み文の文末に使う時、言語の「断定型」に属し、独り言の文末に使う時、言語行為の「表出型」に属す。中国語“吗”では言語行為が単純であり、それは Yes／No 疑問文の単文か複文の文末のみに使い、聞き手目当ての質問のみに使用し、「行為指示型」だけに属している。また、それぞれの歴史発展経緯から、「か」と“吗”における相違点の原因を究明する。

第 4 章は、統語論と意味論の立場から、終助詞の「か」と“吗”に、対照研究を行う。本章は日本語疑問文の文末の「か」が選言であるという先行研究を踏まえて、「か」が表すモダリティに、文の真理値に関わる可能世界、時間の他に、判断者の要素を加えて、感嘆文文末の「か」も選言であると主張する。また、統語論で

は、疑問の「か」は ForceP であるという先行研究の上に、感嘆の「か」は ModP であると指摘する。疑問の「か」に対応する“吗”については、使用方法が単純な選言であると指摘した上で、統語構造で、疑問の「か」と同じで、ForceP であると主張する。

第 5 章は結論と今後の展望である。第 5 章は、本研究のまとめ、本研究の独自性、本研究の意義及び今後の展望からなっている。

第 2 章 統語論・意味論における「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文の対照研究

2.1 問題提起

英語の多重WH疑問文は、一つのWH句が文頭に移動し、他のWH句は元位置に留まる。どのWH句が移動するかは優位効果 (superiority effect) によって決まる。優位効果について考察した文献が多数ある。例えば、Ko (2006)、Kim (2002, 2006)、Beck (2006)、Kawamura (2007)、Hiraiwa (2005)、Hagstrom (1998)などである。一般に、目的語のWH句より、主語のWH句の方が優先移動する。

(1) a. Who bought what ? (Takita & Yang 2014: 206)
b. *What did who buy ? (Takita & Yang 2014: 206)

例文(1)において、WH 句は二つある。即ち、主語の who と目的語の what である。(1a)は主語 who が、元の［Spec TP］位置から［Spec CP］位置に移動して文法的な文となり、(1b)は主語 who の優先移動ではなく、目的語 what が［Spec CP］に移動するため、非文となる。

また、補部の WH 句より、付加部の WH 句の方が優先移動する。例えば、下の例文(2)において、二つの WH 句、即ち、付加部の why と目的語の what がある。(2a)では付加部が［Spec CP］に移動して文法的となり、(2b)では付加部の移動ではなく、補部の目的語が［Spec CP］に移動するため、非文となる。

(2) a. [$_{CP}$ Why $_i$ did [$_{IP}$ John buy what t_i]] ? (Takita & Yang 2014: 224)
b. *[$_{CP}$ What $_k$ did [$_{IP}$ John buy t_k why]] ? (Takita & Yang 2014: 224)

しかし、日本語の場合は英語と異なり、付加部と補部に WH 句がある多重 WH 疑問文の場合、目的語は必ず付加部の左側にある。例えば、下の例文(3a)、(3b)において、WH 句が二つある（目的語「何」と付加部「なぜ」）。英語と異なり、目的語「何」は付加部「なぜ」の左に生起しなければならない。つまり、英語の語順

を基準にすると、反優位効果を示すことになる。また、例文(3a)は文法的であるが、例文(3b)は非文である。ここで、主語の「太郎」を WH 句の「誰」にすると、文法的になる(3c)。

(3) a. [$_{CP}$ [$_{IP}$ 太郎が何を $_{i}$ なぜ t_i 買った]の]?
b. *[$_{CP}$ [$_{IP}$ 太郎はなぜ何を買った]の]?
c. [$_{CP}$ [$_{IP}$ 誰がなぜ何を買った]の]?

以上をまとめると、「なぜ」を含む日本語多重 WH 疑問文において、疑問詞の先行関係は固定している。即ち、項の疑問詞（「誰が」「何を」）が「なぜ」よりも一つでも先行しなくてはならない。特に(3a)において、目的語「何を」が動詞に隣接した位置に基底生成されると考えると、疑問詞は義務的なかき混ぜを行ってまでもその先行関係を守らなければならないことが分かる。

次に、WHY を含む中国語多重 WH 疑問文を見てみよう。

WHY は中国語では、“为什么”であるが、“为什么”には、種類が二つある。一つは“为（前置詞）＋什么（何）”からなり、目的について質問するものである。もう一つは“为什么”全体が副詞で、原因について質問するものである。

(4)

你	认为	［$_{CP}$ 张三	为什么	工作］？
Ni	renwei	zhangsan	weishenme	gongzuo
貴方	思う	張三さん	なぜ／何のために	仕事する

張三はなぜ／何のために仕事すると思いますか？

(Takita & Yang 2014: 210)

a.

因为	他	没有	钱。
Yinwei	ta	meiyou	qian
なので	彼	ない	お金

彼はお金がないから。

b. 为了　　钱。
Weile　qian
ために　お金
お金のために。

例文(4)における“为什么（なぜ）”は原因について聞いていると理解すれば、(4a)のような答になる。目的について聞いていると理解すれば、(4b)のような答になる。

(5)　［NP［S他　为什么　　写］　的　　书］　最　　有趣？
Ta　weishenme　　xie　de　shu　zui　youqu
彼　なぜ／何のために　書く　comp　本　一番　面白い
*彼がなぜ書いた本が一番面白いですか？
彼は何のために書いた本が一番面白いですか？　(Huang 1982：527)

例文(5)には複合名詞句が埋め込まれている。“为什么”を原因の副詞として解釈すると、非文になるが、“为（前置詞）＋什么（何）”の目的として解釈すると、文法的である。目的の“为什么”と原因の“为什么”は統語論的にも意味論的にも異なるので、本章では目的を表す“为（前置詞）＋什么（何）”を考察対象にせず、原因を表す副詞“为什么”を考察対象とする。よって、以下の“为什么”はすべて原因を表すものである。

さて、中国語 WH 疑問文の単文において、通常の WH 句[18]が一つ以上であっても良い。

(6)　谁　　吃　　了　什么?
Shui　chi　　le　shenme
誰　食べる　た　何

[18] why, how など副詞的特徴の疑問詞と異なり、what, who など名詞的な疑問詞は数が多いので、本章では通常の WH と言う。

a. 誰が何を食べましたか？

b. 何を誰が食べましたか？

例文(6)には、通常 WH が“谁”“什么”と二つあり、それぞれ広いスコープを取る解釈 a、b が可能である。しかし、単文においては、疑問詞“为什么”のみが生ずるのは良いが、他の WH とは共起できない。

(7) 你　<u>为什么</u>　怕　张三／*<u>谁</u>？

Ni　weishenme　pa　zhansan／*shui

貴方　なぜ　怖がる　張三さん／*誰

Why are you afraid of Zhangsan／*whom ?

(Takita & Yang 2014: 212)

例文(7)において、“为什么（なぜ）”だけの場合は文法的であり、“为什么（なぜ）”と“谁（誰）”がある場合、非文になる。換言すれば、単文において、通常の WH は互いに共起できるが、“为什么（なぜ）”と通常の WH との間には、競合関係が生じる。また、“为什么（なぜ）”がある多重 WH を含む複文の場合、“为什么（なぜ）”と他の通常 WH 句は埋め込まれて、競合関係が消えて、文法的になる。

(8) 你　想知道　［IP 李四　<u>为什么</u>　买　了　<u>什么</u>］？

Ni　xiangzhidao　lisi　weishenme　mai　le　shenme

貴方　知りたい　李四さん　なぜ　買う　た　何

a. What do you want to know Lisi bought why ?

b. *Why do you want to know Lisi bought what ?

(Huang 1982: 526)

例文(8)には疑問詞が“为什么（なぜ）”“什么（何）”と二つある。通常の場合、二つの疑問詞が互いに広いスコープを取る解釈ができるが、“为什么（なぜ）”は狭いスコープしか取らず、通常 WH の“什么（何）”は広いスコープしか取ら

ない。言い換えれば、例文(8)は a にしか解釈できず、“为什么（なぜ）”が広いスコープを取る b には解釈できない。

以上から、中日における「なぜ／为什么」は統語特性において異なることが分かる。多重 WH 疑問文において、日本語の「なぜ」文は項の疑問詞（「誰が」「何を」）が一つでも先行しなくてはならない。中国語の“为什么(なぜ)”文では、単文においては、“为什么(なぜ)”と他の通常の WH 句は共起できず、競合関係があり、複文になると、競合関係が消えるが、“为什么(なぜ)”は狭いスコープでのみ解釈され、他の通常の WH は広いスコープでのみ解釈される。本章では、なぜそれぞれこのように異なる特徴を示すのかについて考察する。

2.2 先行研究

中国語“为什么”と日本語「なぜ」の用法の特徴については、それぞれ考察した論文が多数あるが、ここでは、主に Huang (1982)、Nishigauchi (1990)を概観する。他方、日中両言語における「なぜ／为什么」の対照研究の論文は少ないが、ここでは、最近の Takita & Yang (2014)を検討する。

Huang (1982)は英語多重 WH 疑問文において、表層の SS レベルで、顕在的 WH 移動では NP、S と一回で節を二つ越えていけないという下接条件があることを論じた。また、顕在的 WH 移動のない中国語では、LF レベルで、名詞的な WH は下接条件に違反するが、副詞的な WH は下接条件に従うと指摘している。

(9) ［$_{NP}$［$_{S}$他　用　<u>什么</u>　写］的　书］最　有趣?
Ta　yong　shenme　xie　de　shu　zui　youqu
彼　で　何　書く　comp　本　一番　面白い
彼が何を用いて書いた本が一番面白いですか？
(Huang 1982: 527)

(10) *［$_{NP}$［$_{S}$他　<u>为什么</u>　写］的　书］最　有趣?
Ta　weishenme　xie　de　shu　zui　youqu
彼　なぜ　書く　comp　本　一番　面白い
*彼がなぜ書いた本が一番面白いですか？　(Huang 1982: 527)

例文(9)では複合名詞句 NP の中に文（S）があり、通常 WH“什么（何）”が二つの節を超えて、主文の疑問になる。例文(10)では文型は同じであるが、副詞的疑問詞“为什么（なぜ）”は名詞素性を持っておらず、節を超えて主文の疑問にはなれない。また、Huang (1982)は埋め込み文における“为什么（なぜ）”は狭いスコープしか取らないと指摘した。

(11) 你　想知道　<u>谁</u>　买　了　<u>什么</u>?
Ni　xiangzhidao　shui　mai　le　shenme
貴方　知りたい　誰　買う　た　何
a. What is the thing x such that you wonder who bought x ?
b. Who is the person x such that you wonder what x bought ?
(Huang 1982: 525)

(12) 你　想知道　［$_{IP}$ 李四　<u>为什么</u>　买　了　<u>什么</u>］?　(= (8))
Ni　xiangzhidao　lisi　weishenme　mai　le　shenme
貴方　知りたい　李四さん　なぜ　買う　た　何
a. What do you wonder Lisi bought why ?
b. *Why do you wonder Lisi bought What ?

例文(11)では埋め込み文に“谁（誰）”“什么（何）”と疑問詞が二つあり、それぞれ広いスコープを取る解釈ができる。他方、例文(12)は埋め込み文に“什么（何）”“为什么（なぜ）”と疑問詞が二つあるが、“什么（何）”は広いスコープしか取らず、“为什么（なぜ）”は狭いスコープしか取れない。

以上の現象から、Huang (1982) は名詞的 WH と副詞的 WH の疑問 OP (演算子：Operator)の基底生成位置が異なるのではないかと指摘した。

日本語の「なぜ」については Nishigauchi (1990) は、以下のように考察している。

(13) a. 君は［$_{NP}$［$_{S}$ <u>誰</u>を批判している］論文］を読みましたか？
(Nishigauchi 1990: 97)

b. *君は［$_{NP}$［$_{S}$ 誰がなぜ書いた］本］を読みましたか？

(Nishigauchi 1990: 98)

例文(13a)には複合名詞句 NP があり、その中に通常 WH の「誰」を含む文がある。解釈としては通常 WH の「誰」が S と NP と節を二つ超えて、主文の疑問文になる。しかし、例文(13b)は、例文(13a)と同じ構造を持っているが、名詞的疑問詞「誰」と異なり、副詞的疑問詞「なぜ」は S と NP と節を二つ超えて主文の質問になれないので、非文になる。

しかし、下の例文(14a)では「なぜ」は「誰」の後にあり、少し不自然であるが、容認されるのに対して、(14b)のように「なぜ」が「誰」の前にある場合は非文になる。

(14) a.？？誰がなぜ来たのか思い出せない。 (Nishigauchi 1990: 97)

b. *なぜ誰が来たのか思い出せない。 (Nishigauchi 1990: 98)

また、例文(15)のように、通常の WH 疑問詞は「も」と共起できるが、(15b)のように「なぜ」は「も」と共起できない。

(15) a. 誰が来ても僕は嬉しい。 (Nishigauchi 1990: 98)

b. *彼がなぜ来ても僕は嬉しい。 (Nishigauchi 1990: 98)

以上、Nishigauchi (1990)は、「なぜ」は複合名詞句の中に生起できず、「も」などと共起できないので、「なぜ」は sentential operator であると主張した。

Huang (1982)、Nishigauchi (1990)は中国語「为什么（なぜ）」と日本語の「なぜ」の特性を明らかにしているが、両方の対照的考察を行ってはいない。対照研究の面では、中日における WHY を含む多重 WH 疑問文の反優位効果について、Takita & Yang (2014)が Probe-Goal システムを利用して、Valuation Condition（以下、VC と略す）を提案して説明した。

Takita & Yang (2014)によれば、なぜ単文の中国語多重WH疑問文において、「为什么（なぜ）」と通常のWHとの間に競合関係があるのかというと、中国語のWH

移動はfeature movementである[19]ので、疑問のOPは［Spec CP］に生成して通常のWHを無差別束縛する。「为什么（なぜ）」は通常のWHと異なり、複合名詞句島制約に従うので、sentential operatorとして、無差別束縛されず、直接［Spec CP］に生起して、通常のOPと競合するからだとする。一方、複文には、［Spec CP］位置が二つあるので、競合関係がなくなるのである。

また、なぜ日本語の「なぜ」は通常のWHとの間に競合関係を持たないかというと、日本語の方は疑問のOPはXP句であるDP／PPに基底生成し、DP/PPはX^0ではなく、XPであるから、付加部を二つ持つことができ、競合関係がなくなるからだとする。

中国語の方は確かにこの分析で良いが、日本語では疑問のOPはすべてDP/PPに基底生成するわけではなく、名詞的疑問詞の疑問OPと副詞的疑問詞の疑問OPは基底生成位置が異なる。

Nishigauchi (1990)、Watanabe (1994)などによれば、通常のWHにはWH島制約はあるが、複合名詞句島制約はない。疑問のOPはDP／PPに基底生成して、スコープ範囲以内のWHを無差別束縛する。さらに、その疑問OPは［Spec CP］に移動する。また、Nishigauchi (1990)は、副詞的な疑問詞「なぜ」は通常のWHと異なり、複合名詞句島があるので、そのOPはDP/PPに生成するのではなく、sentential operatorとして直接［Spec CP］に生成すると指摘した。つまり、副詞的疑問詞と名詞的疑問詞を問わず、すべての疑問OPはDP／PPに基底生成するという Takita & Yang (2014)の説明は不十分であると考えられる。

それ以外にも、Takita & Yang (2014)によれば、中国語の文では「为什么（なぜ）」、通常 WH 句と Q-operator にはそれぞれ feature が一つだけであるので、VC の条件が満たされていると指摘しているが、実際は満たされていない。

(16)

[19] 詳細は本章の 1.2.1 節を見る。

(i) partical valuation

$[_{CP1}\ [_{C^0 1}\ C_{1\{[Q][F]\}}\ \text{Q-Op}_{\{[Q]\}j}]\ \cdots [_{CP2}\ [_{C2^0}\ \text{‘why’}_{\{[Q]\}i}]\ [_{IP}\ \text{wh}_{\{[F]\}j} \cdots\ t_i \cdots]\ ]\ ]$

(ii) partical valuation

上の(16)（例文(12)の解釈）を見てみよう。

C_1は探査子として、目標の“为什么（なぜ）”や WH を探査し、C_2の「$\text{why}_{\{[Q]\}}$」、IP の中の WH の[F]に対してそれぞれ部分評価を行うが、太線の $\text{Q-Op}_{\{[Q]\}}$が残って、全体的な評価ができなくなり、失敗する。つまり、VC の条件が満たされないのである。

本章は以上の先行研究を踏まえて、以下の問題に絞って、考察を行う。

A. なぜ中国語“为什么（なぜ）”がある多重 WH 疑問単文に競合関係があり、“为什么（なぜ）”と他の通常 WH は複文にしか現れないのか？

B. なぜ日本語「なぜ」文には単文と複文を問わず、競合関係がないのか？

C. なぜ日本語の「なぜ」がある多重 WH 疑問文では、項の疑問詞（「誰が」「何を」）の方が「なぜ」よりも一つでも先行しなければならないのか？

D. なぜ“为什么（なぜ）”と他の通常 WH が同時に埋め込まれた複文において、他の通常 WH は広いスコープしか取らず、“为什么（なぜ）”は狭いスコープしか取らないのか？

以上の A、B、C、D 四つの問題を設定して、以下のような構成によって分析する。

2.3 節は問題 A、B に対して、「なぜ／为什么」を含む多重 WH 疑問文の統語論上の相違を明らかにする。2.3.1 節は主に日本語の通常の疑問 OP は DP／PP に基底生成し、「なぜ」の OP は sentential operator として直接［Spec CP］に生成し、基底生成位置が異なるので、競合関係が起こらず、互いに共起できることを説明する。2.3.2 節は主に中国語通常の疑問 OP と“为什么（なぜ）”の疑問 OP はどちらも［Spec CP］に基底生成して、基底生成位置が同じなので、競合関係が起こり、単文には共起できず、複文には［Spec CP］が二つあるので、競合関係が消えて、

共起できるようになることを指摘する。2.3.3 節のまとめで、日本語は非顕在的 WH 移動であり、中国語は素性移動である[20]こと(Pesetsky 2000)、つまり、中日両言語は言語の WH 疑問のタイプが異なるので、統語論的に異なる振る舞いをすることを示す。

2.4 節は問題 C、D に対して、「なぜ／为什么」を含む多重 WH 疑問文のペアリスト解釈に指示関数を利用して、「なぜ／为什么」の意味論的な考察を行う。2.4.1 節は主に日本語「なぜ」の意味論的な特徴を考察し、2.4.2 節は主に中国語“为什么”の意味論的解釈を明らかにする。2.4.3 節のまとめで、中日両言語において、意味論上、「なぜ」と“为什么”がどちらも狭いスコープしか解釈できない現象は、中国語では複文で異なるスコープが生じると解釈し、日本語のスコープは通常の WH の語順に従って反映されると主張する。

最後に、2.5 節は本章全体のまとめと今後の課題を示す。

2.3 統語論における解釈

2.3.1 統語論における日本語の「なぜ」

多くの言語において、疑問文で疑問の Operator を設定する分析が提起されており、日本語の疑問 Operator の基底生成位置はどこにあるかについても多くの論文で論じられている。例えば、Lasnik & Saito (1984, 1992)、Nishigauchi (1990)、Watanabe (1992a, 1992b)などである。現在では、基本的に日本語通常疑問の OP は DP／PP に基底生成されるという点で意見が一致している。詳しくは以下のようになる。

(17) 君は[$_{NP}$ [$_{IP}$ <u>誰</u>が書いた]本]が好きなの？　　（複合名詞句島）

Who is the person x such that you like [the book [that x wrote]]?

(Takita & Yang 2014: 214)

(18) [$_{NP}$ <u>誰</u>が来ること]が一番望ましいの？　　（主語名詞句島）

Who is the person x such that [that x comes] is most suitable?

(Takita & Yang 2014: 214)

---

[20] 詳細は本章の 1.2.1 節を見る。

例文(17)は名詞句NPの中に文(IP)があり、その中に名詞的疑問詞「誰」がある。「誰」の疑問の意味が名詞句を超えて、主文の疑問の意味になる。言い換えれば、通常WHは複合名詞句島の効果を示さないということである。例文(18)は主語が「誰が来ること」であり、その中の「誰」の疑問の意味も主語名詞句を超えて、主文の疑問の意味になる。

(19) *君は[誰が来るか（どうか）]知りたがっているの？

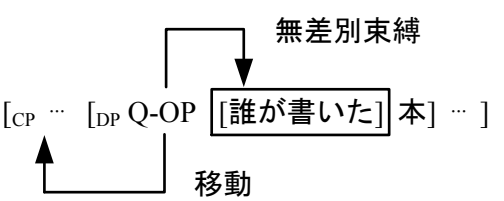
Who is the person x such that you want to know whether x will come?

(Takita & Yang 2014: 214)

例文(19)は[誰が来るか（どうか）]が主文に埋め込まれて、「誰」は埋め込み文を越えて、主文の疑問になれないので、文全体は do you want to know whether x will comeというようなYes／No疑問文となり、Who is the person x such that you wonder whether x will come ?というWH疑問文には解釈されない。

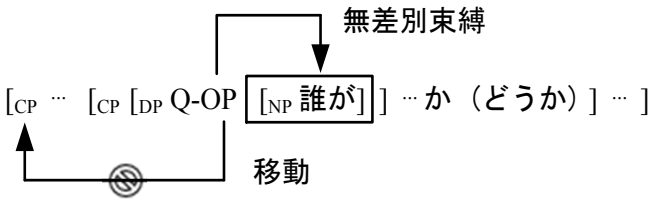
従って、日本語の疑問のOPはDP／PPに基底生成し、WHを無差別束縛して、さらに文頭に移動すると考えられる。例文(17)は以下の(20)のように説明できる。

(20) 日本語の複合名詞句島における無差別束縛



例文(17)は(20)で示すように、疑問OPは「誰が書いた本」であるDPに基底生成し、スコープ範囲にある疑問詞「誰」を無差別束縛して、さらに文頭に移動する。

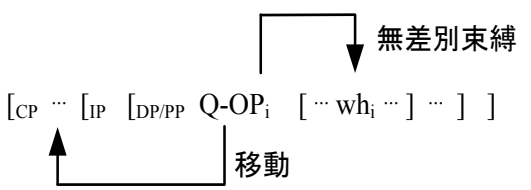
(21) 日本語の WH 島



例文(19)は(21)で示すように、疑問OPは「誰が」であるDPに基底生成し、スコープ範囲にある疑問詞「誰」を無差別束縛するが、CPにある「か（どうか）」によって阻止され、文頭に移動することができないので、「かどうか」がWH島を形成する。

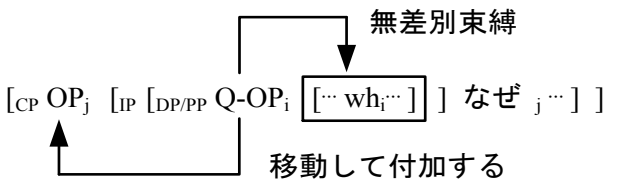
以上をまとめると、日本語疑問OPの基底生成位置と移動過程は以下の(22)のように示される。

(22) 日本語多重通常 WH 疑問文における無差別束縛



また、先行研究が述べているように、Nishigauchi (1990)は「なぜ」が通常のWHと異なり、sentential operatorとして文頭に生成すると指摘している。「なぜ」と通常のWHの特徴を考慮すれば、(23)で示しているように、通常WHのOPの基底生成位置はDP/PPであり、そこから移動して、文頭に基底生成する「なぜ」のOPに付加するので、競合関係が起こらず、共起できることが分かる。

(23) 日本語「なぜ」を含む多重 WH 疑問文における無差別束縛



2.3.2 統語論における中国語“为什么（なぜ）”

中国語疑問 OP がどこに基底生成するかについて、Tsai (1994)、Tsai (1999a)、Tsai (1999b)は以下のように考察した。

(24) *君は[誰が来るか（どうか）]知りたがっているの？ (= (19))

(25) 你　想知道　[谁　来不来]　（呢）？
Ni　xiangzhidao　shui　laibulai　ne
貴方　知りたい　誰　来るかどうか　か
a. Who is the person x such that you wonder whether x will come?
b. *Do you wonder who will come?
(Tsai 1999a: 60)

例文(24)の埋め込み文において疑問詞「誰」があるが、全体は WH 疑問文に解釈できず、Yes／No 疑問文にしか解釈できない。従って、日本語通常 WH は WH 島制約に従うと考えられる。Tsai (1999a)によれば、日本語の例文(24)に対して、中国語例文(25)では Yes／No 標識の“来不来（来るかどうか）”があっても、Yes／No 疑問文には解釈されず、WH 疑問文として解釈される。

また、下の例文(26)には通常疑問詞WHを含む複合名詞句が主文に埋め込まれている。その中の疑問詞“谁（誰）”は主文の疑問になれるので、中国語通常WHには複合名詞句島効果がないとTsai (1999a)は指摘した。

(26) 你　喜欢 [谁　买] 的　书

Ni　xihuan　shui　mai　de　shu
貴方　好き　誰　買う　comp　本
誰が買った本が好きですか？

(27) 谁　先　来，　谁　就　先　吃。
Shui xian　lai　shui　jiu　xian　chi
誰　先に　来る　誰　それで　先に　食べる
For every x, x a person, if x comes first, then x eat first.

(Tsai 1999a: 48)

(28) 谁　先来，　谁　就　可以　先　吃　呢?
Shui　xianlai　shui　jiu　keyi　xian　chi　ne
誰　先に来る　誰　それで　てもいい　先に　食べる　か
For which x, x a person, if x comes first, then x is allowed to eat first.

(Tsai 1999a: 50)

Tsai (1999a)によれば、例文(27)は疑問詞“谁（誰）”」があっても疑問文には解釈できず、文末に疑問の終助詞“呢”をつけると(28)、疑問文に解釈できる。従って、中国語通常の WH の OP は文頭に生成して、疑問詞を無差別束縛すると結論した(29)。

(29) 中国語多重通常 WH 疑問文における無差別束縛

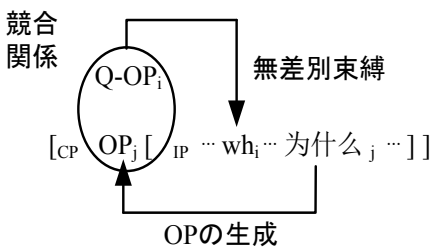
無差別束縛

$[_{CP}$ Q-OP$_i$ $[_{IP} \cdots wh_i \cdots]$ $]$

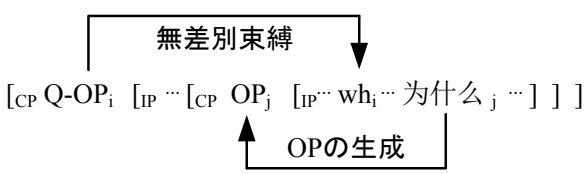
(30) * ［$_{NP}$［$_S$他　为什么　写］　的　书］　最　有趣 ？　(= (10))
Ta　weishenme　xie　de　shu　zui　youqu
彼　なぜ　書く　comp　本　一番　面白い
*彼がなぜ書いた本が一番面白いですか？

例文(30)を見て分かるように、“为什么（なぜ）”は他の WH と異なり、複合名詞句島制約に従うので、 OP は文頭に基底生成する。従って、中国語「为什么（なぜ）」は日本語「なぜ」と同じように、sentential operator を持ち、通常の疑問詞の OP によって無差別束縛されない。通常 WH の OP と“为什么（なぜ）”の OP はどちらも［Spec CP］に基底生成し、単文には［Spec CP］が一つしかないために、競合関係が出るが（(31)に囲みで示す）、複文になると、［Spec CP］は二つあるので、競合関係が消え、共起できるようになる(32)。

(31) 単文の中国語“为什么（なぜ）”を含む多重 WH 疑問文における OP の競合関係



(32) 複文の中国語“为什么（なぜ）”を含む多重 WH 疑問文における無差別束縛



2.3.3 2.3 節のまとめ

日本語の通常の WH の疑問 OP は DP/PP に基底生成し、「なぜ」の疑問 OP は sentential operator として文頭に基底生成し、前者はさらに後者に付加して、競合関係が起こらず、互いに共起できる。中国語は通常の WH の OP と「なぜ」の OP は同じ位置、つまり、文頭に基底生成されるので、単文では通常の WH と「なぜ」との間に競合関係が生じ、共起できない。複文になると、［Spec CP］が二つある

ので、それぞれの位置を一つ占めて解釈できるようになる。

2.4 意味論における考察

2.4.1 意味論における日本語「なぜ」

多重 WH 疑問文における疑問詞のペアリスト解釈について、Williams (2003: 142)は、次の例文(33)に対する答は、(34)で示すようなペアリストを示すと述べている。

(33) a. Who read what ?

b. *What does who read ?

(Williams 2003: 142)

(34) a. Bill read Moby Dick, Sam Omoo, and Pete Typee.

b. Bill read Moby Dick, Sam Omoo, and Pete Omoo.

c. *Bill read Moby Dick, Sam Omoo, and Sam Typee.

(Williams 2003: 142)

英語の WH 疑問文には顕在的 WH 移動があり、優位性効果が見られる。優位に移動した WH はペアリスト解釈において、広いスコープを取る。多重 WH 疑問文(33a)の答のペアリストは(34a、b、c)のような形になる。

答の(34)はそれぞれ以下の式で表現される。

a. Who: Bill, what (Bill) → Moby Dick
Who: Sam, what (Sam) → Omoo
Who: Pete, what (Pete) → Typee

b. Who: Bill, what (Bill) → Moby Dick
Who: Sam, what (Sam) → Omoo
Who: Pete, what (Pete) → Omoo

c. *Who: Bill, what (Bill) → Moby Dick

Who: Sam, what (Sam) → Omoo, Typee

多重 WH 疑問文のペアリスト解釈において、顕在的移動がある疑問詞 who は広いスコープを取り、関数の基準のようなものである。元位置にある疑問詞 what が基準に対する応答の集合[21]であると言える。上で書き換えた a、b、c を見て分かるように、基準と応答の間に、一対一、多対一の関係があるのは良いが、一対多の関係は許されない。

これに対応する形で、村田 (2011)は日本語多重 WH 疑問文を以下のように考察した。

(35) a. 誰が何を買ったの。
b. 何を誰が買ったの。

(村田 2011: 168)

(36) a. 太郎が大根を、次郎がキュウリを、花子がトマトを買った。
b. 太郎が大根を、次郎がキュウリを、花子が大根を買った。
c. *太郎が大根を、太郎がキュウリを、花子がトマトを買った。

(村田 2011: 168)

(37) a. 大根を太郎が、キュウリを次郎が、トマトを花子が買った。
b. 大根を太郎が、キュウリを次郎が、トマトを太郎が買った。
c. *大根を太郎が、大根を次郎が、トマトを花子が買った。

(村田 2011: 169)

(36)は(35a)の回答文であり、(37)は(35b)の回答文である。(35a)は疑問詞「誰」が「何」の前にあり、回答文でも「太郎」が「大根」より先に来る。その反対に、疑問詞「何」が「誰」の前にある(35b)の回答文では「大根」が「太郎」より先に来る。また、多数の基準＜who＞は一つの＜what＞に対応しても良いが、一つの基準

[21] 集合とはある条件にしたがうものを集めたものであり、通常、｛　｝で表す。

に対して、多数の答では不適格になる。言い換えれば、日本語には WH 顕在性移動のような優位性効果は見られないが、前にある WH が疑問の「基準」となり、後ろにある WH が基準に対する答の集合となる。よって、英語 WH 多重疑問詞疑問文に対する応答パターンは平行している。英語は顕在的移動した WH が優位とされる。日本語には、顕在的 WH 移動はないが、その代わりに前にある WH が優位となる。

以上のような考察を踏まえて、村田 (2011: 169)は多重 WH 疑問文のペアリスト解釈を次の指示関数によって表す。

(38) 指示関数

y=優位(x)

(村田 2011: 169)

(39) 関数 y=f(x)の特徴

a. 異なる x に対して y が同じであってもよい。

b. 同じ x に対して異なる y は許されない。

(村田 2011: 169)

x は基準で優位にある WH である。それは英語の顕在的移動がある WH に対応し、日本語の前にある WH に対応する。y は優位にある基準の x に対する答の集合である。

上述の先行研究を見て分かるように、「なぜ」を含む多重 WH 疑問文では、項の疑問詞（「誰が」「何を」）の方が一つでも先行しなくてはならない。上の指示関数によって解釈すれば、「なぜ」は基準にならず、基準に対応する結果のみを表すことができる。

また、「なぜ」の意味論的な解釈について、吉田 (2000)は「なぜ」は命題による理由を尋ねるので、疑問詞を含む開放文を作用域に取れず、どんな理由かを聞いた後に、「その理由で x が…」の x を決めるので語用論的に推論しにくいと指摘している。

(40) 山田さんはなぜその本を書いたの？　(吉田 2000: 239)

(41) a. 「なぜ」：∃p：CAUSE (p, q) (＝p という命題のゆえに、q という帰結)
b. λq [∃p & CAUSE (p, q =^[山田さんはその本を書いた])]
(＝(40)の文の意味表示)　(吉田 2000: 239)

(42) 誰がなぜパーティーを欠席したの？
a. 太郎「x」が病気だから、（太郎「x」が）パーティーを欠席したのだよ。
b. 太郎「x」は病気だから、（太郎「x」が）パーティーを欠席し、次郎「y」はお金がなかったから、（次郎「y」が）パーティーを欠席したんだ。　(吉田 2000: 242)

(43) *なぜ誰がパーティーを欠席したの？　(吉田 2000: 242)

例文(40)の意味を示す(41b)では、理由命題 p の存在が含意されており、帰結文 q の中に変項はない。例文(42)において、疑問詞は「誰」、「なぜ」と二つあるが、指示関数によれば、前にある疑問詞「誰」が広いスコープしか解釈できない。その回答文も「誰」に埋め込むことにより、「なぜ」と問う。そうでないと、「なぜ」が広いスコープを取るなら、つまり、「誰」の変項を含む開放文を作用域に取るならば、意味的には解釈できない。従って、「なぜ」が前にある例文(43)は非文になる。

まとめると、日本語多重 WH 疑問文において、前にある疑問詞は広いスコープで解釈され、指示関数による優位基準を示す。後ろにある疑問詞は狭いスコープで解釈され、指示関数による結果の集合を表す。「なぜ」を含む多重 WH 疑問文では、意味論的に「なぜ」は開放文を作用域に取れないので、必ず「なぜ」の前に、通常の WH が存在する。

2.4.2 意味論における中国語“为什么（なぜ）”

中国語単文において疑問詞“为什么（なぜ）”だけがある場合は問題ない。

(44) 你　<u>为什么</u>　感冒　了？

Ni　weishenme　ganmao　le

貴方　なぜ　風邪を引く　た

（貴方は）なぜ風邪を引いたの？

(45) λ q [∃p & CAUSE (p, q= ^[你感冒了])]

上の(45)は例文(44)の意味表示である。理由命題 p の存在が含意されて、帰結文 q の中に変項はない。すなわち、上の例文(44)はある原因があって、その原因が風邪を起こさせる。話者はその原因を聞くのである。また、単文においては、通常の疑問詞が二つ以上あっても良いが、“为什么（なぜ）”は通常の疑問詞と共起できない。

(46) 谁　买　了　<u>什么</u>？

Shui　mai　le　shenme

誰　買う　た　何

a. 誰が何を買ったの？

b. 何を誰が買ったの？

例文(46)には疑問詞が“谁（誰）”と“什么（何）”と二つあり、それぞれ広いスコープを取る解釈ができる。「誰が何を買ったの」、あるいは「何を誰が買ったの」という意味である。しかし、下の単文(47) (48)には“为什么（なぜ）”と“谁（誰）”があるが、いずれも非文である。

(47) *<u>为什么</u>　<u>谁</u>　会　辞职？

Weishenme　shui　hui　cizhi

なぜ　誰　will　辞職する

日本語訳：誰がなぜ辞職するの

(Tsai 2008: 104)

(48) *谁　　为什么　　不　　来?
Shui　　weishenme　bu　　lai
誰　　なぜ　　ない　来る
日本語訳：誰がなぜ来ないの？

(Huang 1982: 545)

中国語母語話者は例文(47) (48)を聞くと、何を聞かれているのか捉えがたい感じがする。換言すれば、疑問の焦点が“谁（誰）”にあるのか、または“为什么（なぜ）”にあるのか分からない状態になる。詳しく言えば、“谁（誰）”が広いスコープを取るか、あるいは“为什么（なぜ）”が広いスコープを取るのかが決まらない。

単文ではなく、複文の埋め込み文においては、“为什么（なぜ）”と通常疑問詞が共起できるが、“为什么（なぜ）”の方が狭いスコープを取る解釈しかない。

(49) 你　　想　　知道　　谁　　买　　了　什么?
Ni　　xiang　zhidao　shui　mai　　le　shenme
貴方　たい　知る　　誰　　買う　　た　何
貴方は誰が何を買ったことを知りたいですか？
a. For which x, x a person, you want to know what x bought.
b. For which y, y a thing, you want to know who bought y.

(Huang 1982: 525)

例文(49)は埋め込み文に通常の疑問詞“谁（誰）”と“什么（何）”があり、解釈が a、b 二つある。(49a)は“谁（誰）”は広いスコープを取り、“什么（何）”が狭いスコープを取る解釈であり、その回答文は(50)ア、イで答えて良いが、ウで答えると奇妙である。(49b)は“谁（誰）”は狭いスコープを取り、“什么（何）”は広いスコープを取る解釈であり、その回答文は(51)ア、イで答えても良いが、ウで回答すれば奇妙である。

上で説明した指示関数によれば、広いスコープを取る疑問詞は優位の基準であ

り、狭いスコープを取るものは基準に対する答の集合である。

(50) (49a)の回答ペアリスト

ア．太郎买了萝卜，次郎买了黄瓜，花子买了西红柿。
（太郎が大根を、次郎がキュウリを、花子がトマトを買った。）

表現形式を変えれば、以下のようになる。

誰：太郎，何(太郎)→大根
誰：次郎，何(次郎)→キュウリ
誰：花子，何(花子)→トマト

(50)アでは基準は“谁（誰）”であり、“什么（何）”は回答の集合である。回答文を見て分かるように、異なる基準を入れると、違う回答が出る。基準と回答は一対一の関係である。

イ．太郎买了萝卜，次郎买了黄瓜，花子买了萝卜。
（太郎が大根を、次郎がキュウリを、花子が大根を買った。）

表現形式を変えれば、以下のようになる。

誰：太郎，何(太郎)→大根
誰：次郎，何(次郎)→キュウリ
誰：花子，何(花子)→大根

イはアと同じく、基準は“谁（誰）”であり、“什么（何）”は回答である。回答のペアリストを見て分かるように、「太郎」を入れると、「大根」が出て、「花子」を入れても、「大根」が出る。即ち、異なる基準を入れて、同じ回答が出ても良い。

ウ．*太郎买了萝卜，太郎买了黄瓜，花子买了西红柿。
（太郎が大根を、太郎がキュウリを、花子がトマトを買った。）

表現形式を変えれば、以下のようになる。

誰：太郎，何(太郎)→大根、キュウリ
誰：花子，何(花子)→トマト

ウは上のア、イと同じく、基準は“谁（誰）”である．ただし、「太郎」を入れると、複数の回答（「大根」と「キュウリ」）が出るので、不適当な回答になる。即ち、基準と回答は一対多の関係では容認できない。

例文(49)の解釈 b の回答文は以下のようになる。解釈 a と異なり、b は“谁（誰）”が狭いスコープを取り、“什么（何）”が広いスコープを取る。回答のペアリストは以下のア、イ、ウであり、アとイは良い回答であり、ウは不適切な回答文である。

(51) (49b)の回答ペアリスト

ア．萝卜、是太郎买的，黄瓜、是次郎买的，西红柿、是花子买的。
（大根は太郎が買ったもので、キュウリは次郎が買ったもので、トマトは花子が買ったものだ。）

見方を変えれば、以下のようになる。

何：大根，誰(大根)→太郎
何：キュウリ，誰(キュウリ)→次郎
何：トマト，誰(トマト)→花子

上のペアリストを見て、それぞれ異なる“什么（何）”を入れると、違う“谁

（誰）”が出てくる。基準と回答の間に、一対一の関係がある。

イ．萝卜、是太郎买的，黄瓜、是次郎买的，西红柿、也是次郎买的。
（大根は太郎が買ったもので、キュウリは次郎が買ったもので、トマトも次郎が買ったものだ。）

見方を変えれば、以下のようになる。

何：大根，誰(大根)→太郎
何：キュウリ，誰(キュウリ)→次郎
何：トマト，誰(トマト)→次郎

上を見て分かるように、異なる“什么（何）”を入力すれば、回答が同じであっても良い。つまり、基準と回答が多対一でも、適切である。

ウ．*萝卜、是太郎买的，萝卜、是次郎买的，西红柿、是花子买的。
（大根は太郎が買ったもので、大根は次郎が買ったもので、トマトは花子が買ったものだ。）

表現形式を変えれば、以下のようになる。

何：大根，誰(大根)→太郎
何：大根，誰(大根)→次郎
何：トマト，誰(トマト)→花子

上のペアリストを見れば、分かるように、同じ基準を入れて、異なる回答が出ると不適切であることが分かる。言い換えれば、基準と回答の間に一対多の関係がある場合、不適切になる。

以上の(49a、b)に対する回答文を見て分かるように、中国語多重 WH 疑問文の回答のペアリストは日本語と同じである。ただし、日本語は前にある WH が基準と

なるが、中国語は基準になる WH と回答の集合となる WH との間に語順の前後関係はない。

このペアリスト読みの関係は次の指示関数でも一致している。

(52) 指示関数　　(= (38))

y=優位(x)　　(村田 2011: 169)

(53) 関数 y=f(x)の特徴　　(= (39))

a. 異なる x に対して y が同じであってもよい。

b. 同じ x に対して異なる y は許されない。

(村田 2011: 169)

しかし、複文においては、通常の WH と“为什么（なぜ）”は共起できる。ただし、意味解釈では、通常の WH は広いスコープをとり、“为什么（なぜ）”は狭いスコープを取る。

(54) 你　想　知道　李四　<u>为什么</u>　买　了　<u>什么</u>?

Ni　xiang　zhidao　Lisi　weishenme　mai　le　shenme

貴方　たい　知る　李四さん　なぜ　買う　た　何

a. What is the thing x such that you wonder why Lisi bought x ?

b. *Why do you wonder Lisi bought what ?

(Huang 1982: 526)

例文(54)において疑問詞は“为什么（なぜ）”と“什么（何）”と二つある。意味的には、通常 WH 疑問詞“什么（何）”が広いスコープを取り、“为什么（なぜ）”が狭いスコープを取る a にしか解釈できない。言い換えれば、通常 WH 疑問詞“什么（何）”が狭いスコープをとり、“为什么（なぜ）”が広いスコープを取る解釈 b には解釈できない。

例文(54a)の意味表示は以下のようである。

λq [∃x： you want to know： ∃p [CAUSE (p, q = ^[Lisi bought x])]]

解釈(54a)は指示関数によって表現すれば、“什么（何）”が広いスコープを取り、優位にある基準である。“为什么（なぜ）”が狭いスコープを取り、その基準に対する答えの集合である。(54a)の回答ペアリストは以下の(55)のようになる。

(55) 我知道李四买午饭，是因为饿了，买苹果，是因为喜欢，买雨伞，是因为天要下雨了。
（李四さんはご飯を買ったのはお腹がすいたから、リンゴを買ったのは好きだから、雨傘を買ったのは雨が降りそうなのである。）

回答の(55)の書き方を整理すれば、以下のようになる。

何：ご飯，なぜ(ご飯)→お腹がすいたから
何：リンゴ，なぜ(リンゴ)→リンゴが好きだから
何：傘，なぜ(傘)→雨が降るから

基準の“什么（何）”に何かを入れると、それに応じて“为什么（なぜ）”の回答が出る。(55)は基準と回答は一対一の関係である。あるいは、多対一の関係でも良いが、ここでは省略する。
解釈(54b)は錯誤解釈であるが、強いて意味表示すれば、以下のようになる。

λq [∃p：you want to know： ∃x [CAUSE(p, q=^[Lisi bought x])]]

解釈(54b)によれば、“为什么（なぜ）”が優位にある基準であり、“什么（何）”を含む広いスコープを取るので想定しにくい。言い換えれば、(54)は“为什么（なぜ）”が広いスコープを取る b に解釈できない。意味論的にも“为什么（なぜ）”は指示関数の優位基準になれない。

指示関数 y=優位(x)

なぜ: ？？何(？？)→？？

2.4.3 2.4 節のまとめ

日本語多重 WH 疑問文では前にある WH は広いスコープを取り、指示関数の基準になる。後ろにある WH は狭いスコープを取り、指示関数の結果の集合になる。「なぜ」は意味論的に広いスコープを取る基準になれないので、文の構造上、先頭の WH としては出現できない。

中国語多重 WH 疑問文における“为什么（なぜ）”は意味論的に日本語「なぜ」と同じで、狭いスコープにしか解釈できない。ただし、中国語多重 WH 疑問文における“为什么（なぜ）”は埋め込み文に埋め込まれなくてはいけない。まとめると、中日両言語における「为什么／なぜ」は意味論的には同じであるが、統語的には、分布の仕方が異なる。

2.5 第 2 章のまとめ

本章は統語論と意味論の両面から中日における「なぜ／为什么」の異同を考察した。統語論的には、日本語「なぜ」は他の通常疑問詞と単文において共起でき、中国語“为什么(なぜ)”は単文において他の通常疑問詞と競合関係があり、共起できない。他方、複文において競合関係が消えるのは、日本語通常疑問詞の OP は DP／PP に基底生成し、スコープ範囲以内の疑問詞を無差別束縛して、文頭に移動し、文頭に基底生成する「なぜ」の sentential operator に付加するので、競合関係が起こらないからである。中国語“为什么”は sentential operator として文頭に基底生成し、通常の疑問詞の OP も基底生成するので、競合関係が起こり、複文の場合、［Spec CP］が二つあるから、それぞれ基底生成して、共起できる。意味論的には、両言語において、「なぜ／为什么」は両方とも指示関数の基準になれず、関数による結果だけを表すことができる。すなわち、多重 WH 疑問文において、「なぜ／为什么」は狭いスコープを取り、他の疑問詞は広いスコープを取る解釈しかない。

言い換えれば、中日における「なぜ／为什么」は意味論的に同じであるが、統語論的に異なるのは両言語の疑問 OP の基底生成位置が違うからではある。

しかし、Williams (2003)によれば、英語多重 WH 疑問文において、顕在的移動の WH がペアリスト読みの基準であり、顕在的移動のない WH は基準に対する結果

の集合である。

(56) Who read what ?　　(= (33a))

(57) Why did John buy what ?

例文(56)では顕在的移動の who は基準であり、元位置にある what は who に対応する結果の集合になる。そうすれば、例文(57)には顕在的移動のある why は基準になってしまう。これは上に指摘した中日両言語における「なぜ／为什么」の意味論的特徴とは一致しない。このような相違がなぜ生じるのかは今後の課題として残す。

第 3 章 発話行為理論における「か」と“吗”の対照研究

3.1 問題提起

中日両言語において、それ自身が疑問の意味を持つと言える文末終助詞には「か」、“吗”などがある。それらは意味的には対応しているが、用法上ではそれぞれ異なった特徴を持っている。

(1) a. 我　问　他：“你　去　北京　吗？”
Wo　wen　ta　ni　qu　Beijing　ma
私　聞く　彼　あなた　行く　北京　か
日本語訳：「あなたは北京にいきますか」と彼に聞きました。
b. 「あなたは北京に行きますか？」と李さんは彼に聞きました。

(2) a. *我 不　知道　他　去　北京　吗。
Wo　bu　zhidao　ta　qu　beijing　ma
私　否定　知っている　彼　行く　北京　か
日本語訳：彼が北京に行くか分りません。
b. 彼が北京に行くか分かりません。

(3) a. 原来　在　这儿　啊／*吗。
Yuanlai　zai　zheer　a／*ma
もともと　ある　ここ　か[22]／*か[23]
日本語訳：ここにあったのか。
b. ここにあったのか。

(1a、b)では、直接引用部分は会話文であり、そこにそれぞれ文末に疑問の“吗”

---

[22] この「か」は感嘆を表す「か」である。

[23] この「か」は疑問を表す「か」である。

と「か」がある。(2a、b)は(1a、b)における直接引用部分を主文に埋め込んだ場合である。これらを見てわかるように、日本語「か」は埋め込み文にも使い、中国語“吗”は埋め込み文には使えない。また、(3a、b)の使用環境は、ある人が教科書を教室に忘れたかもしれないと思って、教室に戻って見つけた時の独り言であるが、日本語文には「か」を使うが、中国語文には、「か」と対応する“吗”ではなく、“啊”を使う。

以上の例文から見て、日本語「か」は会話文にも主文の埋め込み文にも使えるし、独り言にも使えることがわかる。それに対して、中国語“吗”は主文の埋め込み文と独り言には使えず、会話文だけに使う。本章は文末終助詞の日本語「か」と中国語“吗”における相違点・共通点について、語用論における発話行為理論(Searle 1969)[24]を利用して、併せて歴史発展経緯の考察で、「か」と“吗”がそれぞれ、どのような使用特徴があるか、また、なぜそのような使用特徴が生じるのかを考察する。

3.2 先行研究

日本語「か」と中国語“吗”については、それぞれ考察した論文が多数あるが、両方を対照して研究したものは少ない。日本語「か」について研究した論文は、古文の「か」についての研究もあれば、現代文の「か」についての研究もある。古文の「か」に関しては、主に係り結びの小辞とする「か」の消失と係り結び現象の消失の関係について研究されてきた(Watanabe 2002 など)。

これについて、伝統的な観点では、動詞の連体形と已然形がなくなったので、係り結びが消失したとされる。Watanabe (2002)は話題 topic が主語の前に出現して、語順が変化したので、係り結びがなくなったのであり、しかも、係り結びの消失に伴い、係り結びに使う小辞の「か」は文末に追いやられたと指摘した。また、磯部(1990)は『源氏物語』を資料として、中古和文の疑問表現の特徴を考察した。

現代文の「か」に関しては、主に補文標識「か」の移動について研究されている。Hagstrom (2004)、外池 (2014a)は、「か」は文中で焦点化された名詞か WH 疑問詞

---

[24] なぜ語用論における発話行為理論 (Searle 1969)を利用するのかについては本稿の 1.1.2 節で説明する。

から文末への非顕在的な移動がなされると指摘した(4)。t_iは「か」の移動の前の痕跡である。

(4) John が何を t_i 買いましたか $_i$？ (Hagstrom 2004: 235)

また、Nishigauchi (1990)によれば、日本語 WH 疑問詞は量化詞の力を持たず、「か」など量化詞の小辞は WH 疑問詞の意味解釈に関連する情報を与える。つまり、小辞は数量詞や疑問詞のスコープなどを取り扱う働きをする。統語構造においては、量化詞小辞の「か」は高い位置にあり、下の位置にあるスコープ内の WH 句に演算子としての意味(quantificational force)を与えると指摘した。

Nishigauchi (1990)に対して、Tsai (1999a)は日本語 WH 句は変項であり、小辞の「か」は、統語的に変項である疑問詞に疑問の意味を付与すると指摘した。また、Saito (2012)は全体的に日本語の補文標識システムを分析し、「か」は疑問の補文標識で、対格の位置(5)に現れることができると指摘した。

(5) 彼は［花子がどこに行くべきか］（を）検討した。 (Saito 2012: 161)

中国語“吗”に関する研究は主に歴史的発展の面から“吗”の由来を考察したものである。例えば、王力 (1980)は発音の歴史的変化の立場から、“吗”は“麽”から、“麽”は“無”から来たと考察した。吴福祥 (1997)は文法の歴史的発展の立場から、“吗”は“麽”から、“麽”は「VP−“無”」における“無”から来たと指摘した。現代文の“吗”に関しては、Cheng (1991)は Clausal Typing Hypothesis 理論を使い、“吗”は埋め込み文に使えず、Yes／No 疑問文の標識であると指摘した。

「か」と“吗”の対照研究については、張恵芳 (2010)は会話機能において、話題の提示・展開機能、確認要求機能、評価・感想の表示機能と三つの表現機能から、自然会話に現れる「ではないか」と“不是…吗？”を比較して、その相違点について、「ではないか」の方は主に機能話題の提示・展開機能を持ち、“不是…吗？”の方は評価・感想の表示機能を持っていることを指摘した。

以上のような先行研究をまとめると、日本語「か」に関する先行研究[25]は主に疑問小辞としての「か」についてであるが、独り言における「か」に触れた研究は少ない。また“吗”に関する研究[26]は主に歴史的な由来についてであり、現代語の“吗”に関する研究は Yes／No 疑問文の標識と指摘するだけでは不十分ではないかと考えられる。両者の対照研究では「ではないか」と“不是…吗？”は特定の文法形式として、会話機能における相違点を持っていると指摘されたが、単独で「か」と“吗”にはそれぞれどのような使用特徴があるかは先行研究では考察されていない。

以上を見て分かるように、これまでの日本語「か」と中国語“吗”についての研究及び両者の対照研究は十分なものとは言いがたい。例えば、日本語「か」と中国語“吗”はどのような異なる特徴を持つか、また、なぜそのような相違点が出てくるのかという問題を正面から扱った研究はほとんど見当たらない。本章では、先行研究で十分に考察されてこなかった、日中両言語における「か」と“吗”の相違点について、語用論における発話行為理論(Searle 1969)を利用して、併せて歴史発展経緯の考察において、対照的考察を行い、より明確な解決案を提示する。

3.3 考察

まず、考察に入る前に、分析に使う発話行為理論を紹介する。

語用論における発話行為の分析において、言語行為は「発語行為」、「命題行為」、「発語内行為」、「発語媒介行為」と 4 種類に区別される。「発語行為」は一定の音声や文法上の語や文などを発話する行為のことを指し、「命題行為」は話者が言った命題の内容のことであり、「発語内行為」は発話行為を通して、依頼、命令、警告などの機能を担う行為が成立するものである。また、「発語媒介行為」は発話することにより、何らかの効力を結果として生み出す行為であり、いわばコミュニケーション行為の副産物である(Searle 1969)。本章が取り上げる「か」と

---

[25] 日本語文末終助詞「か」に関する先行研究については、さらに詳しく本章の 4.2.1.1 節と 4.2.2.1 節で見る。

[26] 中国語文末終助詞“吗”についての先行研究は、さらに詳しく本章の 4.2.1.2 節と 4.2.2.2 節で見る。

“吗”が表す疑問・感嘆の行為などは言語行為の「発語内行為」の領域に属するものである。

さらに、サールは「発語内行為」を「断定型」、「行為指示型」、「行為拘束型」、「表出型」、「宣言型」と五つに分類している。「断定型」は事実について陳述するものであり、現実世界に一致すれば「真」、異なれば「偽」になる。つまり、「断定型」によって表された文は意味の実在的な見方と一致している。「行為指示型」は依頼、命令など聞き手にある行為を指示するものである。「行為拘束型」は話し手がある行為を約束するものであり、「表出型」は嘆き、歓迎など話し手の心理状態を表現するものであり、「宣言型」は命名、任命など、命題内容と現実との一致をもたらすものである。

また、サールは、質問は情報の依頼であるので、依頼の特殊例として、相手に実際の動作を求める命令とともに、「行為指示型」に属すると指摘した(Searle 1969)。言い換えれば、聞き手の存在を意識して何かを求めることは「行為指示型」の前提であると言って良い。従って、ここでの質問は聞き手目当ての疑問だと見られる。聞き手目当てということは、聞き手を強く意識しているということである。

以上、発話行為理論を紹介したが、次に、発話行為理論を使って、考察対象とする「か」と“吗”が疑問文、独り言、感嘆文、三人称小説地の文に使われる時、どのような発語内行為型に属すか、また、その時、どのような言語機能を果たすかを見よう。

3.3.1 疑問における「か」と“吗”

3.3.1.1 疑問における日本語「か」

まず、Yes／No 疑問文における「か」を見よう。

コンテクスト:話者 A は一緒にアルバイトしている田中さんと話し合っている。話者 A は聞き手の田中さんに向かって(6)のように聞いた。

(6) 田中さんは学生ですか？

(6)は日本語 Yes／No 疑問文である。それは話者Aが聞き手の田中さんに「学生であるかどうか」という情報を提供してもらうという意味を表している。

通常、意味論において、ある文の意味はその文が表す情報を満たす集合である。疑問文はある条件を満たす選択肢の集合を表す(Hamblin 1973)。そこで、疑問の文末終助詞はその集合の選択肢から一つを聞き手に選んでもらうという意味になる。例えば、Yes／No 疑問文はある事態や出来事などに対して、その真理値の「真／偽」について、聞き手に選んでもらうことを表す文である。つまり、(6)は｛田中さんは学生である（真）、田中さんは学生ではない（偽）｝という命題の集合から、一つを選ぶという意味を表している。そこで、文末にある「か」は二つの選択肢から一つを選んでもらうことを表す。

サールは「発語内行為」の特徴を示す場合に、個別の「発語内行為」が成立する条件は「命題内容条件」、「準備条件」、「誠実条件」、「本質条件」と四つあると指摘し、「行為指示型」の一つである「質問」の条件について、以下のように示した。

命題内容条件：任意の命題または命題関数
準備条件：S (speaker) は「答え」を知らない。すなわち、その命題が真であるか否か、あるいは命題関数の場合には、補充してその命題を真にするために必要な情報を知らない。その時点で尋ねられなくとも H (hearer) がその情報を与えるということは、S と H にとって自明ではない。
誠実条件：S はその情報を求めている。
本質条件：H からこの情報を誘発するという試みとして見なされる。
(Searle 1969: 66、土屋ほか訳 1986: 125)

これらに(6)を当てはめてみよう。

話者は(6)を言う時、「田中さんが学生である」かどうかを知らない、つまり「田中さんが学生である」という命題が真であるかどうかを知らない。しかも、聞き手は聞かれなくても、「田中さんが学生である／ではない」という情報を与えるかどうかは明らかではない。話者はただその情報を望んでいるだけで、聞き手に情報を取り出そうと、試みて聞いたのである。以上を考えると、(6)は質問の条件を満たすので、「行為指示型」に属することがわかる。従って、(6)のように、話者は聞き手を意識して、ある事態や出来事の Yes／No の意見を求める立場から考えれ

ば、Yes／No 疑問文主文の文末にある「か」は言語の「行為指示型」の文に使えることが分かる。

また、話者 A は聞き手の田中さんに向かって(6)を発した時、聞き手の田中さんがいる必要がある。言い換えれば、話者が Yes／No 疑問文を口頭で発する時、必ず聞き手がいる。

本章では、このような、聞き手が必ずいる疑問は聞き手目当ての疑問と定め、聞き手に情報の提供を依頼する言語の機能を情報提供の依頼機能と定義する。そこで、Yes／No 疑問文文末にある「か」は聞き手目当ての疑問を表し、言語の情報提供の依頼機能を果たすことが分かる。

次に、日本語の WH 疑問文主文の文末にある「か」をみてみよう。

コンテクスト：話者 A は友達の李さんと一緒に勉強している。李さんが突然椅子から立ち上がって、どこかに出かけようとする。この時、話者 A は李さんに(7)のように話しかけた。

(7) どこに行くんですか？

(7)は WH 疑問文であり、文末に「か」がある。それは話者 A が聞き手の李さんに「行く場所」について情報を確かめてもらう意味である。疑問文はある条件を満たす選択肢の集合を表すという Hamblin (1973)の説を使うと、(7)は｛学校の図書館に行く、学校の食堂に行く、家に帰る、運動場に行く……｝という開放命題の集合から、一つを選んでもらう意味を表している。そこで、文末にある「か」はその多数の選択肢から一つを選んでもらうという意味になる。

WH 疑問文文末における「か」は Yes／No 疑問文文末における「か」と同じように、話者が WH 疑問文を発話する時、通常、それは、聞き手を意識する場合、聞き手に情報を求める時の発言であり、それは言語の「行為指示型」と考えられる。従って、WH 疑問文文末にある「か」は言語の「行為指示型」に属している。

また、話者 A は聞き手の李さんに向かって(7)を発した時、聞き手の李さんがいる必要がある。聞き手とする李さんがいないと、その発話が奇妙になる。言い換えれば、話者が WH 疑問文を発話する時、通常、それは、聞き手を意識する場合、聞き手に情報を求める時の発言である。このような意味から、WH 疑問文文末に

ある「か」は Yes／No 疑問文文末における「か」と同じように、聞き手目当ての疑問であり、言語の情報提供の依頼機能を果たすと言えるだろう。

さらに、陳述文主文の埋め込み文文末における「か」を考察する。

(8) a. 田中さんは学生ですか？ (= (6))
b. 田中さんが学生であるか（どうか）分かりません。

(9) a. どこに行くんですか？ (= (7))
b. 李さんがどこに行くのか分かりません。

(8a)は Yes／No 疑問文であり、(8b)は(8a)を埋め込んだ陳述文である。同じように、(9a)は WH 疑問文であり、(9b)は(9a)を埋め込んだ陳述文である。(8a、b)と(9a、b)を見てわかるように、Yes／No 疑問文文末にある「か」であれ、WH 疑問文文末にある「か」であれ、主文に埋め込まれても容認できる。ただし、(8b)と(9b)は陳述文であり、それは話者が聞き手に情報を求めるわけではなく、自分からある出来事について情報を叙述して伝達している。本章では、このような、ある出来事について情報を叙述することを言語の叙述機能と定義する。そこで、(8b)と(9b)における「か」は聞き手目当ての直接疑問を表す(8a)と(9a)における「か」と異なり、間接疑問を表し、言語の叙述機能を果たすと言える。

また、前に述べた言語行為の「発語内行為」の下位 5 分類の一つである「断定型」の条件について、サールは以下のように述べた。

命題内容条件：任意の命題 P (proposition)
準備条件： S (speaker) は P が真であるということを支持する証拠（あるいは理由その他）を持っている。H (hearer) が P を知っている（あるいは、あえてそのことを思い出させる必要がないなど）ということは、S と H にとって自明ではない。
誠実条件：S は P を信じている。
本質条件： P が現実の事態を表示しているということを引き受けていることとして見なす。 (Searle 1969: 66、土屋ほか訳 1986: 124)

ここでは、(9b)を選んでこれらの条件を当てはめてみよう。

話者は自分が「李さんがどこに行くか分からない」という状態について確信している。つまり、「李さんがどこに行くか分からない」という命題が真であるということについて話者は知っている。しかも、聞き手が「話者が李さんがどこに行くか分からない」ということを知っているかどうかは話者にとって自明ではない。ただ自分が「李さんがどこに行くか分からない」ことは知っている。

以上を考えると、(9b)は「断定型」の条件を満たし、「断定型」に属することがわかる。言い換えれば、埋め込み文文末における「か」は間接疑問を表し、「断定型」の文に使える。

最後に、質問文の主文に埋め込まれた文の文末にある「か」を見よう。

(10) a. 李さんがどこに行くか分かりません。　　(= (9b))
　　b. 李さんがどこに行くか分かりますか？

(11) a. はい、わかります。／いいえ、分かりません。
　　b. ？？東京です。

前に検討したように、(10a)は陳述文であり、その中の埋め込み文にある「か」は間接疑問を表している。(10b)は(10a)に対応している聞き手目当ての質問文[27]である。それは「李さんがどこに行くか」という WH 疑問文を埋め込んでいるが、主文としては、聞き手に「李さんがどこに行くか分かる」という事態について、Yes／No の確認を求めている。なぜなら、その回答文として(11a)は適当であるが、「どこ」について答えた(11b)は容認できないからである。そこで、文=命題+モダリティという観点から考えれば、Yes／No 疑問文(10b)の主文文末にある「か」は聞き手目当ての疑問を表しており、その中の埋め込み文文末にある「か」は(10a)にある「か」と同じように、命題の中にあるので、間接疑問を陳述する役割を果たしていることが分かる。

また、(10b)の埋め込み文文末にある「か」は(10a)／(9b)の「か」と同じように言

[27] 主文の疑問文を指す。以降は同じである。

語行為の「断定型」の条件を満たし、「断定型」に属することが分かる。

3.3.1.1 節をまとめていうと、Yes／No 疑問文であれ、WH 疑問文であれ、主文の文末にある「か」は聞き手目当ての疑問を表しており、言語行為の「行為指示型」に属しており、言語の情報提供の依頼機能を果たす。主文の中に埋め込まれた文の文末にある「か」は疑問を間接的に叙述し、言語行為の「断定型」に属しており、言語の叙述機能を果たす。

3.3.1.2 疑問における中国語“吗”

まず、Yes／No 疑問文文末にある“吗”を検討する。

コンテクスト：李さんは最近、仕事の出張があると同僚の田中さんに話していた。田中さんは出張の目的地はどこであるかと李さんに(12)のように聞いた。

(12) 你　去　北京　吗?
Ni　qu　Beijing　ma
あなた　行く　北京　か
日本語訳：北京に行きますか？

(12)は中国語 Yes／No 疑問文である。それは話者が聞き手に「北京に行くかどうか」という情報を確かめてもらう意味を表している。3.3.1.1 節で述べた、ある文の意味はその文が表す情報を満たす集合であり、疑問文はある条件を満たす選択肢の集合を表すという概念を使うと、(12)は｛李さんは北京に行く（真）、李さんは北京に行かない（偽）｝という命題の集合から、一つを選ぶという意味を表している。そこで、文末にある“吗”は二つの選択肢から一つを選んでもらうことを指す。

また、話者の田中さんは聞き手に向かって(12)を発した時、聞き手の李さんがそこにいる必要がある。聞き手である李さんがいないと、その発話が奇妙になる。そこで、Yes／No 疑問文文末にある“吗”は日本語 Yes／No 疑問文文末にある「か」と同じように、聞き手目当ての疑問に使えることが分かる。この“吗”は言語の情報提供の依頼機能を果たす。

そして、Yes／No 疑問文文末にある“吗”が主文に埋め込まれる状況を考察しよう。

(13) a. *我　不　知道　他　去　北京　吗。　(= (2a))
Wo　bu　zhidao　ta　qu　beijing　ma
私　否定　知っている　彼　行く　北京　か
日本語訳：彼が北京に行くか分りません。

b. 我　不　知道　他　是否　去　北京。
Wo　bu　zhidao　ta　shifou　qu　beijing
私　否定　知っている　彼　かどうか　行く　北京
日本語訳：彼が北京に行くかどうか分りません。

(13a)は(12)を主文に埋め込んだ文であり、非文である。言い換えれば、中国語 Yes／No 疑問文はそのまま主文に埋め込むことはできない。したがって、主文に埋め込まれてはならない“吗”は疑問を間接叙述することができず、言語の叙述機能がないことが分かるだろう。また、“吗”の代わりに、同じ意味を持つ、埋め込み文に使える“是否”（「かどうか」に相当する）に変えると自然になる(13b)。“是否”が“吗”とどのような関連性があるかは本章の研究目的から外れるので、ここでは省略する。

次に、“吗”は WH 疑問文に使えるかどうかを見よう。

(14) a. 小李　吃　了　什么 ∅?
Xiaoli　chi　le　shenme
李さん　食べる　た　何
日本語訳：李さんは何を食べましたか？

b. 小李　吃了　什么　吗?
Xiaoli　chi　le　shenme
李さん　食べる　た　何

日本語訳：李さんは何かを食べましたか？

(14a)は中国語 WH 疑問文であり、文末に終助詞はない。ここでは、ゼロ終助詞（∅）を仮定する。(14a)の文末に“∅”の代わりに“吗”をつけると、自動的に Yes／No 疑問文に変わり、疑問詞“什么（何）”は自動的に不定名詞“什么（何か）”に変わる(14b)。以上から見て分かるように、中国語 WH 疑問文では、疑問の文末終助詞“吗”をつけることはできない。また、疑問文はある条件を満たす選択肢の集合を表すという概念を使うと、“吗”は二つの選択肢から一つを選んでもらうことを表せるが、たくさんの選択肢から一つを選んでもらうことを表せないことが分かる。

最後に、“吗”は主文に埋め込まれた WH 疑問文文末に使えるかどうかを見よう。

下の(15)は(14a)をそのまま埋め込んで、文法的になるが、その WH 疑問文である埋め込み文文末に“吗”を挿入すると、非文になる。つまり、WH 疑問文はそのまま主文に埋め込まれても良いが、文末に“吗”を挿入してはならない。

(15) 我　不　知道　小李　吃　了　什么。
Wo　bu　zhidao　xiaoli　chi　le　shenme
私　否定　知っている　李さん　食べる　た　何
日本語訳：李さんが何を食べたか分かりません。

(16) *我　不　知道　小李　吃　了　什么　吗。
Wo　bu　zhidao　xiaoli　chi　le　shenme　ma
私　否定　知っている　李さん　食べる　た　何　か
日本語訳：李さんが何を食べたか分かりません。

以上をまとめると、中国語“吗”は WH 疑問文文末に使えず、Yes／No 疑問文文末だけに使える。また、Yes／No 疑問文であれ、WH 疑問文であれ、埋め込まれた場合には一切使えない。

語用論における言語行為の分析において、聞き手を意識しながら、命令や質問などの形で発言するのは言語行為の「行為指示型」に属している。日本語の Yes／No 疑問文の発言状況と同じように、通常、話者は中国語“吗”が文末にある Yes／No 疑問文を発する時、必ず聞き手がいる。それは聞き手目当ての質問だと言える。聞き手がいない場合に使うと、話者は病的な人であると考えられる。従って、中国語“吗”は聞き手目当ての質問のみに使い、「行為指示型」であり、言語の情報提供の依頼機能を果たすことがわかる。また、3.3.1.1 節で述べた「断定型」の条件を見てわかるように、“吗”は埋め込み文に使えないので、埋め込み文に使える日本語「か」と異なり、言語行為の「断定型」に属することができない。つまり、“吗”は間接的に疑問を叙述することができず、言語の叙述機能を果たすことができない。

3.3.2 独り言における日本語「か」と独り言に使えない中国語“吗”

まず、本章で捉える独り言の概念を明示する。独り言とは、人がある忘れていたことを思い出した瞬間、あるいは、あること／ものを気がついたその場で、「驚き・意外」などの気持ちを抑えきれず、無意識のうちに発声するものである。意図して聞き手に向かって発するわけではないから、独り言は対人コミュニケーションの役割を果たしていないと考えられる。

3.3.2.1 独り言における日本語「か」

(17) ここにあったのか。　　(= (3b))

(18) *ここにあったのですか？　　（独り言として不適格）

(17)は 3.1 節で出した例であり、それはある人が教科書を教室に忘れたかと思って、教室に戻って見つけた時の独り言である。それは聞き手を意識して情報を求めるために聞き手に聞くわけではなく、「教室に忘れたのかもしれない」と自分が思ったことに対して、本当に見つけた時の「意外・驚き」を抑えきれない発言である。文末に「か」があり、聞き手目当ての質問に見えるが、聞き手がいるかどうかを意識せず、「忘れた本は教室にあった」と思った通りに気が付いたその場での話

者自身の意外性の表現である。普通の疑問文は話者は前もってある未確定要素を持つ命題を心の中で想定して、聞き手に聞く。これと異なり、独り言は話者は前もって想定するのではなく、ある物／出来事について気が付いたその場で、思ってもみなかった「意外・驚き」を表出する発話である。本章では、このような、話者が「意外・驚き」など心の中の心理状態を言語によって表すことを表出機能という。したがって、このような間投詞的な独白形式を使って発言した独り言に使われる「か」は言語の表出機能を表している。

次に、(17)と同じ使用環境では、なぜ(18)を発話できないのかを分析する。

(17)と比べて、(18)は丁寧語を使っている。通常、丁寧語は人と会話する時、あるいは、手紙を書く時、聞き手に敬意を表すために使う。独り言は聞き手がいるかどうかを意識せず、自分自身の驚きなどを抑えきれずに発言するから、丁寧語を使えないことは当然であると考えられる。

語用論における発話行為の分析に、サールは「発語内行為」の一つである「表出型」の条件について、「発話の目的は命題内容について感情や態度を表現すること。適合の方向性は当てはまらないこと。誠実性条件は聞き手あるいは話し手に関わる心理状態であること。」と指摘した(高原 2002: 59)。(17)は独り言として、話者の「忘れた本はここにあった」という事態に対する驚きを表しているが、それは心理状態の表現であり、聞き手はいない。従って、間投的な独白形式を使って発言した独り言は言語の「表出型」に属する。つまり、独り言の(17)の文末における「か」は、言語行為の「表出型」に属している。

まとめていうと、独り言に使われる「か」は言語行為の「表出型」に属しており、言語の情報提供の依頼機能を果たしておらず、言語の表出機能を表している。この場合、丁寧語を使うことはできない。

3.3.2.2 独り言に使えない中国語“吗”

3.3.2.1 節で述べた(17)の使用環境において、中国語では、下の(19)のように言う。言い換えれば、本を教室に忘れたかと思って、教室に戻って見つけた時の「意外・驚き」の発言としては、“吗”は使わず、感嘆の文末終助詞“啊”を使用する。

(19) 在　　这儿　　啊。
Zai　zheer　a
ある　ここ　か
日本語訳：ここにあったのか。

(20) 在　　这儿　　吗?
Zai　zheer　ma
ある　ここ　か
日本語訳：ここにありますか？。

また、上の日本語(17)をそのまま文法的に対応する中国語文に訳すと、(20)になる。しかし、(20)は中国語母語話者の語感からすれば、「ここにありますか」という会話文の意味である。それは必ず聞き手がいる場合にしか使えず、話者自分自身の独り言ではなく、相手を意識しながら発するコミュニケーションである。そうでないと、発言する人は病的な人だと見られやすい。つまり、日本語(17)に文法的に対応している中国語(20)の使用環境は(17)とはかなり異なる。言い換えれば、日本語(17)の使用環境で、ある中国語母語話者が教科書を教室に忘れたかと思って、教室に戻って見つけた時、独り言として(19)を呟くことは可能である。(19)は聞き手を意識しながら、聞くのではなく、「教室に落とした」という事実に対して、「ここにあったのか」という軽い驚きを表す。まとめて言うと、中国語の独り言には、疑問終助詞の“吗”は使いにくく、感嘆の終助詞“啊”を使う。ここで、“啊”は言語の表出機能を表している。しかし、“啊”は本章の考察対象ではないので、ここでは検討しない。

まとめると、中国語“吗”は、独り言に使えず、聞き手目当ての質問にしか使えないので、言語行為の「表出型」に属すことができず、言語の表出機能を果たすことができない。

3.3.3 感嘆文における日本語「か」と感嘆文に使えない中国語“吗”

3.3.2 節では、独り言における「か」と“吗”を考察したが、本節では、感嘆文における「か」と“吗”を検討しよう。

まず、本節で捉える感嘆文の概念を明示する。3.3.2 節での独り言が聞き手を意識していない発言であるのと異なり、本節が捉える感嘆文は話者が自分自身の強い気持ちを表出する文として、わざと聞き手に向かって言うタイプもあれば、感嘆される物事に向かって言うタイプもある。聞き手が存在せず、物事に向かって言う時の感嘆文は独り言と言って良い。つまり、聞き手がいない感嘆文は独り言と重なっている。感嘆文では、普通、感嘆の程度は WH 疑問詞を使う。例えば、(21)は話者は聞き手に向かって強い感謝の気持ちを表す。(22)は話者はとても美しい絵を見て、その美しさに感服して発話した詠嘆である。感嘆文における「なんて」は「なんと（いう）」から来ているので、WH 疑問詞と言える (Ono 2006: 69)。(21)は聞き手がいるが、話者の発話の意志性もある。(22)は聞き手がいないが、話者の発話の意志性もない。

(21) どれだけあなたに感謝していることか！

(22) なんて美しい絵なのか！

3.3.3.1 感嘆文における日本語「か」

コンテクスト：李さんは論文を書いていた時、友達の田中さんから数多くの助言をもらっていた。その助言に感動した李さんは田中さんに向かって、(23)を言った。

(23) どれだけあなたに感謝していることか！　　(= (21))

(23)は話者が直接聞き手の田中さんに向かって、どのように感謝しても感謝の気持ちを表せないほどの心理状態を表している。ここで、文末の「か」は強い感嘆の表出を表して、言語の表出機能を果たしていると言えるだろう。しかも、この場合の「か」は話者が聞き手を意識して言っているので、言語の対人コミュニケーションの役割を果たしていることが分かる。

コンテクスト：ある日、話者 A は美術館に行って、とても美しい絵を見て、その美しさに感服して(24)を発話した。

(24) なんて美しい絵なのか！　　(= (22))

話者 A は(24)を発話する時、周りに聞き手がいるかどうかにかかわらず、発話する意志性もなく、ただその絵の美しさに感動する気持ちを抑えきれずに発話したと考えられる。したがって、ここでの「か」も言語の表出機能を果たしている。また、感嘆文の発話環境が 3.3.2 節で検討した独り言と同じで、両方とも意外な気持ちを抑えきれず、発話したので、感嘆文文末にある「か」は独り言の「か」と同じように、言語の「表出型」に属すことが分かる。

3.3.3.2 感嘆文に使えない中国語“吗”

上の(23) (24)と同じような会話環境で、中国語で発話すると、下の(25) (26)になる。

(25) 我	该	怎么	感谢	你	啊／ *吗！
Wo	gai	zenme	ganxie	ni	a ／ *ma
私	べき	どのように	感謝する	あなた	か[28]／*か[29]

日本語訳：どれだけあなたに感謝するべきか！

(26) 多	漂亮	的	画儿	啊／*吗！
Duo	piaoliang	de	huaer	a／ *ma
どれだけ	綺麗	な	絵	か[30]／*か[31]

日本語訳：なんて美しい絵なのか！

感嘆文である(25) (26)の文末には“啊”を使うことができるが，“啊”の代わりに“吗”を使うと非文になる。つまり、中国語感嘆文の文末には“吗”を使えず、“啊”を使用する。言い換えれば，中国語“吗”は感嘆文に使えない。

---

[28] この「か」は感嘆を表す「か」を指す。

[29] この「か」は疑問を表す「か」を指す。

[30] この「か」は感嘆を表す「か」を指す。

[31] この「か」は疑問を表す「か」を指す。

3.3.3.1 節で述べたように、感嘆文は言語の表出機能を果たしているが、“吗”は感嘆文には使えないので、言語行為の「表出型」に属しておらず、言語の表出機能を果たすことができないと考えられる。また、聞き手が必ずいる言語の情報提供の依頼機能と異なり、言語の表出機能は聞き手がいるかどうかには重点を置かず、話者が自分の気持ちを表出することに重点があることが分かる。

以上でそれぞれ「疑問文」「感嘆文」「独り言」を考察した。主文の「疑問文」「感嘆文」「独り言」は直接話法として実現されると考えられる。直接話法というのは人の言葉をそのまま伝えるものである。直接話法に対して、間接話法は人の言葉を話し手の視点から捉え直して伝えるものである。間接話法に属するものは、3.3.1 節で述べた「埋め込み文」の他、「三人称小説の地の文」がある。したがって、次に、間接話法の一つである「三人称小説の地の文」での使用状況を考察しよう。

3.3.4 三人称小説の地の文における「か」と三人称小説の地の文に使えない“吗”

本章の 3.3.1 節、3.3.2 節と 3.3.3 節で日本語「か」と中国語“吗”を考察した日常会話文では、聞き手と話し手は両方の存在が必要であり、あるいは、少なくとも話し手の存在が必要である（独り言の場合）。それとは異なり、三人称小説の地の文は、通常、作者が小説の背景などを紹介する文であり、話し手と聞き手の存在が希薄になる。本節では、三人称小説の地の文における「か」と“吗”はどのような使用状況があるかを分析する。

3.3.4.1 三人称小説の地の文における日本語「か」

日本語小説コーパスの『青空文庫』で「か」を検索すると、三人称小説の地の文に現れる例が非常に多い。それらを分析すると、小説の登場人物の心理描写として、動詞に埋め込まれた場合が圧倒的に多い。

(27) 仕事をしながら、龍介は、今日はどうするかと、思った。もう少しで八時だった。仕事が長びいて半端な時間になると、龍介はいつでもこの事で迷った。

（龙介一边工作，一边想，今天该怎么办呢，很快就到八点了，要是工作拖拉到了半生不熟的时间就麻烦了。龙介总是因此事而烦恼。）

（小林多喜二『雪の夜』）

(28) が、恵子は来なかった！どうすればいいのか？龍介は分からなくなった。

（但，惠子并没来！龙介不知道该怎么办了。）

（小林多喜二『雪の夜』）

(27)は下線を付けた部分に「か」がある。それは小説の登場人物「龍介」の心理状態を描いており、「思った」という心理動詞に埋め込まれている。つまり、「今日はどうするか」は直接疑問ではなく、間接疑問である。したがって、その埋め込み文にある「か」は間接疑問を叙述する役割を果たしていることが分かる。

同様に、(28)に現れる下線部の「か」も間接疑問である。それは直接疑問のように見えるが、実はそうではない。なぜなら、その後ろに「龍介は分からなくなった」という心理表現があるからである。つまり、(28)は埋め込み文と主文の順番が普通の順番と異なっている。普通の順番に書き替えすると、「龍介は恵子は来なかった（と驚いて）、どうすればいいのか分からなくなった。」になり、理解しやすくなる。

(29) 給仕は「今」恐ろしい喧嘩！と思った。それが、それだけで済む筈がない。だが（！）船長は咽喉へ綿でもつめられたように、立ちすくんでいるではないか。給仕はこんな場合の船長をかつて一度だって見たことがなかった。

（侍役以为“立即”会大吵起来，事情不会这样了结的。但是（！）船长却好像被一团棉花塞住了喉咙，呆立不动。侍役从来没有见过这么窝囊的船长。）

（小林多喜二『蟹工船』叶渭渠訳 第 22 頁）

(29)には「か」が一つある。それは「……ではないか」という形をして表出に見えるが、実は表出ではない。それは(27) (28)における「か」と類似して、登場

人物「給仕」の心理描写であり、後ろには「…と思った」「…と驚いた」というような主文が省略されていると考えられる。

(30) その人の多様な過去の生活を表すかのような継ぎはぎの襤褸は枯木のような臂を包みかねている。
（补满了补丁的衣服，犹如枯树枝一样包裹着肩膀，那补丁，仿佛在诉说着他复杂的过往生活。）（寺田寅彦『凩』）

(30)は「その人」の服の様子を描いている文であり、下線部の「か」は間接疑問というより、登場人物のある状態に対する評価・想像を加えた現実世界を叙述すると考えられる。この「か」は中国語の“好像”“仿佛”と対応している。

また、言語行為の立場から言うと、日本語三人称小説の地の文にある「か」は3.3.1.1 節で検討した埋め込み文文末にある「か」と同じように、言語行為の「断定型」に属すことが分かる。

以上をまとめていうと、日本語三人称小説の地の文には「か」が出現することがある。ただし、この「か」は主文に埋め込まれて、登場人物の心理描写を行うものであり、疑問、評価・想像などを間接的に叙述し、言語行為の「断定型」に属しており、言語の叙述機能を果たしている。

3.3.4.2 三人称小説の地の文に使えない中国語“吗”

中国語コーパスの CCL と BCC で“吗”を検索すると、三人称小説の地の文に出た例は一つもない。中国語“吗”は聞き手目当ての Yes／No 疑問文文末にしか使わないので、三人称小説の地の文は、通常、作者が小説の背景などを紹介する文として、“吗”が使用されないことは不思議ではないと考えられる。また、三人称小説の地の文に使えない“吗”は言語行為の「断定型」に属することができないと考えられる。

そして、“吗”の代わりに、三人称小説の地の文に使う“是否（かどうか）”はどのように日本語に翻訳されているかを調べると、次のようになる。

(31) 脚踝上套著赤金扭麻花镯子，光著脚，底下看不仔细是否趿著拖鞋，上面微

微露出一截印度式桃红皱裥窄脚裤。 （张爱玲《倾城之恋》[32]）

(32) 足首には縄模様の純金の足首飾りをしている。素足なのかサンダル履きなのかはよく見えない。足の上に裾をしぼったインド風のズボンがわずかにのぞいている。

（張愛玲『傾城の恋』 池上貞子訳 第 187 頁）

(31)は三人称小説の地の文であり、(32)は(31)と対応している日本語訳文である。それらを見てわかるように、“是否”は「……か……か」に翻訳されている。この「……か……か」は“是否”と同じように間接 Yes／No 疑問を表す。

3.3.5 3.3 節のまとめ

以上、「か」と“吗”の使用環境を対照しながら、疑問文、陳述文、独り言、感嘆文及び三人称小説地の文と五つの観点から考察を行った。結論としては以下のようになる。

日本語終助詞「か」は主文の WH 疑問文・Yes／No 疑問文文末、埋め込み文の WH 疑問文・Yes／No 疑問文文末、独り言、感嘆文及び三人称小説の地の文に使える。それは、場合によって、言語の情報提供の依頼機能、叙述機能、表出機能を果たすことができる。日本語終助詞「か」と比較して、中国語“吗”は非常に単純であり、Yes／No 疑問文の単文か複文の文末のみに使い、聞き手目当ての疑問だけに使用されて、言語の情報提供の依頼機能を果たす。

以上のような終助詞の日本語「か」と中国語“吗”の共通点・相違点を表の形にまとめると、以下のようになる。

[32] 中国語の作品と日本語の作品を区別するため、中国語の作品のタイトルを表記する時、《》を使い、日本語の作品のタイトルを表記する時、『 』を使う。以下は同じである。

表 3-1 日本語「か」と中国語“吗”の使用文型

	Yes／No 疑問文（情報提供の依頼機能有り）	WH 疑問文（情報提供の依頼機能有り）	埋め込み文（叙述機能有り）	独り言（表出機能有り）	感嘆文（表出機能有り）	三人称小説地の文（叙述機能有り）
日本語「か」	○	○	○	○	○	○
中国語“吗”	○	×	×	×	×	×

（○はある特徴の文に使える印で、×はある特徴の文に使えない印である。）

表 3-2 日本語「か」と中国語“吗”における発語内行為

	行為指示型	表出型	断定型
日本語「か」	○	○	○
中国語“吗”	○	×	×

（○はある種類の文に使える印で、×はある種類の文に使えない印である。）

表 3-3 日本語「か」と中国語“吗”が表す言語の機能

	情報提供の依頼機能	叙述機能	表出機能
日本語「か」	○	○	○
中国語“吗”	○	×	×

（○はある機能の文に使え、×はある機能の文に使えないことを表す。）

上の表 3-1 と表 3-2 と表 3-3 を見て分かるように、日本語「か」は幅広く使われているが、中国語“吗”の使用状況はかなり制限されている。これはなぜだろうか？本章は 3.4 節でそれぞれ歴史上の使用特徴から原因を究明する。

3.4 日本語「か」と中国語“吗”がなぜこれほど異なるのか？

3.4.1 日本語「か」

日本語古文には、係り結びがある。それはある文節が係助詞によって強調され、あるいは意味を添えられた場合に、述部の最後に呼応する特定の活用形（結び）を使うという文法規則を指す(Watanabe 2002)。

詳しく言えば、日本語古文において、WH 疑問文であれ、Yes／No 疑問文であれ、焦点の小辞「ぞ・なむ・や・か」に続く動詞は、連体形に変化する。焦点の小辞「こそ」に続く動詞は、已然形に変化する。前者は疑問、反語などの意味があり、後者は強調の意味である。本章では「か」だけに注目する。

(33) にひばり　つくばを過ぎて　幾夜<u>か</u>寝つる　（『古事記』）
（新治や筑波の地を過ぎて幾夜寝たのだろうか）

(34) 敵見たる虎<u>か</u>ほゆると　（『万葉集』）
（敵を見た虎が吠えるかのように）

例文(33)において、「幾夜」という疑問詞があり、それに「か」をつけて、疑問を表す。また、文末に「寝つる」という連体形がつく。例文(34)は Yes／No 疑問文であり、「虎」に「か」がついて、「虎」に対する疑問になる。述語に動詞「ほゆ」の連体形「ほゆる」を使う。以上からわかるように、上代日本語において、「か」は疑問対象の後に用いて、疑問を表示する。

(35) 何事を<u>か</u>、のたまはむことはうけたまはらざらむ
（何をおっしゃっても、お聞きしますよ。）
（『竹取物語』）

(36) これより人少ななる所はいかで<u>か</u>あらむ
（ここより人が少ない所はあるか！）
（『源氏物語　帚木』）

また、古文日本語の係り結びの小辞「か」によって、疑問のほか、逆接と感嘆で

も表せる (Watanabe 2002)。上の(35)の「か」は逆説の「ても」を表し、(36)の「か」は感嘆を表している。

12 世紀、係り結びの消失が始まる。消失の現象として、強調された疑問対象の語の後につく「か」がなくなり、文末動詞の連用形と已然形の区別がなくなる。ただし、小辞の「か」は消失したわけではなく、強調された語の後から文末に移動した。それは強調のスコープから文末に追いやられたのである。船城 (1968)が考察した、係り結びの消失が始まっていない奈良時代の『万葉集』のデータを引用すると表 3-4 になる。

表 3-4 『万葉集』の「か」が付いた疑問文 (船城 1968)

	WH／NP -か…∅	WH／NP -∅…か
『万葉集』	117	2

表 3-4 をみて分かるように、「WH-∅…か」より「WH-か…∅」のほうが圧倒的多い。この段階は係り結びの消失はまだ始まっていないと船城 (1968) は指摘している。次に磯部 (1990)が考察した平安時代の『源氏物語』のデータを引用すると表 3-5 になる。

表 3-5 『源氏物語』の「か」が付いた疑問文 (磯部 1990)

	WH／NP -か…∅	WH／NP -か…ぞ	WH／NP -∅…（V）にか
『源氏物語』	176	3	167

磯部 (1990)によれば、『源氏物語』において、「か」による疑問文は全 346 例のうち、約半数の 167 例が、文末にある断定の助動詞「ナリ」の連用形「に」に下接して「にか」の形式をとっている。表 3-4 と表 3-5 の相違点を見ると、WH 疑問文であれ、Yes／No 疑問文であれ、係り結びが消失するに従って、「か」は文末に移動している。

以上をまとめると、日本語古文において、WH 疑問文、Yes／No 疑問文、反問と感嘆文は同じシステム（係り結び）を使っている。現代文では、係り結びは消失したが、「か」は係り結びの消失痕跡として、文末に残っている。従って、日本語現代文において、WH 疑問文の文末、Yes／No 疑問文の文末、独り言の文末と感嘆

文の文末及び三人称小説の地の文に、「か」が付くのは不思議ではないと考えられる。

3.4.2 中国語“吗”

中国語古文には係り結びがなく、Yes／No 疑問文と WH 疑問文は疑問を表すシステムが異なる。前者は文末語気詞で疑問を表し、後者は文末語気詞の力に頼るのではなく、WH 疑問詞の移動によって、疑問を表す。

(37) 吾　　谁　　与　　亲？
Wu　shui　yu　qin
私　　誰　　に　　親しむ
日本語訳：私は誰に親しむの？　（《荘子》[33]）

例文(37)は WH 疑問文で、目的語「誰」は前置詞「与」の後につくはずであるが、前置詞の前に移動して疑問を表す。そして、WH 疑問詞の移動が消失して現代文の WH 疑問文になったので、現代中国語 WH 疑問文文末には疑問の終助詞は現れない。

(38) 吾　谁　欺?　欺　天　乎?
Wu　shui　qi　qi　tian　hu
私　誰　騙す　騙す　天　か
日本語訳：私は誰を騙すか？ 天を騙すことができようか？（できない）
（《論語注疏》）

例文(38)の前半は WH 疑問文で、後半は Yes／No 疑問文である。前半の疑問詞「誰」は動詞「欺」の目的語で、その後につくべきなのに、動詞の前に移動している。Yes／No 疑問文である後半は語順が変わらず、文末終助詞「乎」がある。

王力 (1980)、吴福祥 (1997) などによれば、現代中国語疑問終助詞“吗”は「VP-

[33] 《荘子》は《荘子注疏》、《南華真経》、《南華真経注疏解経注疏解経》、《南華真経注疏解経 33 巻》という別名がある。

“無”」における“無”から来たものである。例えば、

(39) 莫　便　是　传底人　無?
Mo　bian　shi　chuanderen　wu
ではないか　では　である　伝える人　か
日本語訳：これは伝える人ではないか？　（《祖堂集》）

(40) 莫　只　这个　便　是　也　無?
Mo　zhi　zhege　bian　shi　ye　wu
ではないか　だけ　これ　では　である　感嘆詞　か
日本語訳：これではないか？　（《祖堂集》）

上の例文(39)と(40)では文中に“莫”という否定表現が入ったので、文末の否定詞“無”は語気詞に変化して、文全体が Yes／No 疑問文になった。

また、“無”で CCL と BCC コーパスにおける古文を検索すると、文末終助詞として WH 疑問文に使う例文は一つもない。歴史上、「VP-“無”」が一番活発に使われた時代は五代十国時代であり（呉 1997）、その時代の代表的な作品の一つに、《祖堂集》がある。南唐・静・筠二禅徳が編集し、新文豊出版公司が発行した、中華民国七十六年六月台一版の《祖堂集》で、「VP-“無”」を探って分析すると、表 3-6 になる。

表 3-6 《祖堂集》における「VP-“無”」

VP-“無”（168 例）			
Yes／No 疑問会話文	“無”が終助詞ではない文	思考表現	WH 疑問文
139	29	0	0

「VP-“無”」は 168 例のうち、WH 疑問文と思考表現（考える内容を表す表現）は一例もなく、会話文は 139 例であり、圧倒的に多い。例えば

(41) 侍郎　又　问　曰：

Shilang　you　wen　yue

侍郎　また　聞く　言う

“未审佛　还　有　光　也　無？”

weishenfo　hai　you　guang　ye　wu

未審の佛　また　ある　光る　文末終助詞　か

师　曰：　“有。”

shi　yue　you

住職さん　言う　ある

日本語訳：侍郎さんはまた、「未審の佛はまた光るものがありますか」と聞いて、住職さんは「あります」と答えた。

（《祖堂集》）

(42) 师　因　病次，　问：

Shi　yin　bingci　wen

住職さん　なので　病気になった　聞く

“和尚　病，

heshang　bing

住職さん　病気になった

还　有　不　病　者　無？”

hai　you　bu　bing　zhe　wu

また　いる　ない　病気になる　もの　か

云：　“有。”

yun　you

答える　いる

日本語訳：住職さんは病気になった。お坊さんは「住職さんでも病気になりました。病気にならない人はいますか」と聞いて、住職さんは「いますよ」と答えた。　（《祖堂集》）

例文(41) (42)において、“無”は文末にあり、回答文として肯定の“有”で答えたので、それらはYes／No疑問会話文であることが分かる。したがって、文末に“無”がある文は聞き手に向かって直接疑問を表し、聞き手目当ての疑問であり、言語の情報提供の依頼機能を果たす。また、“無”はYes／No疑問文に使うので、“無”から来た“吗”もYes／No疑問文に使うはずである。つまり、もともとは“吗”の前の形はYes／No疑問文の会話文だけに使ったので、現在の“吗”はYes／No疑問文の文末だけにつくのは当然ではないかと考えられる。

3.5 第3章のまとめ

本章はまず、日本語「か」と中国語“吗”を対照しながら考察した上で、それぞれの使用特徴をまとめた。中国語“吗”はYes／No疑問文の文末だけに使い、聞き手目当ての疑問を表し、言語の情報提供の依頼機能を果たす。日本語「か」は主文のWH疑問文・Yes／No疑問文文末、埋め込み文のWH疑問文・Yes／No疑問文文末、独り言と感嘆文及び三人称小説地の文に使える。それは、場合によって、言語の情報提供の依頼機能、叙述機能、表出機能を果たすことができる。

次に、「か」と“吗”の相違点が存在する原因を説明した。日本語古文には係り結びがある。小辞の「か」による係り結びはWH疑問文、Yes／No疑問文及び感嘆文などを表すことができる。したがって、係り結びの小辞「か」から来た現代文の「か」はWH疑問文、Yes／No疑問文及び感嘆文などにも使える。それと異なり、中国語古文には、係り結びが存在しておらず、WH疑問文とYes／No疑問文の疑問システムが異なる。前者はWH疑問の移動によって疑問を表し、後者は文末終助詞によって表す。また、“吗”の前の形“無”がYes／No疑問会話文だけに使うので、“吗”がYes／No疑問会話文だけに使うのは当然であると指摘した。

以上のような考察から、「か」と“吗”の用法が対応しているところが少ないことが分かるが、日本語「か」のある文を中国語に翻訳する時、どのような中国語にすれば良いかは今後の課題として残したい。

第 4 章 統語論・意味論における「か」と“吗”の対照研究

4.1 問題提起

英語などの言語は句の移動によって、文タイプを表す。日本語と中国語は文末終助詞を使って、文型を表す。日本語・中国語の文末終助詞には、「か」と“吗”がある。「か」は名詞句(1a)、疑問文文末に使えるが(2a)、感嘆文の文末にも使用できる(3a)。しかし、“吗”は主文の Yes／No 疑問文文末だけに使える(2b)[34]。

(1) a. 先生<u>か</u>学生<u>か</u>を一人選んで、日本に行かせる。

b. 选　一个　学生　<u>或者/*吗</u>　老师，

Xuan　yige　xuesheng　huozhe /*ma　laoshi

選ぶ　一位　学生　あるいは/*か　先生

使　之　去　日本。

shi　zhi　qu　riben

させる　彼（女）　行く　日本

日本語訳：先生か学生かを一人選んで、日本に行かせる。

(2) a. 李さんが来ました<u>か</u>？

b. 小李　来　了　<u>吗</u>?

Xiaoli　lai　le　ma

李さん　来る　た　か

日本語訳：李さんが来ましたか？

(3) a. <u>どれほど</u>あなたの援助に感謝していること<u>か</u>！

b. 该　怎么　感谢　你　<u>啊</u>/*<u>吗</u>!

Gai　zenme　ganxie　ni　a /*ma

---

[34] 詳細は第 3 章を見る。

べき　どのように　感謝する　あなた　か[35] /*か[36]

日本語訳：どれぐらいあなたに感謝するべきか。

(1a)では、「か」は名詞句に使われている。(1b)は(1a)に対応する中国語文で、名詞句“学生__老师（先生か学生か）”の“__”に使えるのは「か」と対応する“吗”ではなく、「または」という意味を持っている“或者”である。また、「か」は疑問文(2a)と感嘆文(3a)に使えるのに対して、“吗”は感嘆文(3b)に使えず、主文の Yes／No 疑問文文末だけに使える(2b)。「か」と“吗”におけるこのような相違点については、第 3 章で発話行為機能の面から考察したが、統語論と意味論の面から考察すると、どうなるかについて本章で検討する。また、“吗”は現代中国語文主文の文末だけに使えるので、便宜上、それと対応して、本章では埋め込み文にある「か」について少し触れて、現代日本語質問文・感嘆文の文末にある「か」を主に考察する。

4.2 先行研究

4.2.1 統語論における「か」と“吗”の先行研究

4.2.1.1 統語論における「か」の先行研究

現代文の「か」に関しては、統語論では、主に補文標識「か」の移動と「か」が WH 疑問詞を束縛することについて研究されてきた。Hagstrom (2004)、外池 (2014a, 2014b) などは、「か」を含む文では文中で焦点化された名詞か WH 疑問詞から文末への非顕在的な移動がなされると指摘した(4)。t_i は「か」の移動の前の痕跡である。

(4) John が何を t_i 買いましたか $_i$？　(Hagstrom 2004: 235)

そして、Nishigauchi (1990)、Tsai (1999a)、Watanabe (1992b)などは、疑問の小辞

[35] この「か」は感嘆の「か」を指す。

[36] この「か」は疑問の「か」を指す。

「か」は高い位置にあり、下の位置にあるスコープ内の WH 句を束縛する。例えば、下の例文(5)の文末にある「か」は文の中の WH 疑問詞である「どこ」を束縛する（図 4-1）。

(5) どこに行きますか？

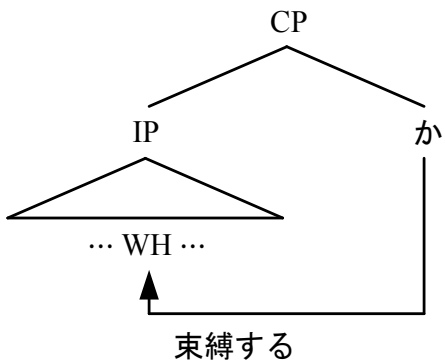


図 4-1 「か」による WH 疑問詞の束縛

また、Saito (2012)は全体的に日本語の補文標識システムを分析し、「か」は疑問の補文標識であり、対格の位置(6)に現れることができると指摘した。そして、Saito (2012)と合わせて、Saito & Haraguchi (2012)は Rizzi (1997, 2001)[37]に基づいて、疑問の「か」は Force であり、「か」の上に、ReportP (Report Phrase)[38]である「と」があると主張した。そして、日本語補文標識システムは以下のようになるとまとめた(7)。

(6) 彼は［花子がどこに行くべきか］（を）検討した。 (Saito 2012: 161)

---

[37] Rizzi (1997)は、イタリア語の文の CP レベルの統語構造は以下のようにまとめた。

[Force [(Topic*) [(Focus) [(Topic*) [Finite [IP]]]]]] また、その上で、Rizzi (2001)はイタリア語で Yes／No 疑問を表す se (“if”)と補文標識 che (“that”）の位置関係を考慮し、その統語構造を以下のように書き替えた。

[Force [(Topic*) [Interrogative [(Topic*) [(Focus) [(Topic*) [Finite [IP]]]]]]]]

[38] ReportP とは報告を表す語が投射するフレーズを指す。

(7) Saito (2012)、Saito & Haraguchi (2012)：

[...[...[...[...[TP ...] Finite]　　(Topic*)]　　Force]　　Report]

（の）　　（か）　　（と）

Hashimoto (2015)は、Rizzi (1997, 2001)を参照し、Saito (2012)、Saito & Haraguchi (2012)などを踏まえて、ForceP は文のタイプを表すもので、疑問の「か」は Force に対応することと、SAP[39]は発語内効力(illocutionary force)を持つもので、「わ、よ、ね、さ」は SA であることを指摘した上で、SAP の上に ReportP を設定し、日本語補文標識システムの統語構造は以下のようになると提案した。

(8) Hashimoto (2015: 19)：

[[[[[[TP] Fin] …] Force]　　(SA)]　　(Report)]

（か）　　（わ、よ、ね、さ …）　　（と）

以上は疑問の「か」についての先行研究であるが、以下では感嘆の「か」についての先行研究をまとめる。

感嘆文における「か」は疑問の「か」と比べてあまり研究されていない。文献としては主に Ono (2002)、Ono (2006)などがある。Ono (2002)は、感嘆文における「か」を直接扱っておらず、全体的に日本語感嘆文の特徴を考察した。Ono (2002)は、日本語感嘆文では、機能的中心部は顕在しておらず、顕在的な統語移動によって表される英語と異なり、顕在的な統語的な移動現象がなく機能的な中心部（文末終助詞）によって表されていると指摘した。Ono (2006)は感嘆文の補文標識として主に「（の）だ」「（の）だろう」を考察しており、「か」は感嘆文の補文標識としてその機能メカニズムは疑問文の補文標識「か」と類似し、統御領域での WH 疑問詞を束縛すると指摘した。

以上の先行研究を見て分かるように、統語論における「か」についての研究は主に疑問の文末終助詞の「か」に絞って考察されていた。統語論の立場から感嘆文文末における「か」に触れた研究はほとんどない。統語構造において、文末に「か」

[39] SAP についての紹介は 1.2.2 節を見る。

のある感嘆文はどのような特徴があるか、疑問の文末終助詞の「か」と感嘆文文末における「か」はどのような相違点があるかはまだ研究されていない。本章はこの問題を以下の 4.3.1.1 で捉えて解決したい。

4.2.1.2 統語論における“吗”の先行研究

中国語では、統語論の立場から、文末終助詞について考察する論文が多数ある。多くの研究論文は中国語文末終助詞を話し手／聞き手の態度を表すもの(SFP_3)、文のタイプを表すもの(SFP_2)、テンスやアスペクトを表すもの(SFP_1)と 3 種類に分けている（朱 1982、Chao 1968、Paul 2014、Paul 2015、Erlewine 2016 など）（図 4-2）

Paul (2014, 2015)、Erlewine (2016)：

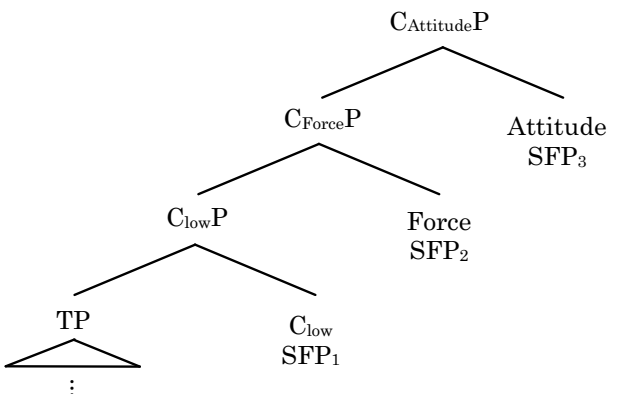


図 4-2 中国語文末終助詞による統語構造

また、“吗”について、統語論の方面から Li & Thompson (1981)、Cheng (1991)、Paul (2014)、Paul (2015)、Erlewine (2016) などが論じている。

Li & Thompson (1981)は“吗”が必ず主文の文末に使われると指摘した(9)。

(9) 你 不 知道 他 来 吗?
Ni bu zhidao ta lai ma
あなた 否定 知っている 彼 来る か
英語訳：Do you not know that he’s coming?
*You don’t know whether or not he’s coming.

Cheng (1991)は Clausal Typing Hypothesis 理論を使い、“吗”は埋め込み文に使えず、Yes／No 疑問文の標識であると指摘した。Paul (2014)、Paul (2015)、Erlewine (2016)などは“吗”が Yes／No 疑問文の標識マーカーとして Force に対応すると主張した。

(10) Paul (2014, 2015)、Erlewine (2016)：

[[[[[TP] …]　　C_{low}P]　　C_{Force}P　]　　$C_{Attitude}$P]

（“了”“来着”“呢” …）　（“吗”“呢” …）　（“啊” …）

以上をまとめていうと、中国語文末終助詞について研究した論文は多数あるが、“吗”に絞って考察した論文は極めて少ない。ただ“吗”が Yes／No 疑問文の標識マーカーで ForceP であると指摘するだけでは、不十分ではないかと考えられる。例えば、“吗”を Yes／No 疑問文文末に使う時、“吗”における素性照合はどのようになるか、または、会話環境に存在する聞き手と話し手の要素がどのように存在するかについては触れていない。本章はこの問題について以下の 4.3.1.2 節で捉えて考察する。

4.2.2 意味論における「か」と“吗”の先行研究

4.2.2.1 意味論における「か」の先行研究

意味論における「か」についての先行研究は多数ある。例えば、Lasnik & Saito (1984, 1992)、Nishigauchi (1990)、Tsai (1999a)、Watanabe (1992a, 1992b, 2002)などである。これらの研究は感嘆の「か」に触れず、単独で疑問の「か」だけを考察した。

Nishigauchi (1990) によれば、日本語 WH 疑問詞は量化詞の力を持たず、「か」など量化詞の小辞は WH 疑問詞に演算子としての意味(quantificational force)を与える。つまり、小辞は数量詞や疑問詞のスコープなどを取り扱う働きをする。Nishigauchi (1990)に対して、Tsai (1999a)は日本語 WH 句が変項であり、小辞の「か」は、統語的に変項である疑問詞に疑問の意味を付与すると指摘した。

近年、疑問文の「か」と名詞句における「か」を統一的な視点で捉える文献が多く出ている。多くの研究は「か」は基本的に選言関数であり、DP、TP、CPなど各層で表された集合から一つを取る働きをしていると指摘している (Nakanishi 2006、

外池 2014a、外池 2014b、Szabolcsi 2015など)。

外池 (2014a, 2014b)は、「か」はWH疑問詞が表す集合を引数としてとり、その成員の一つを値として返す選言関数であると指摘した。例えば、次の(11) (12)である。

(11) 先生か学生かを一人選んで、日本に行かせる。　　(= (1a))

「先生か学生か」は構造上、「(either) 先生 or 学生」と同じであり、｛先生、学生｝から一つを選ぶという意味である。つまり、

「先生か学生か」⇒「｛先生、学生｝から一つを選ぶ」⇒｛先生∨学生｝

すると、「先生か学生か」は論理学的に表示すれば、以下のようになる。

［∃x：x∈｛先生∨学生｝］

(12) 誰かを選んで、日本に行かせる。

「誰か」は英語のsomeoneであり、「か」はsomeに対応し、「ある類のものが存在し、その中の一つを取る」という意味を表し、選言関数である。「誰」がoneに対応し、指示対象を人に限定するという意味で制限子(restriction)として働き、選言「か」の引数になる。すなわち、

疑問詞[40]（「誰」）+選言関数「か」＝存在数量詞（「誰か」）

すると、「誰か」は論理的に表示すれば、以下のようになる。

［∃x：x∈HUMAN］

Nakanishi (2006)は疑問文文末にある「か」を考察した。Nakanishi (2006)によっ

[40] 疑問詞は外池 (2014a, 2014b)で「未定詞」と呼ばれている。

て、「か」は選言であり、スコープ内でのWH疑問詞は引数の集合を表す。

(13) 彼はどこで遊んだか？ (Nakanishi 2006: 270)

λp［∃x：x∈location, p=［he played at x］[41]

(13)において、「か」が文末にあり、その統御領域に疑問詞「どこ」があり、場所の集合を表す。文全体は聞き手に｛場所 1、場所 2、場所 3、場所 4……｝という集合から、「彼が遊んだ場所」を選択してもらうという意味を表す。つまり、「か」は選言関数であり、WH 疑問詞は選言関数の「か」によって統御される場合で、存在数量詞として解釈される。言い換えれば、日本語における存在数量詞は選言を持つと解釈でき、選言はある意味で、特殊な存在数量詞である。

Uegaki (2016)は選択疑問文を含めて疑問文及び名詞句における「か」に対する統一な分析を試みた。Uegaki (2016)によって、「か」は選言として直接WH疑問詞につく時、「WH疑問詞+か」は限定詞句であり、「か」は文末にある時、「IP+か」が疑問文になる。具体的に言えば、以下のようになる。

(14) 太郎が花子か（または）次郎かを見た。 (Uegaki 2016: 2)

英語訳：Taro saw Hanako or Jiro.

(14)において「か」は疑問の意味ではなく、「花子 or 次郎」を記述的に述べる。「か」は選言関数[42]である。

(15) 誰かが走った。 ∃−statement (Uegaki 2016: 1)

英語訳：Someone ran.

---

[41] これは筆者が書き替えたものである。もともとはλ{x}〖he played at x〗である。

[42] 選言関数というのは、論理学的に選言は命題を取る。(14)においては、「花子 or 次郎」を応用して、見る（太郎、花子）∨ 見る（太郎,次郎）、あるいはλp［p＝見る(太郎、花子) ∨ p＝見る(太郎、次郎)］という意味で記述的に使う。

(15)における「誰か」がDPであり、「誰」が「か」をつけて、someoneという意味になる。それは論理形式によって表現されて以下のようになる。

［∃x：x∈HUMAN,［x が走った］］

(16) 誰が走ったか（教えて） WH−statement (Uegaki 2016: 2)

英語訳：(Tell me) Who ran.

(16)では「か」はCPの中心部であり、文である「誰が走った」はその補部になり、全体は疑問の意味を表す。それは「ある人が存在し、その人は走ったが、その命題を満たすのは誰か」という意味である。論理的に表現すれば、以下のようである。

λp［∃x：x∈HUMAN，p=［xが走った］］

(17) 花子が走ったか次郎が走ったか教えて。 (Uegaki 2016: 3)

英語訳：Tell me which is true: Hanako ran or Jiro ran ?

(17)において、並列的に主要部「か」がついたCPが二つあり、それは「「花子が走ったか」OR「次郎が走ったか」」という選択疑問文である。この「か」も選言関数である。

以上、(14)から(17)にかけての分析を踏まえて、Uegaki (2016) は「か」は選言関数であり、WH疑問詞は「か」の位置によって解釈されると指摘した。まとめると、以下の表4-1のようになる。

表4-1 「か-phrase」の意味解釈 (Uegaki 2016: 3)

The ka-phrase is…	smaller than a CP	CP
WH＋か	existential quantifier	wh-question
A＋か＋B＋か	declarative disjunction	alternative question

以上は意味論における「か」についての先行研究である。まとめていうと、日本

語名詞句、疑問文に使われる「か」は選言関数であり、それによってフォ―カスされている WH 疑問詞は引数の集合を表し、存在数量詞として解釈される。すなわち、選言は存在数量詞によって表現されている。

以上は「か」についての意味論的な先行研究である。それらを見て分かるように、日本語助詞「か」に関する分析は、名詞句・疑問文文末における「か」を統一的に扱ったものが多いが、感嘆文文末にある「か」 についての意味論的な研究はほとんどない。言い換えれば、名詞句・疑問文文末における「か」は選言関数であり、WH 疑問文で「か」に統御された WH 疑問詞は存在数量詞であると報告されているが、より包括的に感嘆文文末における「か」を扱った研究はほとんどない。つまり、感嘆文文末における「か」が選言関数に関与しているかどうか、感嘆文における感嘆の解釈がどのように生じるか、感嘆の「か」と質問の「か」は意味論的にはどのように統一に分析できるか、などはまだ明らかにされていない。本論文は以下の 4.3.2.1 節でこれらの問題を解決したい。

4.2.2.2 意味論における“吗”の先行研究

中国語“吗”については意味論的な先行研究はほとんどない。“吗”は主文の Yes／No 疑問文文末だけに使え、簡単に見えるが、それは文の中のある名詞句に絞って聞くか、あるいは、文全体に絞って聞くかという問題がある。以下、4.3.2.2 節で、この問題を解決する。

4.3 考察

4.3.1 統語論における「か」と“吗”について

本節で統語論の立場から、主文の文末にある「か」と“吗”を捉えて分析する。次に、まず、4.3.1.1 節で (Non)ReportP、ForceP を検討してから、それぞれ疑問の「か」と「感嘆」の「か」を考察する。そして、4.3.1.2 節で、主文の Yes／No 疑問文文末だけに使える“吗”を考察する。

4.3.1.1 統語論における「か」

主文文末にある疑問の「か」と感嘆の「か」は、通常、会話文に使えるが、三人

称小説の地の文に使用できない[43]。話法は直接話法と間接話法に分けている。直接話法というのは人の言葉をそのまま伝えるものである。直接話法に対して、間接話法は人の発話を話し手の視点から捉え直して伝えるものである。話法の立場からいうと、会話文は直接話法であり、三人称小説の地の文は間接話法が使われる場合が多い。統語論において、話法と関わりがあるのは (Non)ReportP と SAP である。したがって、以下、疑問の「か」と「感嘆」の「か」を考察する前に、(Non)ReportP、SAP を紹介する必要がある。SAP は本論文の 1.2.2 節で紹介したが、以下、(Non)ReportP について検討する。

4.3.1.1.1 ReportP／NonreportP について

金水 (1989)によれば、日本語の言語表現は「報告」と「語り」に分けられる。「報告」というのは日常対話において、人の言葉をそのまま伝えるもので、人称制限[44]が現れても良い言語表現である。「報告」に対して、「語り」は人の言葉を語り口調で伝えるものである。「語り」に属するものは、埋め込み文の他、三人称小説の地の文がある。三人称小説の地の文は、小説の背景などを客観的に描写する文であり、人称制限が解除される言語表現である。したがって、金水 (1989)での「報告文」と「語り文」はそれぞれ「直接話法」、「間接話法」と同じものであると考えられる。

また、Kuroda (1973)、Tenny (2006)によれば、コンテクストの文法種類は 2 種類があり、一つは reportive styles である。これは金水 (1989)での「報告」文と同じで、通常、会話文、一人称小説文などを指す。もう一つは nonreportive styles であ

---

[43] 詳細は第 3 章を見る。

[44] 通常、人称制限というのは、日常会話において、主に感情・感覚形容詞述語文に見られる主語の人称が一人称に限られる現象である。これまでの研究は主に、私的領域の感情などを述べる権利は自分だけにあり、他の人物にはその権利がないから人称制限が起こったのであると説かれてきた。本稿では、Hashimoto (2015)に従い、文の前にある（顕在的・非顕在的な）話者と文末にあるモダリティの判断者が一致するかどうかということから人称制限の理由を捉える。また、本稿で捉える人称制限は感情・感覚形容詞述語文に限られるだけではなく、普通の陳述文、感嘆文にも広がる。

る。これは金水 (1989)での「語り」文と同じで、普通、三人称小説の地の文などを指す。Kuroda (1973)などによれば、「語り」文と「報告」文の相違点は 2 点ある。1 点は「報告」文では、「ね、よ、わ」など会話文文末終助詞を使えるが、「語り」文では、それらは使えない。もう一点は「報告」文では、感情感覚形容詞（「寒い」「うれしい」など）による人称制限があり、「語り」文において、人称制限が解除されることである。また、Hashimoto (2015: 30)は「語り」文と「報告」文の相違点をまとめて、統語構造上では、「報告」文では、SAP が存在するが、「語り」文において、SAP が存在しないと指摘した。

以上では「報告」文と「語り」文を紹介したが、以下は「報告」文を別の文に埋め込む時、必要である引用の「と」を考察する。

(18) 李さんは「どこに行きますか」と言った。

(19) 李さんはどこに行くと言ったか？

(18)において、「と」は直接引用を表し、(19)では、「か」は文末にあるので、「と」は間接引用である。Saito & Haraguchi (2012)は「と」を ReportP であると指摘した上で、また、Rizzi (1997, 2001)に基づいて、日本語疑問の補文標識「か」は Force を投射し、「か」の上に、ReportP に対応する「と」があると主張し、日本語補文標識システム全体の統語構造は以下のようであるとまとめた。

(20) Saito & Haraguchi (2012)

[[[[TP] Fin] …] Force]　　Report]

（か）　　（と）

そして、Saito & Haraguchi (2012)は文末終助詞の「わ」「よ」「ね」「な」は SAP であり、それらの構造上下関係は「わ」＜「よ」＜「ね／な」であると指摘した。Hashimoto (2015)は Saito & Haraguchi (2012)と Rizzi (1997, 2001)に基づいて、ForceP は文のタイプを表すもので、「わ、よ、ね、な」は発語内効力 (illocutionary force)を持つ SAP であると指摘した上で、SAP の上にさらに、ReportP を設定し、日本語補文標識システムの統語的構造は以下のようになると提案した。

(21) Hashimoto (2015: 19) (= (8))

[[[[[TP] Fin] …] Force] (SA)] (Report)]

（か） （わ、よ、ね、さ …） （と）

ReportP について、Hashimoto (2015: 19)は下の例文(22) (23) (24) (25)に「と」が現れるかどうかを証拠として、それが主文の後に存在せず(22)、埋め込み文の後に存在する必要がない(24)と指摘した。

(22) 太郎の妹が来た（と*）（ø）[45]。 Hashimoto (2015: 20)

(23) 太郎は［$_{\text{ReportP}}$［彼の妹が来た］と］言った。 Hashimoto (2015: 20)

(24) 太郎は［彼の妹が来たか］いった[46]。 Hashimoto (2015: 20)

(25) 太郎は［$_{\text{ReportP}}$［彼の妹が来たか］（と）］聞いた。 Hashimoto (2015: 20)

確かに、主文は会話文として使えるので、それ自身は「報告」(ReportP)であり、特に ReportP を設定する必要がない。埋め込み文は「報告」ではなく、「語り」文であるので、「報告」の意味を含む ReportP が存在する必要がないと考えられる。ただし、問題になるのは、「報告」文の統語構造上に、ReportP を設定すると、その ReportP は何であるかということである。統語構造上で、ReportP を設定しても良いが、それは引用の「と」を指すことができず、ただ形としてはゼロ（ø）であるのではないか(22)。また、埋め込み文（「語り」文）に存在する引用の補文標識「と」は ReportP ではなく、NonreportP (Nonreport Phrase) ではないかと考えられる。なぜならば、補文標識「と」が ReportP であると、会話文（「報告」文）に現

---

45 「（ø）」は筆者が加えたものである。

46 例文（24）は、日本語母語話者にチェックしてもらったところ、「太郎は彼の妹が来たか聞いた」の方が良いが、ここでは、引用なので、そのまま掲載した。

れる「ね、よ、わ」は「と」とは共起できるはずからである。しかし、実際は共起できない(26)。

(26) *田中さんは李さんも東京に行くねと言った。（間接引用として不適格）

そして、「と」が NonreportP であると、ReportP はどのように会話に現れるかという問題がある。実は、それは会話文の統語構造だけに存在する SAP によって表される。なぜなら、ReportP が存在する場合、つまり、「報告」文の場合で、SAP が存在し、ReportP が存在してはならない場合、つまり、「語り」文の場合で、SAP が存在しないからである。したがって、ReportP は SAP によって反映される。

(27) 李さんが東京に行きますねø？

(27)において、文末の「ます」「ね」はそれぞれ聞き手目当ての「丁寧語」、「文末終助詞」であるので、その文が「報告」文であることが分かる。したがって、会話文（「報告」文）の上に、ReportP を設定する必要がなく、「報告」も表す SAP が存在しても良い。また、埋め込み文や三人称小説の地の文、つまり「語り」文の上に、「と」とする NonreportP を設定する必要が生じる。

以上のような検討を踏まえ、日本語補文標識システムの統語構造は「報告」文と「語り」文にわけて、以下のように提案する。

(28) 「報告」文の場合：

[[[[[TP] Fin] …] Force]　　SAP]

（か）　（わ、よ、ね、さ …）

(29) 「語り」文の場合：

[[[[[TP] Fin] …] Force]　　(NonreportP)]

（か）　（と）

「報告」文は会話文であるので、統語構造に SAP が存在するはずである。「報

告」文において、ForceP の「か」は主文の疑問文文末にある「か」を指し[47]、場合によって、その上に SAP の「よ」「ね」などがある。例えば、下の(30)(31)には「か」の後ろにそれぞれ「ね」「よ」がある。

(30) 花子は来るかね？　　Saito & Haraguchi (2012: 113)

(31) 誰がそこに行くかよ。　　Saito & Haraguchi (2012: 116)

「語り」文は、通常、埋め込み文及び三人称小説の地の文などを指し、統語構造に SAP が存在せず、引用の NonreportP の「と」が必要である。埋め込み文の場合、主文があるので、埋め込み文文末に引用を表す NonreportP の「と」が必要であることが分かる[48]。三人称小説の地の文ではその中に「と」が出ても良いが、地の文そのもの全体が、希薄化された作者が読者に伝えた、小説の背景などの紹介文であり、その一番最後に省略された「と」があるのではないかと考えられる。したがって、「語り」文の統語構造では、一番上に、NonreportP が存在するのである。また、「語り」文の場合、Force とする「か」は上に NonreportP が存在するので、主文の「か」を指すわけではなく、埋め込み文や三人称小説の地の文にある「か」を指す[49]。

4.3.1.1.2 ForceP について

Saito & Haraguchi (2012)及び Hashimoto (2015)は、Rizzi (1997, 2001)に従い、ForceP は断定、疑問など文のタイプを表すものであり、日本語の場合では、疑問の「か」であると指摘した。

また、Hashimoto (2015) は会話文の統語構造には SAP が存在し（図 4-3）、埋め込み文や三人称小説の地の文などの「語り」文には話し手と聞き手が存在しないので、SAP がない（図 4-4）と指摘した。

---

[47] これについて、もっと詳細的には 4.3.1.1.2 節を見る。

[48] 場合によって、「と」が省略されることがある。例えば、太郎は［彼の妹が来たか（と）］聞いた。(Hashimoto 2015: 20)

[49] これについて、もっと詳細的には 4.3.1.1.2 節を見る。

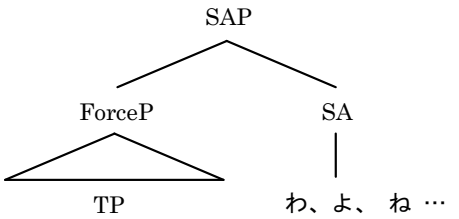


図 4-3「報告」文の統語構造

(Hashimoto 2015: 30)

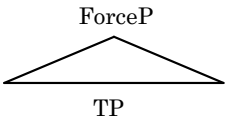


図 4-4「語り」文の統語構造

(Hashimoto 2015: 30)

確かに、会話文は「報告」文で、通常、会話場面で、話し手と聞き手が存在する必要があり、少なくとも、話し手だけは存在する必要がある（独り言）。話し手と聞き手が存在しないと、会話文は何の意味にももたらさないだろう。会話に存在する聞き手と話し手を統語構造に投射して、SAP になる。したがって、「報告」文の統語構造では、一番上に、SAP が存在すると考えられる（図 4-3）。また、「語り」文では、話し手と聞き手の存在が希薄になり、ただ文の内容をそのまま客観的に表し、語用論的な解釈がないので、話し手と聞き手を表す統語構造の SAP が存在しないのは当然である（図 4-4）。

ただし、以上の Hashimoto (2015: 30)によって、疑問の文のタイプを表す ForceP の「か」は会話文（「報告」文）にも存在すれば、埋め込み文、三人称小説の地の文など（「語り」文）にも存在する。もし、ForceP の「か」が主文の文末にある疑問の「か」を指すと、それは「語り」文には存在せず、「報告」文だけに存在するので、「語り」文にも存在すると主張するのは言い過ぎではないかと考えられる。そして、ForceP の「か」は埋め込み文にある疑問の「か」を指すと、それは「報告」文には存在せず、「語り」文だけに存在するので、「報告」文にも存在すると指摘すると不適切になる。また、ForceP の「か」が主文の「か」と埋め込み文の「か」を両方指すとなると、曖昧すぎるので、適切に説明する必要がある。なぜならば、後の検討を見て分かるように、埋め込み文にある「か」は主文の文末にある「か」と異なり、統語構造上では、SAP がなく、発話内効力を持つことができないからである。

そこで、ForceP の「か」について、以下のように明示する。

「報告」文の統語構造に存在する Force とする疑問の「か」は主文文末にある「か」を指し、「語り」文の統語構造に存在する Force とする疑問の「か」は埋め込み文の「か」を指す。本章は以下、それぞれ 4.3.1.1.3 節と 4.3.1.1.4 節で「報告」文文末にある「か」を、感嘆の「か」と疑問の「か」に分けて考察する。「語り」文にある、疑問を間接的に記述する「か」については 4.3.1.1.3 節の後に触れる。

4.3.1.1.3 疑問の「か」について

4.3.1.1.1 節と 4.3.1.1.2 節で検討したように、主文文末における疑問の「か」は SAP の下にある Force である（図 4-5）。

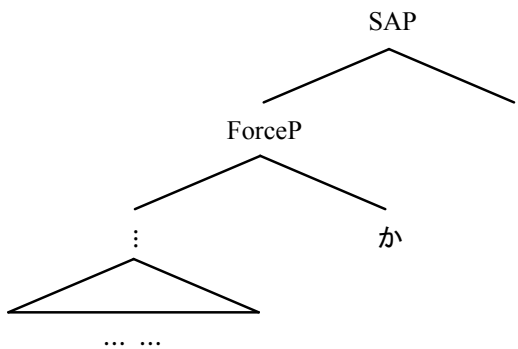


図 4-5 主文にある疑問の「か」による統語構造

通常、話者は質問文を発話する時、その質問に答える人は聞き手である[50]。言い換えれば、ある問いについて質問すると、その質問にどのように回答するかは聞き手によって決められる。例えば、下の例文(32) (33)はある人はそれぞれ B、C と二人に向かって、「李さんは優しいですか」と聞いた。しかし、聞き手の B さんは肯定で答えたが、C さんは「普通です」と答えた。そこで、同じ質問内容にしても、異なる人に聞くと、異なる回答になる可能性がある。すなわち、質問文は聞き手と関係すると考えられる。

(32) A: 李さんは優しいですか？

[50] 自答自問とする独り言の場合もそうである。この時、自分は話し手とする同時に、聞き手でもある。

B: はい、優しいです。

(33) A: 李さんは優しいですか？

C: まあ、普通です。

また、Speas & Tenny (2003)は、発話行為における、語用論的な役割をする「話し手」「発話内容」「聞き手」は、それぞれ統語構造に発話行為の動作主(agent)、主題(theme)、目標(goal)」に対応すると指摘した。宣言(declarative)の場合は動作主である話し手が発話内容（主題）を束縛している。つまり、「話し手」「発話内容」「聞き手」は以下のような構造である（図 4-6）。

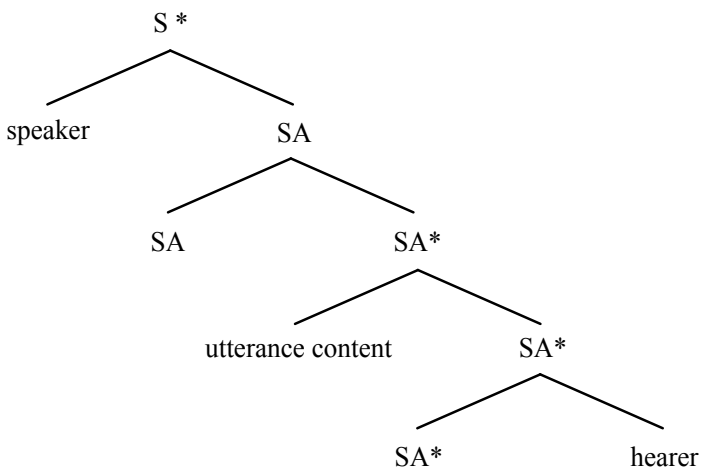


図 4-6 宣言による統語構造図 (Speas & Tenny 2003: 320)

質問の場合では、下位の聞き手が［Spec SA*］に繰り上がり、発話内容を束縛するようになる。つまり、質問された内容を確認し把握して回答するのが goal の聞き手である（図 4-7）。

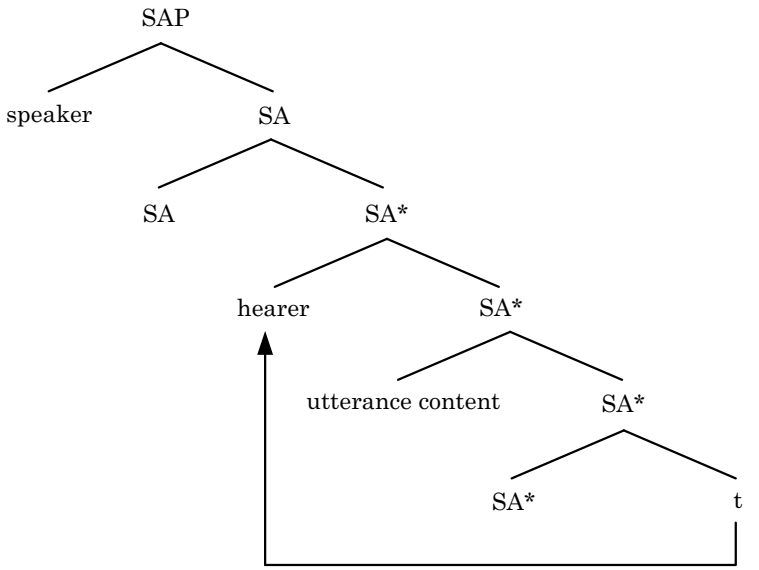


図 4-7 質問文による統語構造図 (Speas & Tenny 2003: 321)

(34) 暑い！

(35) 暑いですか？

また、Hashimoto (2015: 178) は、(34)のように、「暑い」と呟いて表出する人（話者）は必ず「暑い」経験をした人であるので、ある人が何かを表出すれば、その表出内容を経験する人は必ずそれを表出する話者であると指摘した。また、(35)のように、「暑いですか」と質問すると、その「暑い」経験をした人は必ず質問される聞き手であるので、ある人が何かを質問すると、その質問によって表された内容を経験した人は必ずそれを質問された聞き手であると指摘した上で、話者は何かを表出すれば、その［Spec SAP］にあるゼロ代名詞は話者と一致しなければならず、話者が何かについて質問すれば、その［Spec SAP］にあるゼロ代名詞は聞き手と一致しなければならないと主張した。つまり、［Spec SAP］にあるゼロ代名詞は、感嘆文（表出文）であれ、質問文であれ、文が表した命題内容の経験者と一致する。

以下、［Spec SAP］にあるゼロ代名詞は聞き手、あるいは、話し手と一致するという現象は、必ずしも感覚形容詞述語文に限られるわけではなく、普通の陳述文

／表出文、質問文にもあることについて検討する。

日常会話で、通常、話し手は常に「私」であり、聞き手は常に「あなた」である。「私」と「あなた」は会話場面で存在するが、それらは言葉として会話内容にはあまり出てこない。さらに、話者は直接他者の感覚・感情を表出することができず、話者自身だけの感覚・感情を表出することができる。例えば、「私」は「あなた」の代わりに、「あなた」の感覚・意見・経験などを表出することができない。「あなた」の感覚などについて、「報告」文の一種とする質問文を使って聞くか、あるいは、自分（話し手）の視点から捉え直し、間接話法とする「語り」文に書き替えて伝える。以下、例文をあげて説明する。

(36) a. 花子：寒いです。（話者は花子である）
b. 太郎：＃花子が寒いです。（話者は太郎である）

(37) a. 花子：なんて美しい絵なのか！（話者は花子である）
b. 太郎：＃なんて美しい絵なのか！
（話者の太郎は表出文を使って花子の気持ちを表す場合）

(38) a. 花子はなんて美しい絵なのかと思った。
b. 太郎：花子はなんて美しい絵なのかと思いましたか？
（話者は太郎である）

(36)を報告文とする場合、(36a)のように、話者が経験者の「花子」であれば、良い文であるが、(36b)のように、話者が経験者の「花子」ではないと、非文になる(Hashimoto 2015: 44)。同じように、感嘆文(37a)は話者が花子であるとする場合、それは話題になっている絵が非常にきれいであるという花子の気持ちを表している。花子が綺麗な絵を知覚して経験者である。通常、話者は自分の気持ちしか表出できないので、太郎は話者の花子の代わりに、花子の気持ちを表し、「なんて美しい絵なのか！」を発話すると、容認できない(37b)。この場合、報告文とする花子の言葉を自分の視点から捉え直し、間接話法に書き直すと良くなる(38a)。あるいは、それを質問文に変えて聞いても良い(38b)。以上の(36) (37)から見て分かるように、

感覚・感情形容詞述語文であれ、感嘆文であれ、話者は経験者と一致しなければならない。

(36)のように、感覚・感情形容詞述語文では、話者は自分の経験を表すのは話者に限られることを人称制限という。同じように、感嘆文では話者は自分自身の気持ちしか表出できないことも人称制限と言える。感覚・感情形容詞述語文の文末に、情報のソースを表す「らしい」、「んだ」、「そう」などを加えると、人称制限がなくなる(39a)。感嘆文では常に話者は自分自身の気持ちを表出するので、文末にソースを表す表現をつけることができない(39b)。また、どのような場合でも、第三者の気持ちを表出することができない(37b)。つまり、感嘆文に現れる人称制限は常にとれない[51]。

(39) a. 田中さんは暑そうです。（話者は田中さんではない）
b. *なんて美しい絵なのかそうだ。

以上、報告文とする感覚・感情形容詞述語文と感嘆文では、話者は経験者と一致しなければならないことを説明した。以下では通常の陳述文を説明する。

(40) a. ＃明日、（私は）アメリカに行きますか？
b. 明日、私はアメリカに行きます。

(40a)は意味不明な文である。なぜなら、話者は自分のことを知っているので、質問文を使うと奇妙になるからである。それに対して、(40b)は「私」は自分のことについて「アメリカに行く」と述べているので、良い文である。言い換えれば、日本語では話者は自分のことについて陳述する時、文末にソースを表す言葉を使う必要がない。

次に、第三者について述べる陳述文をみよう。

[51] 本稿の 5.4 節で、場合によって、解除できる人称制限を相対人称制限と呼び、どのような場合でも、解除できない人称制限を絶対人称制限と呼ぶ。

(41) 話者は李さんではない聞き手に以下の a、b のように聞くとする。

a. ??李さんは寒いですか？

b. 李さんは寒そうですか？

話者は李さんではない聞き手に(41a) (41b)のように聞くとする場合では、(41a)は容認度が低い。その理由は、聞き手が李さんではないので、第三人者の聞き手にとって李さんが寒いかどうか分からないからである。つまり、人称制限があるからである。それに対して、(41b)は良い文である。その理由は文末にソースを表す「そう」があるからである。

(42) 話者は李さんではない聞き手に以下の a、b、c のように聞くとする。

a. 明日、李さんはアメリカに行きますか？

b. 明日、李さんがアメリカに行くかどうか知っているの？

c. 明日、李さんはアメリカに行くそうですか？

(42)のように、第三者のことについて述べる時、感覚・感情形容詞述語文の文末に、ソースを表すものが存在しなければならない場合とは異なり、(42)においては、話者が李さんではない人に聞くとする場合、(42a、b、c)はいずれも良い文である。(42b)は Yes／No 疑問文で、直接聞き手の「明日、李さんはアメリカに行くかどうか知っている」状態、あるいは「明日、李さんはアメリカに行くかどうか知らない」状態について聞く。(42c)は文末に伝聞を表す「そう」がある。言い換えれば、(42b、c)は直接聞き手の状態を聞いたり、伝聞を表す表現があったりするので理解できる。しかし、第三者のことについて述べる時，文末にソースを表すものがあるはずなのに、文末にソースのない(42a)が適格な文であることは問題となる。なぜなら、この時、「アメリカに行く」ことを実行する人、つまり、その文の経験者は李さんである。話者は「私」である。話者と経験者が一致しないからである。したがって、(42a)で、第三者のことについて言う文の文末に省略された、ソースを表すゼロの文末終助詞（φ）があると仮定する(42a')。

(42a') 明日、李さんはアメリカに行きます（φ）か？

(43) A: 明日、李さんはアメリカに行きます。
B: なんで知っているの？

上で設定したφが存在する証拠として、(43)からも見てとれる。(43)を会話文とする。(43)で話者 A の発話は文末にソースをつけていない。話者 A の発話に対して、B はその発話のソースについて聞いている。ここから見ると、第三人称についての陳述文の文末にソースを表すものがあるはずである。ソースがある場合、経験者は第三者から話者に変わる。したがって、第三者についての陳述文では、文末に顕在的なソースがないので、話者と経験者は一致しないように見えるが、実際は非顕在的なソースがあるので、話者と経験者は一致する。話者と経験者が一致することは人称制限の性質である。よって、陳述文には、弱い人称制限があると考えられる。例えば、空が曇っている状態を見て、「雨が降ります」というより、「雨が降りそうです」と述べる方が適切である。

以上をまとめると、日本語では、話者は自分について話している時、ソースが現れないが、第三者について話している時、感覚・感情形容詞述語文であれ、感嘆文であれ、陳述文であれ、多少なりとも人称制限がある。ただし、感覚・感情形容詞述語文、感嘆文は表出文であり、表出の気持ちが強いので、人称制限に気づきやすいが、陳述文には、人称制限が弱いので、気づきにくい。また、話者が何かを述べる時、［Spec SAP］にあるゼロ代名詞は話者の「私」と一致し、何かについて質問する時、［Spec SAP］にあるゼロ代名詞は聞き手の「あなた」と一致することが分かる[52]。

そこで、感覚・感情形容詞を述語とする文では、［Spec SAP］にあるゼロ代名詞はその感覚・感情形容詞の経験者と一致し、それ以外の場合では、［Spec SAP］にあるゼロ代名詞は下の統語構造にある文が表されたことを実行する人、あるいは、その文が表された情報を持っている人と一致することが分かる。

Stephenson (2006, 2007)は味覚述語形容詞 tasty と might, must などのモダリティ

[52] これについて Hashimoto (2015: 178)は感覚・感情形容詞述語文を例文に表出文、質問文に関して指摘したが、陳述文などがどうなるかは述べていない。

への検討を通して、文の真理値と関わる要素は「可能世界 world」「時間 time」の上に、「個体 individual」を加えた。

(44) a. This cake is tasty.

b. It might be raining.

(44a)の真理値は「どの可能世界でそのケーキが美味しいか(world)」、「いつ美味しいか(time)」と関わると同時に、「誰にとって美味しいか(individual)」にも関係がある。つまり、「ある世界で、ある時間でそのケーキが美味しい」かどうかは人によって異なる。また、同じように、(44b)は「雨が降っているようである」かどうかは話者、時間に関係があると同時に、どの可能世界について言及するかにもかかわる。そこで、Stephenson (2006, 2007)は味覚形容詞述語文と might, must のモダリティがつく文に非顕在的な PRO を設定した。

(45) This cake is tasty.

(a) [This cake] [tasty PRO_j]

(b) $[\![(a)]\!]^{u;w,t,j}$

$= [\![\text{tasty}]\!]^{u;w,t,j}\ ([\![PRO_j]\!]^{u;w,t,j})\ ([\![\text{this cake}]\!]^{u;w,t,j})$

$= [\lambda x_e.[\ \lambda y_e.y \text{ tastes good to } x \text{ in } w \text{ at } t\ ]](j)(c)$

=1, iff c tastes good to j in w at t (Stephenson 2006: 591)

(46) (a) It might be raining.

(b) [might PRO_j][it be raining]

(c) $[\![(b)]\!]^{u;w,t,j}$

$= [\![\text{might}]\!]^{u;w,t,j}([\![PRO_j]\!]^{u;w,t,j})([\lambda w''.[\lambda t''.[\lambda j''.\ [\![\text{it be raining}]\!]^{u;w'',t'',j''}]]])$

$= [\lambda x_e.[\lambda p_{<s,<i,et>>}.$ there is some world w' compatible with x's knowledge in w at t such that $p(w')(t)(x)=1]](j)\ ([\lambda w''.[\lambda t''.[\lambda j''.$it's raining in w'' at t'']]])

= 1, iff there is some world w' compatible with j's knowledge in w at t such that it's raining in w' at t (Stephenson 2006: 590)

前の 4.2 節の先行研究で述べたように、疑問の「か」は選言である。数学的に言うと、選言というのは、二つの選択肢から一つを選ぶ、あるいは、多数の選択肢から一つを選ぶ意味を表す。しかし、実際の言語世界では、選言は、どの可能世界で選ぶか（可能世界）、いつ選ぶか（時間）、また、どのような人が選ぶか／誰が選ぶかという情報を持っている人と関わる。さらに、同じ会話場面、同じ選言に対して、可能世界と時間は同じであるが、選ぶ人／何を選ぶという情報を持っている人が異なると、違う選言になる可能性がある。したがって、ある決まった選言に対して、情報の提供者(DP)[53]を設定する必要がある。

そこで、疑問の「か」のある文の前に非顕在的な情報の提供者(DP)[54]を設定する。

(47) ［IP か］→(DP)［IP か］

この非顕在的な情報の提供者(DP)は報告文において、非顕在的であるが、伝述の「語り」文では、顕在的になる場合がある。

(48) a. 桜がきれいですか？
b. 田中さんは<u>李さんに</u>桜がきれいかと聞いた。

(48a)は話者が李さんに聞くとする。この時、聞き手の李さんは会話内容には存在しない。しかし、それを主文に埋め込まれて伝述する(48b)において、「桜がきれいか」を聞く対象である「李さん」は文の内容に現れる。言い換えれば、実際の会話場面で、「桜がきれいだ」あるいは、「桜がきれいではない」ということはこ

---

53 「か」による文は情報が聞き手から話し手に来る感嘆、情報が話し手から聞き手に来る疑問を表すので、「か」がつく文の真理値と関わる人の要素を情報の提供者と名付ける。

54 この情報の提供者は前に出た経験者と同じものを指す。つまり、本章では、感覚・感情形容詞述語文について論じる時には経験者と呼ぶ。しかし、「か」のある質問文などについて論じる場合、情報のやり取りに関連するので、情報の提供者と呼ぶ。

の「李さん」による。

また、「か」は疑問を表すので、知覚素性［sentient］（以下、［sen］に省略する）と疑問を埋める判断者のインデックスを持っていると考えられる。素性［sen］をチェックするため、統語構造で下にある IP の前の非顕在的な DP は［Spec Force'］に上昇し、「か」の素性［sen］をチェックして削除する。素性チェックの結果、判断者のインデックスが DP のインデックス［n］と一致する。そして、「か」のインデックスは上の［Spec SA'］にあるゼロ代名詞(pro)に制限されて、聞き手(hearer) になる（図 4-8）。

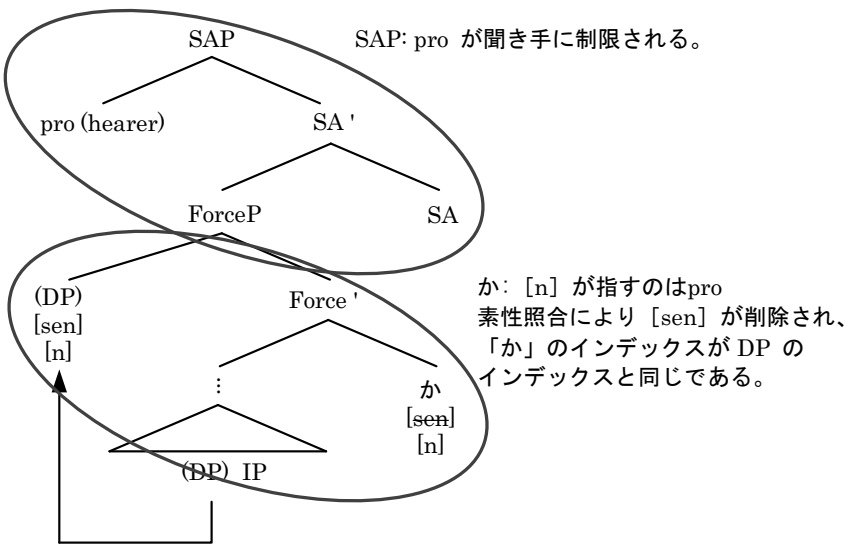


図 4-8 疑問の「か」による素性チェックの図

まとめていうと、質問の場合、［Spec SA'］にあるゼロ代名詞は聞き手に制限される。質問の「か」は選言であり、選言には非顕在的な情報の提供者 DP がある。また、疑問の「か」は、素性［sen］をチェックする結果、その判断者のインデックスは DP のインデックス［n］と一致し、［Spec SA'］にあるゼロ代名詞によって聞き手に制限される。

以上は主文文末における疑問の「か」を検討した。会話文の主文には SAP が存在するので、質問文では、その質問を埋める人（聞き手）が存在する(49)。

(49) A: どこに行きましたか？

B: 図書館に行きました。

(50) A: 田中さんは李さんがどこに行ったか分かりません。

B: ??図書館に行きました。

しかし、客観的に疑問を表している、埋め込み文文末にある「か」は、統語構造では、上に主文があるが、発話行為力を持つ SAP がないので、その疑問を埋める人がいない。例えば、(50)は話者 A の発話に対して、聞き手は埋め込み文が表す疑問に答えるなら、奇妙になる。したがって、主文文末にある「か」と埋め込み文文末にある「か」は異なる性質を持っている。前者は疑問の開放命題を満たす人が存在し、後者は疑問の開放命題を満たす人が存在しない。

4.3.1.1.4 感嘆の「か」について

本節で、統語論の立場から感嘆の「か」を考察する。

Ono (2006: 121)によれば、(51)のように埋め込まれた感嘆文の後には「と」がなくてはならないが、(52)と(53)のように埋め込まれた疑問の文末終助詞「か」の後に「と」が普通省略されている。したがって、構造上では、感嘆文の文末にある「だろう」が疑問の「か」の下にある。

(51) Mary は John がなんて大きなピザを食べたのだろう*(と)思った。

(Ono 2006: 121)

(52) Mary は John がどの大きなピザを食べたか(と)聞いた。

(Ono 2006: 121)

(53) Mary は John がどの大きなピザを食べたか (*と)知りたがっていた。

(Ono 2006: 121)

(54) Mary は John がなんて大きなピザを食べたのか*(と)思った。

同じように、(54)で埋め込まれているのは「か」による感嘆文であり、文末の「か」

の後の「と」は省略されてはならない。また、感嘆文にある「か」は感嘆の「だろう」と同じような位置にあるはずである。したがって、統語構造上では、感嘆の「か」は疑問の「か」の下にあると考えられる。

また、Koizumi (1991, 1993) は人称制限が現れるところに「だろう」が入ると、人称制限が解除されるので、IP と CP の間に、「だろう」のような語が占める投射があると主張し、それを ModalP と呼んだ(55) (56) (57)。

(55) 私が暑い（øMod）。

(56) *彼が暑い。

(57) 彼が暑いだろう。

そして、Hashimoto (2015)は感覚・感情形容詞述語文文末に非顕在的な Mod (øMod)を設定し、øMod のところに「だろう」が入ると、人称制限が解除されるので、統語構造では、øMod と「だろう」が同じ位置にあると指摘した(55〜57)。また、Hashimoto (2015)は Hiraiwa & Ishihara (2002)、遠藤 (2010)、Saito & Haraguchi (2012)などに従い、名詞化(nominalizer)の「の」は FinP (Finite Phrase)であると分析し、「だろう」は「の」の前に出てはならないが(59a、b)、後ろに現れても良いので(58)、構造上で、FinP の上にあるはずだと主張した。

(58) 花子は僕のうちにいる（の）だろう。 (Hashimoto 2015: 23)

(59) a. 太郎は［ 花子が僕のうちにいる（*だろう）の］を知っている。

b. 太郎は［$_{\text{ForceP}}$［花子が僕のうちにいる（*だろう）の］か］聞いた。

(Hashimoto 2015: 23)

(60) 太郎は［$_{\text{ForceP}}$［花子が僕のうちにいるの（だろう）］か］と聞いた[55]。

[55] 筆者が加えた例文である。

すると、「だろう」のような語はForcePの位置にある疑問の「か」の下にあるので(60)、感嘆の「か」の統語位置は以下のようになる。

(61) ［［［［TP］Fin ］　　Mod ］　　Force ］　　SA ］
（の）　（øMod、だろう、か[56]）　（か[57]）　（わ、よ、ね）

以上の考察から見て、表出を表す文末終助詞は、例えば、「øMod」、「だろう」、感嘆の「か」など、統語構造上で、同じ位置（［ModP］）にあると考えられる。

前に検討したように、疑問の「か」は選言関数である。ここで、感嘆の「か」も選言であると主張する[58]。同じように、選言は、どの可能世界で選ぶか（可能世界）、いつ選ぶか（時間）、また、どのような人が選ぶか、つまり、どれを選ぶかという情報を持っている人と関わる。そして、同じ会話場面、同じ選言に対して、可能世界と時間は同じであり、情報の提供者は異なる可能性がある。したがって、ある決まった選言に対して、非顕在的な情報の提供者DPを設定する。

そこで、感嘆の「か」のある文の前に非顕在的な情報の提供者DPを設定する。

(62) ［IPか］→ (DP)［IPか］

また、相対主義的にとらえる意味論[59]では、文が指示するものは，真理値（真または偽）であるが、それは一意に決まるものではない。文の真理値は，割り当て関

---

[56] この「か」は感嘆の「か」である。

[57] この「か」は疑問の「か」である。

[58] 詳細的な検討は4.3.2.1節を見る。

[59] 相対主義的にとらえる意味論(Relativist Semantics)とは文の真理値について、絶対性を否定し、相対性を主張する説である。例えば、文の真理値は、場合によって、個体、会話環境、味覚の基準、物の遠近感など多くのパラメーターに関わる。関連ある文献は、Kölbel (2004a), Kölbel (2004a), Egan *et al.* (2005), Lasersohn (2005), MacFarlane (2007), Richard (2004), Stephenson (2007)などである。

数 g、コンテクスト（発話状況）c、可能世界 w などに依存する関数である。その他に、通常、文に伴い、モダリティがある。そのモダリティには判断者がいる (Speas & Tenny 2003, Tenny 2006)。つまり、あるモダリティや認識モーダルが成立するかどうかは判断者に依存するのである。たとえば、Stephenson (2006, 2007)は味覚述語形容詞と might, must などのモダリティについて、ある文の真理値と関わる要素は「可能世界 world」「時間 time」の上に、「個体 individual」を加えた。したがって、本節で検討している「か」は感嘆を表すので、感嘆のモダリティの判断者が存在する。

「か」は感嘆を表すので、知覚素性［sen］がある。素性［sen］をチェックするため、構造の下にある IP の前の非顕在的な DP は［Spec Mod′］に上昇し、「か」の素性［sen］をチェックして削除する。素性［sen］をチェックした結果、「か」の判断者のインデックスは非顕在的な DP のインデックス［n］と一致する。また、「か」が感嘆を表す時には、そのインデックスは上の［Spec SA′］のゼロ代名詞 (pro) によって話し手(speaker)に制限されている（図 4-9）。

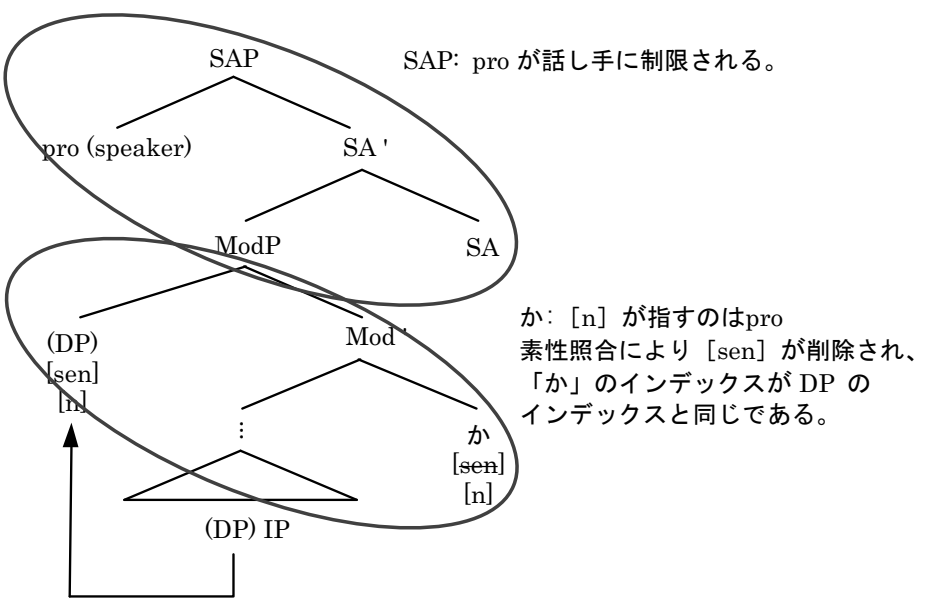


図 4-9 感嘆の「か」による素性チェックの図

まとめていうと、感嘆の場合、［Spec SA′］にあるゼロ代名詞は話し手に制限される。感嘆の「か」は選言であり、さらに、非顕在的な情報の提供者がある。また、感嘆の「か」は ModP にあり、それに知覚素性［sen］と判断者のインデックスがある。知覚素性［sen］をチェックした結果、「か」の判断者のインデックスは非顕在的な情報の提供者 DP のインデックス［n］と一致し、そして、両方とも［Spec SA］にあるゼロ代名詞に話し手に制限されている。

4.3.1.1.5 「か」による統語論

以上の統語論における感嘆の「か」と疑問の「か」についての考察から、疑問の「か」であれ、感嘆の「か」であれ、いずれにせよ、両方とも選言である[60]。前者は ForceP であり、後者は ModP である。統語構造上の位置が異なるが、選言とする特徴は同じである。例えば、両方とも判断者と非顕在的な情報の提供者が存在し、しかも、［Spec SA′］のゼロ代名詞に制限されている。

ここで、疑問の「か」と感嘆の「か」を合わせて、選言の「か」として統一する。そこに非顕在的な情報の提供者 DP が存在し、それが表すモダリティに判断者のインデックスがある。疑問か感嘆のモダリティを表す「か」に知覚素性［sen］があり、それは［Spec Mod'］／［Spec Force'］に上昇した、非顕在的な情報の提供者 DP とチェックした結果、「か」の判断者のインデックスは DP のインデックスと一致する。そして、［Spec SA］のゼロ代名詞によって聞き手／話し手に制限されている(図 4-10)。図 4-10 で XP は ForceP あるいは ModP を指す。

[60] 感嘆の「か」がなぜ選言であるかは 4.3.2.1 節を見る。

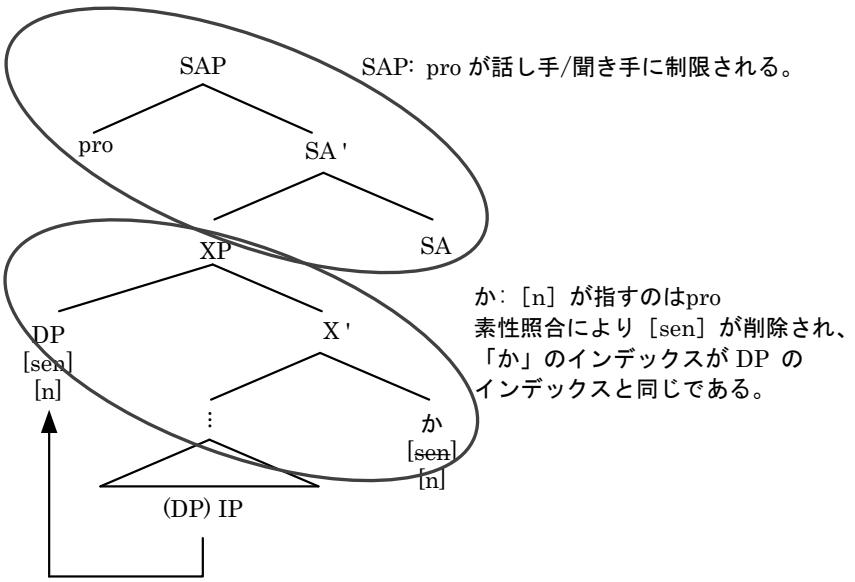


図 4-10 「か」による素性チェックの図

4.3.1.2 統語論における“吗”

(63) 你　去　东京　吗?

Ni　qu　Beijing　ma

あなた　行く　東京　か

日本語訳:（あなたは）東京に行くのですか？

(64) 你是昨天去北京的吗?

a. ［$_{TopicP}$ 你［$_{FinP}$ 是　昨天　去　北京［　的］］吗?

b. ［$_{FinP}$［$_{IP}$ 你　是　昨天　去　北京］　的］吗?

Ni　shi　zuotian　qu　Beijing　de　ma

あなた　焦点のマーカー　昨日　行く　北京　の　か

日本語訳:（あなたは）昨日は北京に行ったのですか？

中国語文末終助詞“吗”は主文の Yes／No 疑問文文末だけに使われる(63)。日本語名詞化のマーカー「の」は TP につくと、FinP を投射する。同じように、中国語名詞化のマーカーの“的”も TP につくので、FinP を投射すると考えられる。また、中国語には格助詞がないので、(64)における“你（あなた）”は主題(TopicP)である可能性もあれば(64a)、主語である可能性もある(64b)。ここで、“吗”は二つの可能性があり、これを XP であると表す。

(64a)の場合、統語構造上で、“吗”は FinP（“的”）と TopicP（“你”）の上にある。

(65) (64a)における統語構造：

$[_{XP}$ $[_{TopicP}$ [Topic $[_{FinP}[_{IP}$ IP] Fin]]] XP]

（你） （的） （吗）

(64b)の場合、統語構造上で、“吗”は FinP（“的”）の上にある。

(66) (64b)における統語構造：

$[_{XP}$ $[_{FinP}[_{IP}$ IP] Fin] XP]

（的） （吗）

(64a)であれ、(64b)であれ、いずれにせよ、統語構造上で、“吗”は FinP（“的”）の上にある。

次に、“吗”は Focus であるかどうかを見よう。

(67) 他 去 <u>哪儿</u> 了？

Ta qu naer le

彼 行く どこ 過去形（た）

日本語訳：彼はどこに行きましたか？

(68) 他 去 哪儿 了 <u>吗</u>？

Ta　qu　　naer　　le　　ma
彼　行く　どこ　　過去形（た）　か
日本語訳：彼はどこかに行きましたか？

(67)は WH 疑問文であり、文中の“哪儿”は WH 疑問詞「どこ」であり、フォーカスであると考えられる。その文末に“吗”を付けると、自動的に WH 疑問文から Yes／No 疑問文に変わる(68)。“哪儿”は不定名詞「どこか」に変化した。(68)において、“哪儿”は疑問を表さないので、フォーカスでなくても良い。(67)と(68)を合わせてみると、“吗”を付けることによって、疑問詞の“哪儿”にあるフォーカスが消えるので、その文のフォーカスは疑問詞の“哪儿”から“吗”に移動したのではないかと考えがちであるが、実は“吗”が文末終助詞としてフォーカスになることはありえない。その理由は二つある。

(69) 他　去　<u>哪儿</u>　了。
Ta　qu　naer　le
彼　行く　どこか　過去形（た）
日本語訳：彼はどこかに行きました。

理由 1：(67)は WH 疑問文に読み取れるが、陳述文にも読み取れる(69)。陳述文として解釈する場合、“哪儿”は不定名詞「どこか」を表す。つまり、文末に“吗”のある場合は“哪儿”が不定名詞「どこか」であるが、“吗”がない場合でも、“哪儿”は不定名詞にも読み取れる。したがって、(68)において、“哪儿”は不定名詞に読み取るか、あるいは、疑問詞に読み取るかは文末に“吗”があるかどうかとは関係がない。すなわち、“吗”はフォーカスではないと考えられる。

理由 2：文末終助詞はフォーカスになりえない。

(70) a. <u>Where</u> are you going by bike?
b. Saijyo station.

(71) a. 自転車でどこに行くのですか？

b. 大学に行きます。

(72) a. 車で広島に行くのですか？

b. いいえ、新幹線で。／いいえ、岡山にいきます。

英語などにおいては、文末終助詞が存在せず、WH の移動によって、疑問などを表す。また、WH 疑問詞は主文にあっても、埋め込み文にあっても、焦点として捉えることが多い。そして、通常、焦点は文の意味を絞るところであり、疑問文に対して，回答文では絞って回答する部分が焦点であると見られる。

(70)において移動のある疑問詞 where はフォーカスであると見られる。WH 移動のない言語では、例えば、日本語、中国語など、通常、文末終助詞が存在する。それらは文末終助詞によって、疑問などを表す。(71)において、答えは「どこ」に絞って答えるので、フォーカスは「どこ」であることが分かる。また、(72)において、答えは「車で」／「広島に」に絞ったので、フォーカスは「車で」、あるいは「広島に」である。「か」はフォーカスではない。フォーカスは文が絞って意味を表すものとして、実質な意味を持つ語彙範疇でなければならない。つまり、機能範疇とする文末終助詞はフォーカスにはなり得ない。

以上のような考察を踏まえて、“吗”はフォーカスではないことが分かる。

次に、“吗”が Force であるか、または、SA であるかを見よう。

Saito & Haraguchi (2012)と Hashimoto (2015)は、ForceP は文のタイプを表すもので、日本語疑問の「か」は Force に対応すると指摘したが、ここで、Paul (2014, 2015)、Erlewine (2016) などに従い、中国語 Yes／No 疑問文文末にある“吗”は「か」と同じように、ForceP を投射すると提案する。その理由は以下の通りである。

Jayaseelan (2001)によれば、疑問の「か」は選言関数である。疑問文に使う場合、相手から情報を要請する意味を表すが、それはもともと発話内効力があるわけではなく、語用論的な会話要素によって影響されているからであると指摘した。そして、本章の 4.3.2.1 節で検討するように、感嘆文文末にある「か」も選言である。ただし、疑問に使う時、フォーカスされる WH か名詞句が聞き手にとって普通の値を取るが、感嘆に使う時、フォーカスされる WH か名詞句が話し手にとって予

想外の値を取る[61]。そこで、Jayaseelan (2001)の指摘に従うと、疑問の「か」だけではなく、感嘆の「か」と疑問の「か」を含む「か」はただの選言であり、発話内効力を含まない。中国語“吗”は三人称小説の地の文に使えず、独り言に使えず、聞き手目当ての質問だけに使える[62]。日本語「か」より使用方法は非常に制限されているが、それもある意味で選言であると言える。したがって、“吗”は「か」と同じように、発話内効力を含まず、ForceP に対応する。

(73) “吗”による統語構造：

［［［［［TP］Fin　］　…　］　Force　］　SA ］

（“吗”）

4.3.1.1.3 節で、文の真理値と関わる要素は「可能世界 world」「時間 time」の他に、「判断者 judge」にも関係があるという Stephenson (2006、2007)の説を紹介した。また、表出内容を経験する人は必ずそれを表出する話者であり、質問の内容を経験した人は必ずそれを質問された聞き手であるので、話者は何かを表出すれば、その［Spec SAP］にあるゼロ代名詞は話者と一致しなければならず、話者は何かについて質問すれば、その［Spec SAP］にあるゼロ代名詞は聞き手と一致しなければならないという Hashimoto (2015: 178) の説について述べた。同様に、日本語疑問の「か」と同じように、中国語疑問文は、質問文の上にある SAP の［Spec SAP］のゼロ代名詞は聞き手である。

また、疑問の“吗”は主文の Yes／No 疑問文文末だけに使う選言である。選言は選択肢の集合から一つを選ぶことであり、実際の状況では、選言は、どの可能世界で選ぶか（可能世界）、いつ選ぶか（時間）、また、どのような人が選ぶか（非顕在的な情報の提供者）と関わる。また、同じ会話場面、同じ選言に対して、可能世界と時間は同じであり、情報の提供者は異なる可能性がある。したがって、ある決まった選言に対して、非顕在的な情報の提供者 DP を設定する必要がある。

すると、疑問の「か」のある文と同じように、疑問の“吗”のある文では前に非

---

[61] 詳細は 4.3.2.1 節で検討する。

[62] 詳細は第 3 章を見る。

顕在的な情報の提供者 DP を設定する。

(74) ［IP“吗”］→（DP）［IP“吗”］

4.3.1.1.3 節で述べた疑問の「か」のある文と同じように、(74)におけるこの非顕在的な情報の提供者は「報告」文において、非顕在的であるが、伝達の「語り」文では、顕在的になる場合もある。

(75) a. 樱花　漂亮　吗?
Yinghua　piaoliang　ma
桜の花　きれい　か
日本語訳：桜がきれいですか？

b. 田中　问　小李　樱花　是否　漂亮。
Tianzhong　wen　xiaoli　yinghua　shifou　piaoliang
田中さん　聞く　李さん　桜の花　かどうか　きれい
日本語訳：田中さんは李さんに桜がきれいだかと聞いた。

(75a)では話者が李さんに聞くとする。この時、聞き手の李さんは会話内容には存在しない。しかし、それを埋め込み文に埋め込んだ伝達する(75b)において、「桜がきれいか」を聞く対象の「李さん」は会話内容に出現する。すなわち、「桜がきれいだ」、あるいは「桜がきれいではない」ということはこの「李さん」に左右される。

また、“吗”は疑問を表すので、疑問の「か」と同じように、知覚素性［sen］と判断者のインデックスを持っていると考えられる。素性［sen］がチェックするため、構造の下にある IP の前の非顕在的な情報の提供者 DP は［Spec Force′］に上昇し、“吗”の素性［sen］をチェックして削除する。素性チェックの結果、判断者のインデックスを DP のインデックス［n］と一致する。そして、“吗”のインデックスは上の［Spec SA］のゼロ代名詞(pro)によって聞き手(hearer)に制限されている（図 4-11）。

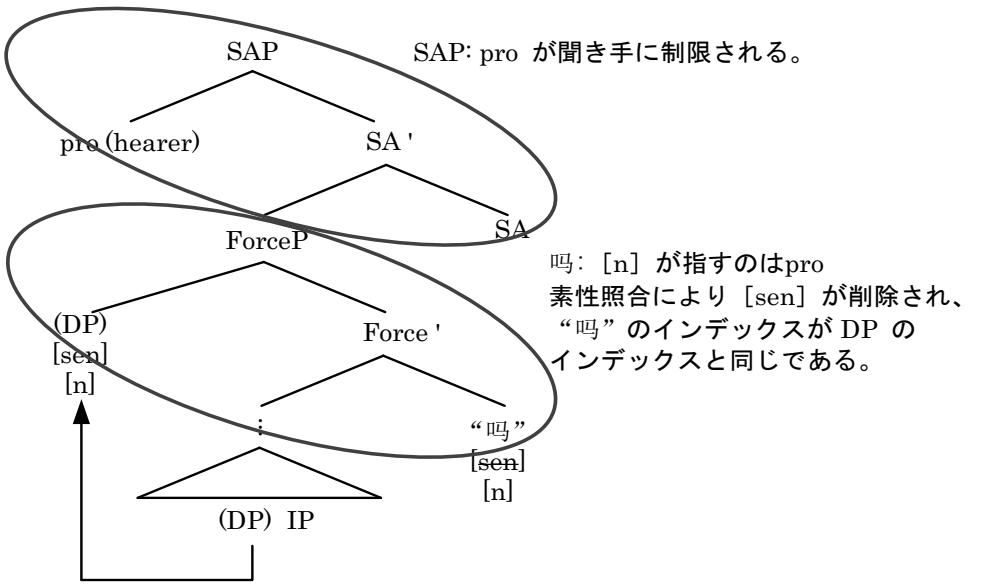


図 4-11 “吗”による素性チェックの図

まとめていうと、質問の場合、［Spec SA］にあるゼロ代名詞は聞き手に制限される。質問の“吗”は ForceP の head であり、そこに判断者のインデックスがあり、そのインデックスは“吗”の素性［sen］をチェックした結果、非顕在的な情報の提供者のインデックス［n］と一致し、［Spec SA］のゼロ代名詞によって聞き手に制限される。

4.3.2 意味論における「か」と“吗”について

4.3.2.1 意味論における「か」

4.2.2 節で「か」についての意味論的な先行研究について述べたように、現在までの段階では、名詞句と疑問文文末における「か」は選言関数であり、統御されている名詞句か WH 疑問詞が表す集合から一つを選択する役割を果たしているという統一な分析が行われるようになっている（Nakanishi 2006、外池 2014a、外池 2014b、Szabolcsi 2015 など）。本章では、名詞句と疑問文だけではなく、感嘆文における「か」も選言関数であるという分析を提示する。

4.3.2.1.1 疑問の「か」は聞き手にとって普通の値を取る

先行研究では疑問の「か」は選言であると考察されたが、それがどのように選言を表すかはまだ明らかになっていない。本節では、発話場面で存在する聞き手と話し手の要素を入れて選言である「か」の特徴を検討する。

以下、それぞれ WH 疑問文と Yes／No 疑問文に分けて分析する。

まず、「か」のある WH 疑問文をみよう。

コンテクスト：話者 A は買い物をしている。彼女はあるドレスを指して、店員さんに(76)のように聞いた。

(76) このワンピースはいくらですか？

話者は(76)を言う時、話者 A は「このワンピース」の値段を知らず、聞き手の店員さんにその値段の情報を提供してほしいと思っている。Hamblin (1973)によれば、疑問文はある条件を満たす選択肢の集合を表す。Hamblin (1973)の説を使うと、(76)は、聞き手に、｛このワンピースは 1000 円です、このワンピースは 2000 円です、このワンピースは 3000 円です、……このワンピースは 5 万円です、……｝という命題の集合から、一つを選んでもらうという意味を表している。文末にある「か」はその多数の選択肢から一つを選んでもらうという意味で、選言である。つまり、通常、聞き手はある質問文を発話する時、一定の条件を満たす選択肢の集合を出して、聞き手に一つを選んでもらう。その出された集合から何／どれを選ぶのかは聞き手による。言い換えれば、選言の演算子のある情報を含む質問文を出すのが話し手であり、選言の演算子を含む情報を埋めるのが聞き手である。すなわち、質問文の場合、「か」による選言を回答する基準は聞き手にある。

また、聞き手は上の開放命題の集合からどれを選んで回答しても、話し手にとって驚くべきことかもしれないが、聞き手自身にとっては、驚く必要のないことであると考えられる。本節は、このような開放命題の集合から選ばれた、驚きを与えない値を普通の値と呼ぶ。つまり、「か」は選言であるが、疑問を表すとき、WH 疑問詞は聞き手にとって、普通の値、かつ話し手の要求を満たす値を取る。

次に、「か」のある Yes／No 疑問文をみよう。

コンテクスト： 話者 A は一緒にアルバイトしている田中さんと話し合っている。話者 A は聞き手の田中さんに向かって(77)のように聞いた。

(77) 田中さんは学生ですか？

疑問文はある条件を満たす選択肢の集合を表すとすれば、WH 疑問文が表す集合のメンバーがたくさんあり、Yes／No 疑問文が表す集合のメンバーが二つしかないことが分かる。したがって、(77)は｛田中さんは学生である、田中さんは学生ではない｝という集合を表し、聞き手にその二つの選択肢から一つを選んでもらう意味を表している。そして、聞き手の田中さんは自分自身の状況に照らして、肯定か否定で回答する。つまり、WH 疑問文と同じように、Yes／No 疑問文を回答する基準も聞き手にある。

また、聞き手の田中さんは自分の状況に照らして、「はい、学生です」、あるいは「いいえ、学生ではありません」と回答しても、話し手の A は驚くかもしれないが、聞き手の田中さん自身にとっては普通である。すなわち、WH 疑問文における WH 疑問詞が聞き手にとって普通の値を取ると同じように、Yes／No 疑問文における、フォーカスされた名詞句も聞き手に取って普通の値を取る。

例文(76) (77)はどちらも話者が聞き手に向かって発話するパターンである。質問文というのは聞き手に向かって聞く場合もあれば、自分自身に聞く（自問自答の）場合もある。後者の場合は自分は話し手であると同時に聞き手でもある。自問自答文における「か」は、聞き手と話し手が異なる場合における質問の「か」と同じであり、聞き手とする自分自身にとって、普通の値を与える意味を表している。

以上の分析から見れば、話し手は質問文を言う時、その疑問を埋めるのは聞き手である。選言とする「か」は疑問を表し、フォーカスされた WH 疑問詞か名詞句は聞き手にとって普通の値を取る。

以上は疑問文における「か」を検討したが、感嘆文における「か」はどうなるかを次節で考察する。

4.3.2.1.2 感嘆の「か」は話者にとって予想外の値（極値）を取る

文末に「か」のある感嘆文はそれぞれ、(78)のような、WH 疑問詞が存在しないタイプと、(79a、b) のような、WH 疑問詞が存在するタイプと、2 種類ある。

(78) トランプさんが来たのか！

(79) a. どれほどあなたの援助に感謝していることか！　　(= (3a))

b. なんて[63]美しい絵なのか！

便宜上、以下はそれぞれ疑問詞が存在しない感嘆文と、WH 疑問詞が存在する感嘆文に分けて分析を行う。まず、WH 句が存在しない感嘆文を見よう。

（コンテクスト）

話者 A は主催者としてある学会を行う予定である。その学会に B さんと李さんなどの学者が参加するだろうと思っていた。実際に学会に来た人は、B さんと李さんだけでなく、村上さんも参加した。話者 A は村上さんが妻の出産で参加できないだろうと考えていた。B さんは村上さんが参加すると知っているが、李さんが最近風邪で参加できないと思っていた。当日、A は B さんに会って、二人の間で、以下のような会話がなされた。

(80) A: 村上さんは来なかったね？

B: 来たよ。

A: そうか！村上さんが来たのか！いいですね！そういえば、さっき、李さんに会ったよ。

B: あ、そう？李さんが来たのか！

A: うん、来ました。この前、話があったんで、来るって。

B: そうですか、来ないと思っていたよ。

---

63 「なんて」は「なんと（いう）」から来ているので、WH 疑問詞と言える (Ono 2006: 69)。

会話が始まる前に、話者 A は村上さんが学会に出席しないだろうと頭の中で想定したが、実際に B さんから「（村上さんは）来たよ」と聞いて、意外な気持ちが出て、感嘆文「村上さんがきたのか！」を発話した。話者 A はなぜ驚いたかというと、「村上さんが学会に出る」ことを前もって想定していなかったからである。文が一定の条件を満たす集合を表すという概念を使って説明すると、以下のようである。

学会が始まる前に、話者 A にとって、前もって想定した、学会に出席する可能性が高い→低いという順序で並べると、学会に出席する人の集合は以下のようである。

(81) A さんにとって学会に出席する可能性が高→低の順序で参加者の集合：
{B さん>李さん>……>村上さん}

話者 A にとって、｛B さん、李さん、……｝が学会に出席しても別に意外なことではない。そして、｛村上さん｝が学会に出席しないことも普通なことである。しかし、実際には、話者 A が想定した状況に反して、村上さんが学会に出席した。つまり、

(82) 実際に学会に出席する人の集合：
{A さん、B さん、李さん、村上さん……}

したがって、A は村上さんが学会に出たことに驚いて「村上さんが来たのか！」と言った。「村上さん」は学会に出席しないはずなのに、出席したので、驚くべき存在であると考えられる。すなわち、A にとって、学会に出席しない「村上さん」が普通であるが、学会に出席した「村上さん」が特別で、驚くべき存在である。

次に、話者 B から、会話(80)を検討する。

会話が始まる前に、話者 B は村上さんが学会に出席するが、李さんが出席しないだろうで思っていたが、実際に A さんから「李さんが来た」という情報を聞いて、驚いて、感嘆文「李さんが来たのか！」を発話し、意外な気持ちを表出した。

話者 B にとって、学会が始まる前に、B さんが想定した、学会に出席する可能性が高→低という順序で並べると、学会の参加者の集合は以下のようである。

(83) B さんにとって学会に出席する可能性が高→低という順序で参加者の集合：
{A さん>村上さん>……>李さん}

話者 B にとって、{A さん、村上さん、……} が学会に出席しても別に意外なことではない。そして、{李さん} などが学会に出席しないことも普通なことである。しかし、実際には、話者 B が想定した状況と反って、李さんが学会に出席した。つまり、

(84) 実際に学会に出席する人の集合：
{A さん、B さん、李さん、村上さん……}　　(= (82))

したがって、話者 B は李さんが学会に出たことに驚いて「李さんが来たのか！」と言った。「李さん」は学会に出席しないはずなのに、出席しているので驚く存在であると考えられる。すなわち、B にとって、学会に出席する人の中で {A さん、村上さん} は普通の存在であり、「李さん」が特別で、驚くべき存在であると言って良いだろう。

以上、まとめて言うと、話者は前もって想定する未確定要素を含む命題について聞いたのは疑問文である。それと異なり、話者は前もって想定するのではなく、ある物／出来事について気が付いたその場で、想定していなかった「意外・驚き」を表出するのが感嘆文になる。WH 句が存在しない感嘆文文末にある「か」と疑問文に存在する「か」と同じように、選択肢から一つを選んでもらう意味を表し、選言であるが、疑問文に出た名詞句は聞き手にとって普通の値を取るのと異なり、感嘆文で感嘆の対象になる名詞句は、話し手にとって、意外な気持ちを引き起こす特別な存在で、特別な値、つまり、予想外の値を取る。この予想外の値は尺度の概念から言うと、極値とも言える。

また、ある決まった文は感嘆文として発話されるかどうかは話者が誰であるか

によると考えられる。たとえば、「村上さんが学会に出席した」ことは話者 A にとって感嘆すべきことであるが、話者 B にとっては普通である。「李さんが学会に出席した」ことは話者 A にとって普通であるが、話者 B にとっては感嘆である。この「誰によるか」という要素は、本章で設定した非顕在的な情報の提供者と繋がる。

以下、WH 句が存在する感嘆文を見る。

（コンテクスト）

王さんは修士論文を書いていた時、友達の二木さんに多くの助言をもらった。そのおかげで、王さんの修士論文は優秀論文賞となった。王さんは二木さんに向かって、(85)を発話した。

(85) どれだけあなたの援助に感謝していることか！

(85)は WH 句が存在する感嘆文であり、WH 句は「どれだけ」である。李さんは(85)をいう時、心の中で、聞き手の二木さんに言葉で表せない感謝の気持ちがいっぱいであると考えられる。この感謝の量は話し手の王さんにとって、もうこれ以上のことはないと見られる。御礼の手紙を書いて渡すことを通して感謝するならば、「どれだけ」が表す量の集合「{……1 枚の手紙を書いて渡す、2 枚の手紙を書いて渡す、3 枚の手紙を書いて渡す、4 枚の手紙を書いて渡す……これ以上多くない（極値の）手紙を書いて渡す}があり、話者は自動的にその集合から、「これ以上多くない（極値の）手紙を書いて渡す」を選択して感謝の気持ちを表す。このような分析を踏まえて、(85)の文末にある「か」は選言関数であると見られる。ただし、話者は文中の WH 疑問詞が表す集合から自動的に予想外の値（極値）を取る。

4.3.2.1.3 「か」についての意味論

以上の 4.3.2.1.1 節と 4.3.2.1.2 節の考察で分かるように、疑問文がある一定の条件を満たす選択肢の集合を表す。文末にある「か」は選言であり、その集合から聞き手にとって普通の値を取ってもらう意味を表す。つまり、疑問文の中でフォー

カスされた名詞句か WH 疑問詞は聞き手にとって、普通の値である。感嘆文は話者が自分の意外の気持ちを抑えきれず、感嘆の気持ちを表出する文で、文末の「か」も選言であるが、感嘆された名詞句か WH 疑問詞は話者にとって、予想外の値（極値）を取る。

相対主義的にとらえる意味論では、文が指示するものは，真理値（真または偽）であるが、それは一意に決まるものではない。

(86) 私は 10 年前、故郷で、桜の木を植えたことがある。

(86)の真理値を考えてみよう。その真理値はまず、「私」は誰のことを指すかに関係がある。つまり、「私」は話者の「田中さん」を指すなら、その文が真であるが、それ以外の人であると、偽になるかもしれない。そして、「故郷」がどこであるか、また、その文を評価するのがどの可能世界に依存するかという問題もある。

まとめていうと、文の真理値は，割り当て関数 g、コンテクスト（発話状況）c、可能世界 w などに依存する関数である。また、通常、文に伴い、モダリティがある。そのモダリティには判断者がいる (Speas & Tenny 2003, Tenny 2006)。つまり、あるモダリティや認識モーダルが成立するかどうかは判断者に依存する。例えば、感情形容詞の人称制限に対して，感情形容詞を述語とする文の真理値は，割り当て関数 g、コンテクスト（発話状況）c、可能世界 w だけでなく，経験者 h（経験者パラメーター）にも依存する関数である。下の例文(87)は、報告文として、話者が「花子」であれば、良い文であるが、話者が「花子」ではないと、非文になる (Hashimoto 2015：44)。

(87) 寒いです。（花子の寒い感覚を表す場合）

「か」については、前で検討したように、感嘆の「か」であれ、疑問の「か」であれ、すべて選言である。ただし、感嘆の場合、文の中で、フォ―カスされた WH 疑問詞か名詞句が話し手にとって予想外の値（極値）を取る。疑問の場合、文の中で、フォ―カスされた WH 疑問詞か名詞句が聞き手にとって普通の値を取る。また、前で検討したように、選言は多数の選択肢、あるいは二つの選択肢から一つを

選ぶ意味であるが、どれ／何を選ぶかは人によって異なる。したがって、選言には非顕在的な情報の提供者の要素がある。そして、「か」が表すモダリティに判断者がいる。この判断者は情報の提供者と一致する。一致しないと、非文になる。まとめて表で表示すると、以下のようになる。

表 4-2 「か」による選言関数の解釈表

選言関数「か」	WH 疑問詞／名詞句	情報の提供者 DP	判断者 j (judge)
感嘆	予想外の値	話し手	話し手
疑問	普通の値	聞き手	聞き手

以下、モダリティの判断者は情報の提供者と一致することを説明する。

コンテクスト：田中さんは友達の李さんに会って、李さんの猫のためのキャットフードを買ってあげた。放課後、李さんは家に帰って、キャットフードを猫にやった。猫が美味しくキャットフードを食べている状況を見ていて、李さんは(88a)を呟いた。そして、次の日、李さんは田中さんにキャットフードを猫にやったと言った。そのキャットフードについて、田中さんは(89a)の発話によって聞いた[64]。

(88) a. なんて美味しそうに食べているのか！（情報の提供者は李さんである。）
b. ＃なんて美味しいキャットフードなのか！（情報の提供者は猫である。）

(89) a. 猫は美味しそうに食べましたか？　（情報の提供者は李さんである。）
b. ＃そのキャットフードは美味しかったか？（情報の提供者は猫である。）

キャットフードを食べたのが猫であるので、経験者は猫である。それが美味しいかどうかは李さんにはわからない。(88a、b)は感嘆文である。(88b)の情報の提供

[64] このテキスト及び下の例文は、might など認識的モダリティ(epistemic modals)のある文の真理値は個体の要素とは関係しないが、tasty など味覚形容詞(predicates of personal taste)のある文の真理値は個体の要素と関係するという Stephenson (2006, 2007)の指摘による発想である。

者は猫であり、感嘆というモダリティの判断者は李さんであるので、意味が奇妙な文になる。(88a)のモダリティの判断者は李さんである、しかも、それに「そう」を使ったので、その情報の提供者も李さんである。(89)は質問文である。(89a)に「そう」を使ったので、その情報の提供者とモダリティの判断者は聞き手の李さんである。(89b)は情報の提供者は猫であるので、意味が奇妙な文になる。したがって、選言「か」における非顕在的な情報の提供者とモダリティの判断者は一致しなければならない。

そこで、選言関数である「か」による文の意味論的計算は以下のようになる。

$[\![\text{かゝ}]\!]^{g,c,w,j}$

$= [\![[_{TP}$ ……WH／NP[65]……$][\text{かゝ}]]\!]^{g,c,w,j}$

$= [\![_{SAP}$ pro［ DP$[_{TP}$ ……WH／NP……］ かゝ ］］$]\!]^{g,c,w,j}$

$=\lambda x.\ [\![\text{かゝ}]\!]^{g,c,w,j\to x}((\ [\![\ [_{TP}$ ……WH／NP［n］……］］$]\!]^{g1,c,w,j})\ (\ [\![\text{pro}]\!]^{g2,c,w,j})\ (\ [\![\text{DP}]\!]^{g2,c,w,j}\ )\ )$, if $(\ [\![\text{pro}]\!]^{g2,c,w,j}) = (\ [\![\text{DP}]\!]^{g2,c,w,j}\ )$ ＝判断者．それ以外の場合は定義されない。

$=\lambda x.\ [\![\text{かゝ}]\!]^{g,c,w,j\to x}((\ [\![\ [_{TP}$ ……WH／NP［n］……］］$]\!]^{g1,c,w,j})\ (\ [\![\text{pro}]\!]^{g2,c,w,j})\ )$

$=\lambda x.\ [\![\text{かゝ}]\!]^{g,c,w,j\to x}((\ [\![\ [\text{WH／NP［n］}]\!]^{g1,c,w,j})\ (\ [\![\text{pro}]\!]^{g2,c,w,j})\ )$

ここで、$(\ [\![\ [\text{WH／NP［n］}]\!]^{g1,c,w,j}\ )$は、WH／NP が判断者 j にとって、どのような値（普通の値、または、予想外の値）を取るかを表す。つまり、 g1(n) ＝ 判断者 j の頭の中の WH／NP ; $[\![\text{かゝ}]\!]^{g,c,w,j\to x}$ は選言の「か」が x によって「質問」か「感嘆」であることを表す ; $(\ [\![\ [\text{WH／NP［n］}]\!]^{g1,c,w,j}\ )$と $[\![\text{かゝ}]\!]^{g,c,w,j\to x}$は関連性がある。つまり、聞き手による g1(n) は普通の値を取る場合、 $[\![\text{かゝ}]\!]^{g,c,w,j\to x}$ ＝質問 ; 話し手による g1(n) は予想外の値を取る場合、 $[\![\text{かゝ}]\!]^{g,c,w,j\to x}$ ＝感嘆。

したがって、

① $(\ [\![\text{pro}]\!]^{g2,c,w,j}) = (\ [\![\text{DP}]\!]^{g2,c,w,j}\ )$ ＝判断者＝聞き手の場合，x は聞き手である、

---

[65] WH／NP は文末に「か」のある文でフォーカスされた名詞句・WH 疑問詞を指す。

$[\![_{SAP}$ pro［ DP［$_{TP}$ ……WH／NP……］か ］］^{g,c,w,j}

$=\lambda x.$ ［［か］］$^{g,c,w,j\rightarrow x}$（（［［WH／NP［n］］］^{g1,c,w,j}）（［［pro］］^{g2,c,w,j}））

＝［［か］］^{g,c,w,j}（［［WH／NP［n］］］^{g1,c,w,j}）（hearer）

＝WH／NP は普通の値を取り、「か」は質問を表すようになる；

②（［［pro］］^{g2,c,w,j}）＝（［［DP］］^{g2,c,w,j}）＝判断者＝話し手の場合，x は話し手である、

［［$_{SAP}$ pro［ DP［$_{TP}$ ……WH／NP……］か ］］^{g,c,w,j}

$=\lambda x.$ ［［か］］$^{g,c,w,j\rightarrow x}$（（［［WH／NP［n］］］^{g1,c,w,j}）（［［pro］］^{g2,c,w,j}））

＝［［か］］^{g,c,w,j}（［［WH／NP［n］］］^{g1,c,w,j}）（speaker）

＝WH／NP は予想外の値を取り、「か」は感嘆を表すようになる；

4.3.2.1.4 特殊な発話環境を必要とする WH 句

以上のような考察に基づいて、すべての WH 疑問詞・名詞句は質問文に使えるので、普通の値を取ることができることが分かるが、これらすべての WH 疑問詞・名詞句は感嘆文に使えるか、あるいは感嘆の極値を取ることができるかという疑問が生じる。

極端に言えば、予想外の値を取りしやすいもの（「いくら」「どれだけ」「どのように」など副詞的な WH）は感嘆文に使いやすいが、予想外の値を取りにくいもの（「誰」「何」「どこ」など名詞的な WH）は適当な会話環境さえ整えば、感嘆に近い質問を表すことができると考えられる。

コンテクスト：ある強い妻が弱い夫に向かって(90)を言った。

(90) あなたを世話しているのが一体誰なのか！知っているの！

(90)は質問文であるが、それは聞き手の夫に回答してもらう意味を表すわけではなく、夫に「あなたを世話しているのは私だ」という強い気持ちを表すのである。それは感嘆に近いといえる。

4.3.2.2 意味論における“吗”

第 3 章で検討したように、中国語文末終助詞“吗”は、感嘆文に使えず、主文の Yes／No 疑問文文末だけに使えるので、ここで、文末に“吗”のある Yes／No 疑問文だけの意味論を考察する。

二つの選択肢から一つを選ぶのが選言であるが、たくさんの選択肢から一つを選ぶのも選言である。中国語“吗”は WH 疑問文に使えず、Yes／No 疑問文だけに使えるので、二つの選択肢から一つを選ぶという意味の選言である。

(91) 小李　来　了　吗?　(= (2b))
Xiaoli　lai　le　ma
李さん　来る　た　か
日本語訳：李さんが来たのですか？

(91)は話者が聞き手に{小李来了（李さんが来た），小李没来（李さんが来なかった）}という集合から一つを選んでもらう意味を表す。そこで、それを意味論で表示すれば、以下のようになる。

(92) λp［p=〖 Li came 〗∨ p=¬〖 Li came 〗］

ここで(91)は文全体、“小李来了”にフォーカスして解釈している。また、(91)の意味は名詞句“小李（李さん）”にフォカースする前提で、文全体“小李来了”について質問するかという問題がある。つまり、“吗”のある Yes／No 疑問文は文全体にフォーカスして解釈できるが、それは文の中のある名詞句にフォーカスする前提で、文全体について質問するという解釈をして良いかという問題である。

(93) A: 地球　围绕　月亮　转　吗?
Diqiu　weirao　yueliang　zhuan　ma
地球　回す　月　動く　か
日本語訳：地球は月の周りを回っている？

B: 不，　地球　围绕　太阳　转。
Bu　diqiu　weirao　taiyang　zhuan
いいえ　地球　回す　月　動く
日本語訳：いいえ、地球は太陽の周りを回っている。

(93)は現象文であり、普通、現象文は文全体を捉えて理解しやすいが、(93)は回答文からみて、質問文は名詞句“地球”、あるいは“月亮”に絞ることを前提として文全体について解釈している。次に、名詞句が省略された Yes／No 疑問文をみよう。

コンテクスト：話者 A は李さんが来たか来なかったかを B に聞いた。A は B に聞いたのは李さんのことであると B はわかると思ったが、実は B さんは分からなかった。

(94) A: 来　了　吗?
Lai　le　ma
来る　た　か
日本語訳：来ましたか？

B: 谁?
Shui
誰
日本語訳：誰？

A: 小李。
Xiaoli
李さん
日本語訳：李さんが……

B: 来　　了。

Lai　　le

来る　た

日本語訳：来ました。

話者 A が“来了吗？（来ましたか）”と聞いた。“吗”は文全体に絞って聞くとすると、B が誰のことか分からなくても、直接“来了。（来ました。）”、あるいは、“没来。（来ませんでした。）”と答えるはずである。しかし、B さんが“来了吗？（来ましたか）”を聞いて、わけがわからないので、さらに名詞句“谁？（誰？）”を聞いた。そこで、“吗”は普通、文全体に絞らず、文の中のある名詞句に絞る前提で文全体について聞くと考えられる。

そして、中国語では、文の中のある名詞句にフォ―カスする前提はなく、単にその文全体に絞って聞くのは、何であろうか？それは“吗”のある Yes／No 疑問文ではなく、“或者（あるいは／または）”“还是（あるいは／または）”などを使う選択疑問文である。

(95) 小李　去　东京，<u>还是</u>　小张　来　广岛　（*吗）？

Xiaoli　qu　dongjing　haishi　xiaozhang　lai　guangdao　（*ma）

李さん　行く　東京　あるいは　張さん　来る　広島　（*か）

日本語訳：李さんが東京に行くか、あるいは、張さんが広島に来るか？

(95)は選択疑問文である。Yes／No 疑問文の疑問マーカー“吗（か）”を使えず、“还是（あるいは／または）”を使っている。それは名詞句に絞って聞くのではなく、選択肢である文に絞って聞くのである。それに対して、回答は前文である、あるいは後文である。

以上の分析を踏まえて、“吗”のある Yes／No 疑問文は文の中のある名詞句に絞る前提の下で文全体について聞くことが分かる。そこで、“吗”の使用特徴を意味論的に抽象してまとめると、次のようになる。

(96) [　[$_{IP}$ ……NP……]　吗] =

λx ［〖IP(x)〗（〖NP〗）∨¬〖IP(x)〗（〖NP〗）］

4.4 第 4 章のまとめ

本章はそれぞれ統語論と意味論の立場から、主に主文文末にある「か」及び“吗”を考察した。

「か」について、統語論では、主文文末にある「か」は疑問の「か」と感嘆の「か」にわけて、前者は ForceP であり、後者は ModP であると指摘した。また、選言の「か」に非顕在的な情報の提供者を設定し、「か」が表すモダリティに判断者がいると主張した。「か」が持っている知覚素性［sen］は［Spec Mod′］／［Spec Force′］に上昇した情報の提供者が持つ［sen］をチェックした結果、「か」の判断者インデックスは情報の提供者のインデックスと一致するようになる。それらは［Spec SA］のゼロ代名詞(pro)によって聞き手／話し手に制限されている。

意味論では、［Spec SA］のゼロ代名詞(pro)は聞き手である場合、選言の「か」は疑問を表し、文の中でフォ―カスされた WH 疑問詞か名詞句は普通の値を取り、［Spec SA］のゼロ代名詞(pro)は話し手である場合、選言の「か」は感嘆を表し、文の中でフォ―カスされた WH 疑問詞か名詞句は予想外の値（極値）を取ると主張した。

“吗”については、統語論的には疑問の「か」と似ており、ForceP を投射すると指摘し、また、それ自身が表す選言には非顕在的な情報の提供者と、疑問のモダリティが必要である判断者がいると主張した。そして、“吗”が持っている知覚素性［sen］は［Spec Force′］に上昇した情報の提供者 DP が持つ［sen］をチェックした結果、“吗”の判断者インデックスは情報の提供者 DP のインデックスと一致するようになる。それらは［Spec SA］のゼロ代名詞 (pro) によって聞き手に制限されているとまとめた。意味論では、“吗”は文の中での名詞句をフォ―カスとする前提の下で文全体について質問するものであると主張し、その意味論的表示は［［$_{IP}$ ……NP……］吗］=λx［〖IP(x)〗（〖NP〗）∨¬〖IP(x)〗（〖NP〗）］とまとめた。

以上は主に文末終助詞の「か」及び“吗”を考察した。感嘆を表す文末終助詞は「か」の他に、「だろう」がある(97)。

(97) なんて美しい人なのだろう。

(98) 現時点では、田中さんはアメリカにいるだろう。

しかし、「だろう」は感嘆だけを表すわけではなく、場合によって、推測を表すことができる。例えば、(98)において、「だろう」は推測を表す。

感嘆の「か」と疑問の「か」は同じ選言であると本章で考察したように、感嘆の「だろう」と推測の「だろう」には関連性があるかは今後の課題として残したい。

第 5 章 結論と今後の展望

5.1 本研究のまとめ

言語学では、1980 年代から統語論・意味論の立場から WH 移動や WH 疑問詞、文末終助詞などについての研究が盛んに行われた。本研究はこのような研究背景を踏まえて、中日両言語における疑問文と文末終助詞に対照研究を行った。疑問文は、主に中日両言語の「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文を中心に考察した。文末終助詞は、重要な文末終助詞の「か」とそれに対応している“吗”を検討した。具体的には以下の通りである。

「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文については、本章は日本語・中国語における構文の差を考察対象にしたが、それは会話環境によって意味が変化しないので、語用論との関係は薄い。したがって、語用論の立場から研究する必要がないので、統語論・意味論の立場のみから考察を行った。

日本語多重 WH 疑問文では、目的語は必ず付加部の左側にある。たとえば、WH 句が二つある（目的語「何」と付加部「なぜ」）場合、目的語「何」は付加部「なぜ」の左に生起しなければならない。つまり、「なぜ」を含む日本語多重 WH 疑問文において、疑問詞の先行関係は固定している。即ち、項の疑問詞（「誰が」「何を」）が「なぜ」よりも一つでも先行しなくてはならない。中国語の“为什么（なぜ）”を含む文では、単文においては、“为什么（なぜ）”と他の通常の WH 句は共起できず、競合関係があり、複文になると、競合関係が消える。しかし、この時、“为什么（なぜ）”は狭いスコープでのみ解釈され、他の名詞的な WH 疑問詞は広いスコープでのみ解釈される。このような相違点について、統語論・意味論の立場から考察を行った。結論は以下の通りである。

統語論的には、日本語「なぜ」は他の名詞的な疑問詞と単文において、競合関係がなく、共起できるのは、日本語の名詞的な WH 疑問詞の OP は DP／PP に基底生成し、スコープ範囲以内の疑問詞を無差別束縛して、文頭に移動し、文頭に基底生成する「なぜ」の sentential operator に付加するので、競合関係が起こらないからである。中国語“为什么(なぜ)”は単文において他の名詞的な WH 疑問詞と競合関係があり、共起できないが、複文において競合関係が消えるのは、中国語“为什

么”は sentential operator として文頭に基底生成し、名詞的な WH 疑問詞の OP も基底生成するので、競合関係が起こり、複文の場合、［Spec CP］が二つあるので、それぞれ基底生成して、共起できるからである。意味論的には、両言語において、「なぜ／为什么」は両方とも指示関数の基準になれず、関数による結果だけを表すことができる。すなわち、多重 WH 疑問文において、「なぜ／为什么」は狭いスコープを取り、他の疑問詞は広いスコープを取る解釈しかない。日本語において、指示関数の基準を表す名詞的な WH 疑問詞は先行し、関数による結果を表す「なぜ」は後に出現する。中国語においては、WH 疑問詞の間に先行関係がないが、単文・複文に反映される。

文末終助詞の「か」と“吗”の対照研究については、本論文は二つの立場から考察を行った。それぞれ語用論と通時的発展過程の考察を合わせて研究することと、統語論と意味論を合わせて研究することである。

語用論と通時的発展過程の考察を合わせて文末終助詞の「か」と“吗”を研究することは第 3 章で行った。語用論における発話行為理論を利用して、「か」が「断定型」「表出型」「行為指示型」と三つの種類の文に使え、それぞれ言語の記述機能、表出機能、情報提供の依頼機能を果たしているが、中国語“吗”は「行為指示型」だけに使え、情報提供の依頼機能を果たしていると指摘した。さらに、歴史的発展過程から、そのような相違点が生じる原因を究明した。歴史上、日本語では、係り結びがあったが、係り結びが崩壊するとともに、係り結びの小辞「か」は消失したのではなく、強調された語の後から文末に追いやられた。係り結びは反問、逆接、感嘆などを表すことができるので、文末に追いやられた小辞の「か」も疑問、感嘆などを表せるのは当然のことである。また、中国語の古文では、係り結びの現象がなく、WH 疑問文は WH 疑問詞の前置で、Yes／No 疑問文は文末終助詞で疑問を表す。さらに、“吗”の以前の形“無”は Yes／No 疑問文だけに使っていたので、“吗”は同じように、Yes／No 疑問文だけに使い、「行為指示型」の文だけに属し、情報提供の依頼機能のみを果たすのは不思議ではないと考えられる。

そして、第 4 章で、統語論・意味論の立場から、「か」と“吗”に対照研究を行った。

統語論においては、Hashimoto (2015)が感覚形容詞の人称制限について、会話文とする感覚形容詞述語文において、形容詞の後ろにゼロの Mod を設定し、その

Mod の判断者は［Spec　SA］にあるゼロ代名詞によって話し手に制限されているという分析を行った。その先行研究を踏まえて、感嘆文文末の「か」は表出を表し、「私」だけの感覚しか表出できないという人称制限もあるので、感嘆の「か」は感覚形容詞述語文文末のゼロの Mod と同じ位置にあると考えられる。また、それは ForceP とする疑問の「か」と、［Spec　SA］にあるゼロ代名詞によって話し手・聞き手に制限されると指摘した。

意味論において、文の真理値と関わる要素が「可能世界 world」「時間 time」の他に、「判断者 judge」にも関係があるという Stephenson (2006, 2007)の説を踏まえて、「か」を含む文は情報を話し手から表出する、あるいは、聞き手から要請するので、選言関数である「か」が表すモダリティは情報の提供者と関連性があると考えられ、情報の提供者が聞き手である場合、「か」が疑問を表し、文中の名詞句か WH 疑問詞は聞き手にとって普通の値を取り、情報の提供者が話し手である場合、「か」が感嘆を表し、文中の名詞句か WH 疑問詞は話し手にとって、予想外の値（極値）を取ると指摘した。

5.2 本研究の独自性

本論文は統語論・意味論・語用論及び通時的発展経緯の考察を利用して、中日両言語の「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文及び「か」と“吗”に対照研究を行った。本論文の独自性は以下の通りである。

一、中日両言語における「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文の相違点について、新しい説明の仕方を提案した。この問題については、Takita & Yang (2014) が Probe-Goal システムを利用して、Valuation Condition を提案した。しかし、多重 WH 疑問文には WH 疑問詞が多数あるので、全部に素性チェックを行うことは複雑すぎる。また、名詞的な WH 疑問詞と副詞的な WH 疑問詞を区別せずに素性チェックするのは不適切である。また、中国語の「为什么（なぜ）」文では、名詞句的な WH 疑問詞と疑問 OP にはそれぞれ素性が一つだけであるので、全部の素性をチェックしなければならないという Valuation Condition の条件が満たされていない。したがって、Valuation Condition はうまく機能しない。それに対して、本論文は第 2 章で、意味上で、「なぜ」／“为什么”は両方とも指示関数の基準になれず、関数による結果だけを表すというと同じ本質を持っているが、構造上では、日

本語の名詞句的な WH 疑問詞と中国語の名詞的な WH 疑問詞の疑問 OP の基底生成位置が異なるので、「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文の相違点が現れたからであると新しい説明の仕方を提案した。この新しい説明の仕方は Valuation Condition より簡単であり、複雑な言語現象を明確に説明できる。

二、従来、進んでいなかった「か」／“吗”の対照考察では、本論文は第 3、4 章で、語用論、通時的発展過程への考察、統語論及び意味論の立場から幅広く対照研究を行った。“吗”については、それが文の中のある名詞句に絞ることを前提として、文全体をフォーカスとして質問することを提案した。また、WH 疑問文は WH 疑問詞の移動によって疑問を表し、Yes／No 疑問文は文末終助詞の出現によって疑問を表すという中国語古文の疑問表現システムを発見した。

三、「か」については、名詞句及び疑問文にある「か」は選言であるという先行研究を踏まえて、話し手・聞き手の要素を考慮し、疑問文の「か」が聞き手にとって普通の値を取り、感嘆の「か」が話し手にとって予想外の値（極値）を取ると主張し、より包括的に感嘆の「か」も選言であるとまとめた。つまり、「か」が表すモダリティに情報の提供者（聞き手・話し手）パラメーターを加えることを通して、感嘆の「か」も含む日本語すべての「か」が選言であると統一な説明ができ、一定程度、選言の概念を拡張した。

5.3 本研究の意義

言語研究は言語の様々な現象への考察を通して、言語の本質を究明することである。言語の対照研究とは、異なる言語の背後に潜む規則性を発見することである。モダリティに関わる要素として、疑問文における移動現象および疑問や感嘆のモダリティを表す表現はどの言語においても重要な要素である。それに対する対照研究を通して、両言語における疑問や感嘆のモダリティなどがどのように示されるかがより明確になった。

本論文は疑問文、文末終助詞を考察対象にして研究した。本研究を通して、中国語・日本語における疑問文と文末終助詞、特に、「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文の構文特徴、文末終助詞の「か」と“吗”の特徴がより明確になった。疑問文と文末終助詞は目に見える言語現象であるが、その背後に目に見えない WH 移動などの言語規則が潜んでいるので、言語間で差が生じやすいと考えられ

る。そのため、日本語・中国語の疑問文・文末終助詞を考察することは言語学的意義が認められるとともに、非母語話者に対する日本語・中国語教育にも必要な情報を提供することにつながることが期待できる。例えば、日本語疑問文文末にも感嘆文文末にも「か」が現れることは、日本語学習者にとって、理解しにくいことだと思われるが、それに対して聞き手・話し手のパラメーター要素を考慮し、日本語疑問・感嘆のシステムは同じであり、どちらも選言の「か」によると説明すると理解しやすくなる。

5.4 今後の展望

本論文は「なぜ」／“为什么”を含む多重 WH 疑問文が代表とする疑問文と、「か」と“吗”が代表とする文末終助詞に対照研究を行った。日本語感嘆の「か」は文末にあり、表出を表し、「私」だけの感覚しか表出できないという人称制限がある。このような人称制限は三人称小説の地の文でもなくならないので、絶対人称制限と呼ぶ。絶対人称制限を持っている感嘆の「か」は目に見える形で顕在的である。

同じように、下の(1) (2)が示すように、日本語感覚・感情形容詞述語文も会話文において「私」だけの感覚しか表すことができない。しかし、この感覚・感情形容詞述語文による人称制限は三人称小説の地の文では解除される。ここで、言語の環境によって解除される人称制限は相対人称制限と呼ぶ。この相対人称制限について論じた文献は多数ある。例えば、国広 (1965)、寺村 (1971)、Kamio (1995)、東 (1997)、 Tenny (2006)、Fujii (2006, 2007)、Hashimoto (2015) などである。その中で詳細に相対人称制限問題を論じて解決したのは Hashimoto (2015)である。

(1) 私は嬉しい。　　（国広 1965: 82）
(2) *彼は嬉しい。　　（国広 1965: 82）

Hashimoto (2015)は日本語感覚形容詞述語文文末にゼロのモダリティを設定し、経験者パラメーターを利用して、日本語感覚形容詞に現れた人称制限を説明した。相対人称制限を持っているゼロのモダリティは目に見えない形で非顕在的である。絶対人称制限と相対人称制限はそれぞれ顕在的なモダリティ、非顕在的なモダリ

ティによって表されており、それらにはどのような関連性があるかは今後の課題として残したい。

また、日本語の人称制限は文末にあるモダリティと関わっている形で、head-final の特徴と関連するのとは異なり、中国語においては、人称制限現象は副詞の“真”によって表される(3) (4)。

(3) 我　真　开心。
Wo　zhen　kai xin
私　とても　嬉しい
日本語訳：（私は）嬉しい。

(4) *他　真　开心。
Ta　zhen　kai xin
彼　とても　嬉しい
日本語訳：*彼は嬉しい。

(3)は副詞の“真”によって、話者「私」の心理状態を表出している。副詞の“真”は話者だけの感覚を表出することができるので、(4)は非文である。“真”は表出を表す時、主語（主題）の後に、形容詞の直前に現れるので、統語構造上では、モダリティと関連する機能的主要部と把握することも可能である。このような中国語のモダリティ表現が文末モダリティに関わる日本語の人称制限とどのような関連性があるかについても今後の課題として残したい。

参考文献

英語文献：

Ambar, Manuela (1999) Aspects of focus in Portuguese. In: Laurie Tuller, and George Rebuschi (eds.) *The Grammar of Focus*, 23-54. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Ambar, Manuela (2003) Wh-Asymmetries. In: A.-M. Di Sciullo (ed.) *Asymmetry in Grammar, Vol.1: Syntax and Semantics*, 209-249. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Austin, John Langshaw (1962) *How to Do Things with Words*. Oxford: Oxford University Press（邦訳：坂本百大訳（1978）『言語と行為』大修館書店）

Ballmer, Thomas, and Brennenstuhl Waltraud (1981) *Speech Act Classification*. Heidelberg: Springer.

Beck, Sigrid (1996) Quantified structures as barriers for LF movement. *Natural Language Semantics* 4(1): 1-56.

Beck, Sigrid (2006) Intervention effects follow from focus interpretation. *Natural Language Semantics* 14(1): 1-56.

Beck, Sigrid, and Shin-Sook Kim (1997) On *wh*- and operator scope in Korean. *Journal of East Asian Linguistics* 6(4): 339-384.

Chao, Yuen Ren (1968) *A grammar of spoken Chinese*. Berkeley: University of California Press.

Cheng, Lisa Lai-Shen (1991) *On the Typology of Wh-Questions*. Ph.D. dissertation. MIT.

Chomsky, Noam (1993) A minimalist program for linguistic theory. In: Kenneth Hale, and S.J. Keyser (eds.) *The View from Building 20*, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (1994) Bare phrase structure, *MIT Occasional Papers in Linguistics 5,* Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (1995a) Categories and transformations. *The minimalist program*, 219-394. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (1995b) Bare phrase structure. In: Gert Webelhuth (ed.) *Government and*

binding theory and the minimalist program, 383-439. Oxford: Basil Blackwell.

Chomsky, Noam (1995c) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In: Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. In: Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam, and Lasnik Howard (1993) The theory of principles and parameters. In: Joachim Jacobs, Arnim von Stechow, Wolfgang Sternefeld, and Theo Vennemann (eds.) *Syntax: An International Handbook of Contemporary Research*, 506-569. Berlin: Walter de Gruyter.

Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. New York: Oxford University Press.

Egan, Andy, Hawthorne John, and Weatherson Brian (2005) Epistemic modals in context. In: Gerhard Preyer, and Georg Peter (eds.) *Contextualism in philosophy: Knowledge, meaning and truth*, 131-168, Oxford University Press.

Erlewine, Michael Yoshitaka (2016) Low sentence-final particles in Mandarin Chinese and the Final- over-Final Constraint. *Journal of East Asian Linguistics* 26(1): 37-75.

Fujii, Tomohiro (2006) Evidentiality and the distribution of OC PRO.In: Donald Baumer, David Montero, and Michael Scanlon (eds.) *Proceedings of the 25th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 159-167. Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project. 234.

Fujii, Tomohiro (2007) Controlling Japanese experiencer. *Nanzan Linguistics: Special Issue 1, Vol. 2,* 1-17.

Fukushima, Tatsuya (2005) Japanese continuative conjunction ga as a semantic boundary marker. *Language and Communication* 25(1): 81-106.

Gärtner, Hans-Martin, and Steinbach Markus (2006) A Skeptical Note on the Syntax of Speech Acts and Point of View. In: Brandt Patrick, and Eric Fuß (eds.) *Form, Structure, Grammar*, 213-222.Berlin: Akademie-Verlag.

Gill, Kook-Hee, Harlow Steve, and Tsoulas George (2004) Connectives, Indeterminates,

and Quantificational Variability, In: O. Bonami, and P. C. Hofherr (eds.) *Empirical Issues in Formal Syntax and Semantics* 5, 75-88.

Haider Hubert (1986) Affect 'α': a replay to Lasnik and Saito, 'On the nature of proper government'. *Linguistic Inquiry* 17(4): 113-125.

Hagstrom, Paul (1998) Decomposing questions. Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, MA.

Hagstrom, Paul (2004) Particle Movement in Sinhala and Japanese. *Studies in Natural language and Linguistic Theory* 61: 227-252.

Hamblin, Charles Leonard (1973) Questions in Montague Grammar. *Foundations of Language* 10: 41-53.

Harada, Yasunari, and Honda Kumiko (1997) Quantification without Quantifier: A Note on Universal Quantification with MO in Japanese. *ILT Bulletin* 52: 35-56, Waseda University.

Harada, Yasunari, and Honda Kumiko (1998) Quantification in Japanese II: Universal and Existential Quantification with DE-MO. *ILT Bulletin* 53: 1-42, Waseda University.

Harada, Yasunari, and Honda Kumiko (1999a) Quantification in Japanese III: Scalar Implicature in Universal Quantification with DE-MO. *ILT Bulletin* 54: 37-69, Waseda University.

Harada, Yasunari, and Honda Kumiko (1999b) How Quantification Emerges in Natural Languages. In *Proceedings of the Joint Conference of the 2nd International Conference on Cognitive Science and the 16th Annual Meeting of the Japanese Cognitive Science Society*, 424-429, Tokyo.

Harada, Yasunari, Honda Kumiko, and Noguchi Naohiko (1999) Scalar Implicature with mo. In *Proceedings of the 5th Annual Meeting of the Association for Natural Language Processing*, 321-324, Tokyo.

Harada, Yasunari, and Noguchi Naohiko (1992) On the Semantics and Pragmatics of dake (and only). In: C. Barker, and D. Dowty (eds.) *Proceedings of the Second Conference on Semantics and Linguistic Theory*, 125-145, Ohio State University Press.

Hashimoto, Masashi (2015) *A syntactic-semantic analysis of experiencer restriction in Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts Amherst.

Haugh, Michael (2008) Utterance-final conjunctive particles and implicature in Japanese

conversation *Pragmatics* 18(3): 425-451.

Hiraiwa, Ken (2001) Multiple Agree and the defective intervention constraint in Japanese. In: Ora Matushansky, Albert Costa, Javier Martin-Gonzalez, Lance Nathan, and Adam Szczegielniak (eds.) *Proceedings of the HUMIT 2000*, *MIT Working Papers in Linguistics 40*, 67-80. Cambridge, MA: MITWPL.

Hiraiwa, Ken (2005) *Dimensions of symmetry in syntax: Agreement and clausal architecture*. Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, MA.

Hiraiwa, Ken, and Ishihara Shinichiro (2002) Missing links: cleft, sluicing, and 'no da' construction in Japanese. In *Proceedings of Humit 2001, MIT Working Papers in Linguistics* 43, 35-54. Cambridge, MA: MITWPL.

Hoji, Hajime (1985) *Logical Form constraints and configurational structures in Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Washington, Seattle.

Huang, C.-T. James (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*. Ph.D. dissertation, MIT.

Jayaseelan, K.A. (2001) Questions and Question-Word Incorporating Quantifiers in Malayalam. *Syntax* 4(2): 63-93.

Kamio, Akio (1995) Territory of Information in English and Japanese and psychological utterances. *Journal of Pragmatics* 24(3): 235-264.

Kawamura, Tomoko (2007) *Some interactions of focus and focus sensitive elements*. Ph.D. dissertation, Stony Brook University, Stony Brook, New York.

Kim, Shin-Sook (2002) Intervention effects are focus effects. *Japanese/Korean Linguistics* 10: 615-628.

Kim, Shin-Sook (2006) Questions, focus, and intervention effects. In: Susumu Kuno, Ik-Hwan Lee, John Whitman, Joan Maling, Young-Se Kang, Peter Sells, and Hyang-Sook Sohn (eds.) *Harvard studies in Korean linguistics 11*, 520-533, Cambridge, MA: Department of Linguistics, Harvard University.

Ko, Heejeong (2005) Syntax of *why*-in-situ: Merge into [Spec, CP] in the overt syntax. *Natural Language and Linguistic Theory* 23(4): 867-916.

Ko, Heejeong (2006) On the structural height of reason *wh*-adverbials: Acquisition and consequences. In: Lisa Cheng, and Norbert Corver (eds.) *Wh-movement: Moving on*,

319-349. Cambridge, MA: MIT Press.

Koizumi, Masatoshi (1991) *Syntax of Adjuncts and the Phrase Structure of Japanese.* MA thesis Ohio State University, 3(3): S23.

Koizumi, Masatoshi (1993) Modal phrase and adjuncts. In: Patricia M. Clancy (ed.) *Japanese/Korean Linguistics* 2, 409-428. Stanford, CA: CSLI Publications.

Kölbel, Max (2004a) Faultless disagreement. In *Proceedings of the Aristotelian Society* 104: 53-73.

Kölbel, Max (2004b) Indexical relativism versus genuine relativism. *International Journal of Philosophical Studies* 12(3): 297-313.

Kuroda, Sige-Yuki (1973) Where epistemology, style, and grammar meet: a case study from Japanese. In: Stephen R. Anderson, and Paul Kiparsky (eds.) *A Festschrift for Morris Halle*, 377-391. New York, NY: Holt, Rinehart and Winston.

Lakoff, George (1971) On Generative Semantics, In: Leon A. Jakobovitz, and Danny D.Steinberg (eds.) *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics, and Psychology*, 232-296. Cambridge.

Lasersohn, Peter (2005) Context dependence, disagreement, and predicates of personal taste. *Linguistics and Philosophy* 28: 643-686.

Lasnik, Howard, and Saito Mamoru (1984) On the Nature of Proper Government. *Linguistic Inquiry* 15(2): 235-289.

Lasnik, Howard, and Saito Mamoru (1992) *Move Alpha*: *Conditions on Its Application and Output*. Cambridge, MA: MIT Press.

Lasnik, Howard (1995) Verbal morphology: Syntactic structures meets the Minimalist Program. In: Paula Kempchinsky, and Héctor Campos (eds.) *Evolution and revolution in linguistic theory: Essays in honor of Carlos Otero*, Washington, D.C.: Georgetown University Press.

Lasnik, Howard (1999) *Minimalist analysis*. Oxford: Blackwell.

Li, Charles N., and Thompson Sandra A. (1981) *Mandarin Chinese: A functional reference grammar*. Berkeley: University of California Press.

Lin, Jo-Wang (1992) The Syntax of *zenmeyang* 'how' and *weishenme* 'why' in Mandarin Chinese. *Journal of East Asian Linguistics* 1(3): 293-331.

MacFarlane, John (2007) Relativism and disagreement. *Philosophical Studies* 132: 17-31.

Nakanishi, Katsuaki (2006) A Unified Approach to Questions, Quantifiers, and Coordination in Japanese. In: Stefan Muller (ed.) *Proceedings of the 13th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar, Varna*, 268-283. Stanford, CA: CSLI Publications.

Nishigauchi, Taisuke (1990) *Quantification in the theory of grammar*. Dordrecht: Kluwer.

Oku, Satoshi (2003) A minimalist theory of LF copy. *The minimalist parameter: Selected papers from the Open Linguistics Forum, Ottawa, 21-23 Mar. 1997*, 281-294. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Ono, Hajime (2006) *An Investigation of Exclamatives in English and Japanese: Syntax and Sentence Processing*. Ph.D. dissertation. University of Maryland.

Paul, Waltraud (2014) Why particles are not particular: Sentence-final particles in Chinese as heads of a split CP. *Studia Linguistica* 68(1): 77-115.

Paul, Waltraud (2015) *New perspectives on Chinese syntax*. Berlin: De Gruyter Mouton.

Pesetsky, David (2000) *Phrasal Movement and Its Kin*.Cambridge, MA: MIT Press.

Rett, Jessica (2008) A degree account of exclamatives. In Tova Friedman & Satoshi Ito (eds.) *Proceedings of the 18th Semantics and Linguistic Theory Conference,* 601-618. Ithaca, NY: Cornell University.

Rizzi, Luigi (1997) The fine structure of the left-periphery. In: Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: A Handbook of Generative Syntax*, 281-337. Dordrecht: Kluwer.

Rizzi, Luigi (2001) On the position "Int(errogative)" in the left periphery of the clause. In: G. Cinque, and G. Salvi (eds.) *Current studies in Italian syntax*, 287-296. Oxford: Elsevier.

Pollard, Carl J., and Yoo Eun Jung (1998) A Unified Theory of Scope for Quantifiers and Wh-phrases. *Journal of Linguistics* 34(2): 415-445.

Richard, Mark (2004) Contextualism and relativism. *Philosophical Studies* 119: 215-242.

Rosen, Kenneth H. (2007) *Discrete Mathematics and Its Applications* (Seventh Edition). New York: McGraw-Hill.

Sadock, Jerry, and Zwicky Arnold (1985) Speech Act Distinctions in Syntax. In: Timothy

Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description I: Clause Structure*, 155-196. Cambridge: CUP.

Saito, Mamoru (1994) Additional-*wh* effects and the adjunction site theory. *Journal of East Asian Linguistics* 3(3): 195-240.

Saito, Mamoru (2004) Some Remarks on Superiority and Crossing. In: Huang-Jin Yoon (ed.) *Proceedings of the 4th GLOW in Asia 2003*, 571-595. Seoul, Korea: Hankook.

Saito, Mamoru (2010) On the nature of the complementizer *to*. *Journal of Japanese Linguistics* 26(1): 85-100.

Saito, Mamoru (2012) Sentence Types and the Japanese Right Periphery. In: G. Grewendorf, and T. E. Zimmermann (eds.) *Discourse and Grammar 112*, 147-175. Berlin: Walter de Gruyter.

Saito, Mamoru, and Haraguchi Tomoko (2012) Deriving the cartography of the Japanese right periphery: The case of sentence-final discourse particles. *Iberia* 4: 104-123.

Speas, Peggy, and Tenny Carol (2003) Configurational properties of point of view roles. In: Anna Maria Di Sciullo (ed.) *Asymmetry in Grammar: Volume 1: Syntax and Semantics*, 315-344. Amsterdam: John Benjamins.

Searle, John R. (1969) *Speech Acts.* Cambridge: Cambridge University Press（邦訳：坂本百大・土屋俊訳 (1986).『言語行為』勁草書房）

Searle, John R. (1979) *Expression and Meaning: studies in the Theory of Speech Act.* Cambridge: Cambridge University Press.（邦訳：山田友幸監訳 (2006).『表現と意味』誠信書房）

Speas, Margaret (2004) Evidentiality, Logophoricity, and the Syntactic Representation of Pragmatic Features. *Lingua* 114(3): 255-276.

Stephenson, Tamina (2006) A parallel account of epistemic modals and predicates of personal taste. In: E. Puig-Waldmüller (ed.) *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 11, 583-597. Barcelona: Universitat Pompeu Fabra.

Stephenson, Tamina (2007) Judge dependence, epistemic modals, and predicates of personal taste. *Linguistics and Philosophy* 30(4): 487-525.

Szabolcsi, Anna (2015) What do quantifier particles do?. *Linguistics and Philosophy* 38(2): 159-204.

Takita, Kensuke, and Yang Barry C.-Y. (2014) On Multiple Wh-questions with 'Why' in Japanese and Chinese. In: M. Saito (ed.) *Japanese Syntax in Comparative Perspective*, 206-227, New York: Oxford University Press.

Tenny, Carol L. (2006) Evidentiality, experiencers, and the syntax of sentience in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15(3): 245-288.

Tsai, Wei-Tien Dylan (1994) *On Economizing the Theory of A-Bar Dependencies*. Ph.D. dissertation, MIT.

Tsai, Wei-Tien Dylan (1999a) On Lexical Courtesy. *Journal of East Asian Linguistics* 8(1): 39-73.

Tsai, Wei-Tien Dylan (1999b) The Hows of *Why* and the Whys of *How*. In: Francesca Del Gobbo, and Hidehito Hoshi (eds.) *UCI Working Papers in Linguistics* 5, 155-184. Irvine: Linguistics Department, University of California at Irvine.

Tsai, Wei-Tien Dylan (2008) Left Periphery and *How-Why* Alternations. *Journal of East Asian Linguistics* 17(2): 83-115.

Uegaki, Wataru (2016) Japanese alternative questions and a unified in-situ semantics for ka. *The 12th Workshop in Altaic Formal Linguistics (WAFL 12)*. New Britain: Central Connecticut State University.

Vanderveken, Daniel (1990) *Meaning and Speech Acts* Volume 1.Cambridge: Cambridge University Press.（邦訳：久保進監訳 (1997).『意味と発話行為』ひつじ書房）

Vanderveken, Daniel (1994) *Principles of speech act theory*. Montréal: Université du Quebec a. Montréal（邦訳：久保進訳注 (1995).『発話行為理論の原理』松柏社）

Watanabe, Akira (2002) Loss of Overt Wh-movement in Old Japanese, In: David W. Lightfoot (ed.) *Syntactic Effects of Morphological Change*, 179-195. New York: Oxford University Press.

Watanabe, Akira (1992a) *Wh*-in-situ, Subjacency, and Chain Formation. *MIT Occasional Papers in Linguistics* 2, 119-124. Cambridge, MA: MITWPL.

Watanabe, Akira (1992b) Subjacency and S-structure Movement of *Wh*-in-situ. *Journal of East Asian Linguistics* 1(3): 255-291.

Watanabe, Shin (1994) (Anti-) Superiority as Weak Crossover. In: Hiroyuki Ura, and Masatoshi Koizumi (eds.) *Formal Approaches to Japanese linguistics* 1, 393-411.

Cambridge, MA: MITWPL.

Williams, Edwin (2003) *Representation Theory*, Cambridge, MA: MIT Press.

Yatsushiro, Kazuko (2001) The Distribution of mo and ka and its Implications. In: M. C. Cuervo, D. Harbour, K. Hiraiwa, and S. Ishihara (eds.) *Formal Approaches to Japanese Linguistics* 3, 181-198, MIT.

日本語文献:

張恵芳 (2010) 「自然会話における「デハナイカ」と“不是…吗”の表現機能の違い」『言語学論叢オンライン版』3, 74-89.

遠藤喜雄 (2010) 「終助詞のカートグラフィー」長谷川信子（編）『統語論の新展開と日本語研究—命題を超えて』東京: 開拓社, 67-94.

東　弘子 (1997) 「現代日本語における感情形容詞文をめぐる統語現象:感情主の人称の制約現象を中心に」. 博士論文, 名古屋大学.

船城俊太郎 (1968) 「平安時代漢文訓読疑問詞疑問文の一文型」『国文学言語と文芸』58, 17-26.

磯部佳宏 (1990) 「中古和文の要説明疑問表現－『源氏物語』を資料として」『日本文学研究』26, 梅光女学院大学, 165-176.

金水　敏 (1989) 「「報告」についての覚書」『日本語のモダリティ』東京: くろしお出版, 121-129.

久保　進 (2014) 『言語行為と調整理論』. 東京:ひつじ書房

国広哲弥 (1965) 「日英温度形容詞の意義素の構造と体系」『国語学』60, 74-84.

森山卓郎 (1997) 「「独り言」をめぐって-思考の言語と伝達の言語」川端善明・仁田義雄（編）『日本語文法体系と方法』東京: ひつじ書房, 173-188.

村田明 (2011) 「優位性効果と指示関数」『信州大学人文社会科学研究』5, 165-174.

中村捷・金子義明・菊池朗 (2001) 『生成文法の新展開－ミニマリスト・プログラム』, 東京: 研究社.

外池滋生 (2014a) 「日本語の疑問文と「か」と「も」「日英語における多重 WH 構文の 扱いと島の制約」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究　研究報告書(2)』, 61-75.

外池滋生 (2014b) 「演算子-変項構造と WH 疑問文」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書(1)』, 21-48.
高原脩・林宅男・林礼子 (2002)『プラグマティックスの展開』. 東京:勁草書房.
寺村秀夫 (1971) 「‘タ’の意味と機能−アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ」『岩倉具実教授退職記念論文集−言語学と日本語問題』, 東京：くろしお出版, 331-358.
山岡政紀 (2014) 「久保進『言語行為と調整理論』」『語用論研究』16, 67-76.
吉田光演 (2000) 「ドイツ語の多重WH疑問文の統語的・意味論的考察」『仲井間憲児先生還暦記念論文集』, 209-250.

中国語文献:
王力 (1980)《汉语史稿(第九卷)》济南：山东教育出版社.
吴福祥 (1997)〈从“VP –neg”式反复问句的分化谈语气词“麽”的产生〉《中国语文》156 , 44-54.
钟兆华 (1997)〈论疑问语气词“吗”的形成与发展〉《语文研究》62, 1-8.
朱德熙 (1982)《语法讲义》北京：商务印书馆.

コーパス:
青空文庫 http://www.aozora.gr.jp/.
『傾城の恋』張愛玲（池上貞子訳）, 平凡社, 1995 年 3 月 20 日版.
《倾城之恋》张爱玲，花城出版社, 1997 年 3 月 1 日版.
《祖堂集》南唐・静・筠二禅德（编）, 新文丰出版公司, 中華民国 76 年（1988 年）6 月台一版.
《蟹工船》小林多喜二（叶渭渠訳）, 人民文学出版社, 1973 年 10 月第 1 版.
《南華真経注疏解経 33 巻》（晋）郭象注, （唐）玄英疏, 中野宗左衛門, 萬治 4 年（1661）［出版地不明］.
《論語注疏》（魏）何晏等注 ;（宋）邢昺疏 ; 張文彬分段標點, 台北:新文豊出版公司, 2001 年 6 月.
BCC http://bcc.blcu.edu.cn/
CCL http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/

謝辞

本研究を遂行し学位論文をまとめるにあたり、多くのご支援とご指導を賜り、辛抱強く見守ってくださいました、指導教授である吉田光演先生に深く感謝いたします。吉田先生とのディスカッションに恵まれて、アイデアが次々と浮かんできました。吉田先生がいらっしゃらなければ、博士論文を完成させることも、これまで研究を続けることもできませんでした。四年間にわたって、時には厳しくご指導いただき、また、時には優しく励ましてくださったことは、私にとって印象深い経験であり、今後の努力の糧になるものであります。

また、町田章先生には、本論文の審査委員としてご指導いただいただけでなく、ゼミに参加させていただき、数多くの有益なアドバイスをいただきました。また、論文投稿や学会発表の際に貴重なご意見をいただき、大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

そして、本論文の審査委員である荒見泰史先生、岩崎克己先生にも論述の仕方や例文の判断などについて、多くのご助言を頂き、深く感謝しております。

研究室の皆様にも大変お世話になりました。先輩の赤木祐美子さんには、論文の文法チェックをしていただき、先輩の合田優子さんには、学会発表の際に多くの助言をいただき、また、後輩の後藤紗季さんには、例文の判断について意見交換をすることができ、良い刺激を受けました。この場を借りて感謝の意を表します。また、後輩の蘇丹さん、李素楠さん、王凰翔さんなど他の吉田ゼミの方々にも、貴重な意見をいただき、また、精神的にも支えられてきました。ありがとうございました。

中国留学基金委員会から高水平建設大学奨学金をいただき、経済的支援をいただき、留学生活を円滑に過ごすことができました。感謝申し上げます。

最後に、これまで自分の思う道を進むことに対し、温かく見守ってくださった両親に対しては深い感謝の意を表します。また、父が病気になった時、私の代わりに看病してくれた弟と妹に感謝します。生活面でも精神的にも私を励まし続けてくれた夫 馬亜平に心から感謝します。